
平凡と理不尽が刻む物語

ごろーん・・・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡と理不尽が刻む物語

【Nコード】

N7323N

【作者名】

ごろーん・・・

【あらすじ】

ナギの親友リン・イーストと共に旅立ったナギ！物語がいま動き出す！？リンが加わった『紅き翼』、彼はその平凡で理不尽極まらない世界でどう生き抜き、なにを思うのか。別段特別でない、少し平均以上の彼と『紅き翼』のメンバーがおりなす物語。

プロローグ（前書き）

何回も投稿している気がするけど！そんなこと気にしない！今回は自分的に気合入ってます！

プロローグ

この世は理不尽の塊だった。
俺は理不尽の隣で理不尽に振り回され。
とにかく、理不尽だった。

これは僕の理不尽な話

よろしく、僕の名前はリン・イーストです。
これが、平凡と理不尽の出会い。

プロローグ

ここはウェールズの山奥。
え？ウェールズがどこかって？そんなの自分で調べてください。
僕は今忙しいんです、ただいま僕は

「ちよつ、いてえよリン！」

「少しは我慢してくださいナギさん」
ナギの手当てをしています。

「まったく、ナギさんは何回ケンカすればいいんですか？ 手当てをしている僕の身にも成ってください」

「しょうがないだろ、あっちから突っかかってくるんだからよ」

「そいつのは話し合いで解決とかしてみましようよ・・・」

「できねえよ、んなこと」

いや、やってみてもないでしょう、あなた…

「はあ…いいですよ、僕ももう慣れましたし」

半ば呆れながらため息を吐く。

「し？」

「ナギさんとして楽しいですから」

「っへ！ そうだろ、人生楽しくなきゃな！」

満面の笑みで返してくれるナギさん。

「そうですね」

僕がナギとであったのは僕が魔法学校に入ったときの事だ。

その当時の僕は根暗で引っ込み思案で、所謂暗い生徒。

そんな僕は当然のように虐められ、そんなとき来てくれたのがナギさんでした。

一応言っとナギさんは僕の一つ上、先輩です。

ナギさんが僕を助けてくれました。

そのときから僕は明るくなり、同時に世界観が明るくなりました。
そんなナギさんに僕は心に誓ったんです。

いつでも一緒にいると。どこに行っても僕は味方でありたいと。あ
なたの傍であなたとともにいたいと。

「おい、ナギ・スプリングフィールド！校長が呼んでる！早く来い
！」

一人の教師が怒鳴ってくる。

「待ってください、ナギさんの怪我の手当てがまだ終わってません」

「またお前か！いつも一緒にいるなイースト！お前も同罪するぞ！」

「リンは関係ない！分かった今行く！・・・少し行ってくる」
そう言ってナギは教師と一緒に行ってしまった

少し経つとナギが帰ってきました。

「リン！俺はここをやめる！」

「へ？まっ、何を言ってるんですか！」

「俺は学校を出る！旅に出るんだ！自由に！お前も来るか、リン？」

「僕は・・・」

「無理にとは言わない。お前にもお前の生活があるだろうし・・・」

僕は、そう　　誓ったんだ・・・

「僕も行きます。ナギさんが怪我をしたら誰が手当てするんですか？」

「っは、そうだったな・・・よし、すぐ準備しろよ！すぐ行くからな！」

「分かりました！」

そう言って、僕は家に戻り、準備をした・・・

まずは、杖、ロープ、魔法液などの魔法使いの必需品

そして、絆創膏、包帯、消毒液などの手当てをするもの

そして、本は娯楽ですね。

そして、親に書く置きを置いていく行く。

『母さん父さんへ』

僕はナギさんと旅に出ます。いつ帰ってくるかは知らないけど、心配しないでください。なにせ、あのナギさんと一緒なんです。心配ありません。

ナギさんを一人で行かすと危ないから、僕が付いていきます。これは僕の意志でナギさんに無理矢理ではありません。彼を責めないでください。また

いつか会う日まで。

リン・イースト』

そして、僕は旅立った。

僕たちは最初に行こうと思ったのは魔法世界だった。

魔法世界　それは魔法使いの世界、旧世界ではないどこか

どこなんだろう？

まあ、そんな事はいいとして、そこにいくにはゲートを通らないといけない。

「ナギさんゲートってどっちですか？」

「知るかよ、そんなこと」

「ですよねえー」

ふうむ、どうしようか？

「じゃあ、ゆつくり探しますか？」

僕は微笑みながら言う。

「そうだな！旅は始まったばかりだからな！」
そうして、旅は始まった。
まずは、ゲート探しから。

目の前には大きな魔方陣、それを囲むような石の祭壇。
まあ、言わなくとも分かるかもしれないが・・・ゲートはすぐに見
つかった。

「ありましたね、ナギさん・・・」

「ああ、ゲートだな・・・」

「早すぎませんかね？」

「ああ、早すぎたな・・・」

「「ぷっ！」」

「「あははは！」」
二人で笑い合った。

こうしているだけで僕は幸せだと感じた。
ウェールズの山奥で家族と過ごすのと同じくらい、ナギさんが俺の
居場所だ。

「ナギさん・・・」

「なんだよ？」

「僕、ナギさんについてきてよかったです」

「俺もお前が付いてきてくれてよかったよ。食べるものに困る事もなさそうだしな!」

「そうですね。これからもよろしくお願いします」

「こっちこそだ!」

・そして、僕等はゲートに足を踏み入れ・・・魔法世界に旅立った・・・

ブログ（後書き）

感想・指摘なんでも感想ください！

第1話―旅は続く、新たな仲間と共に―（前書き）

友達に言われました！書いた後に一回・・・なにをしろと言われたか忘れまして・・・まあ、更正だったかな？

第1話―旅は続く、新たな仲間と共に―

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！魔法の射手！連弾・風の25矢！」

僕は唱えた・・・ナギさんの背中を守るように・・・

「ぐはっ！」

なんとか、相手に当たったようで相手は吹っ飛んでいった・・・

「ふう、よかった・・・」

実のところ僕は平凡だ・・・

ナギさんのように体術に長けているわけでもなく、詠春さんのように剣術もできないし、アルのように重力魔法なんて無理だし、ゼクトさんのようにナギさんに魔法は教えられない。

それでも、ナギさんと一緒に居たいと思う、いたって全てが平凡な僕だった。

「そっちは終わったかリン？」

「終わりましたよ何とか、ナギさん」

「さすがは俺の相棒だな」

「そんな恥ずかしいですよ。それにナギさんに比べれば・・・」

「当たり前えだろ？俺は最強無敵だぜ？」

「そうですね・・・さすが、ナギさんです」

「おうよ！」

僕たちは二人で笑い合った。

え？ほかの人たち？

第2話―旅は続く、新たな仲間と共に―

「おい！お前ら！早く来いよ！」

「ちょっと待つてくれナギ！さっきの戦闘で疲れてるんだ！」

「何行つてんだよ！リンはちゃんと付いてきてるぞ！」

そう、僕たちには仲間ができた

一人は、旧世界の神鳴流剣士、サムライマスターこと近衛詠春。

二人目は、ナギの魔法の師、ゼクト。

三人目は、そこ変態のオーラを纏う魔法使い、アルビレオイマ。

今は5人で旅をしている。

この人たちとの出会いにはいろいろあった・・・そう色々・・・

「リン・・・まさかお前もバグか・・・」

「何を言ってるんですか？僕は平凡です・・・ただ・・・」

「『ただ？』」

「ナギさんに付いていくだけです。」

僕は言う、僕の人生を。僕の存在意義を。

「僕はナギさんにどこまでも着いて行きますよ。たとえ火の中、水の中。誰もがナギさんを拒んだとしても、僕だけはいつまでも。」

「おお、なんだかすごいな・・・」

「さすがは俺の相棒だぜ！お前も見習えよ！」

「まさか、リン・・・あなたは彼のことが好き」ではありません
「なんだ・・・」

アル・・・あなたって人は・・・
ナギさんは恋愛対象ではない・・・と、いうかそれはない・・・
彼のことを信用し、彼に信用され、頼ってほしい・・・それだけだった。

「僕は心に決めただけです・・・僕の羽を預けていいのはナギさん
だけだと・・・僕の居場所は彼にあると・・・」

「なかなか歪んでますね・・・何があっただんですか？」

「何もない・・・ただ、彼が輝いていて、周りが腐っていただけです。」

「そうですか・・・」

付いていくのに理由なんてこれだけで十分だった。

時は少し過ぎ、夕飯・・・

「ふう、今日もうまいわあ」

「そうだな、リンは家庭的でいいな」

「うむ、うまいのお」

「おいしいですね」

「それはありがとうございます。」

上から、ナギ、詠春、ゼクト、アル、僕だ。

今日の夕飯は普通にうさぎ（のようなもの）をシチューに入れて煮ただけなのだが・・・

まあ、ほかの人があまり料理できないので僕がしている。

詠春だけは、ともに料理ができる。特に『鍋』とか言う料理がうまい。

「詠春さん。明日は鍋にしましょう。」

「そうだな、明日は森だし、食材も取れるだろう」
明日の夕飯は決まった。

「ええ、鍋かよ。詠春うるさくなるぞ」

「ナギさん、それぐらい我慢してください。鍋って作る手間が省けて、おいしい一石二鳥な料理なんですよ。」

「まあ、リンがそういうなら。」

「あなたはリンに頼りすぎじゃないですか？」

「んなことねえよ。な、リン」

「そうですよ、アル。もつと頼ってほしいくらいです。」

「あなたは、ナギの世話が好きですね・・・」

「まあ、僕にできるのはそれくらいですから・・・」

「何言ってるんだよ。お前だって強いぞ、なにせ俺の相棒だからな！」

「そんな、みんなに比べたら・・・」

「ええ、そうですよリン。あなたは強いです。（ナギにそこまで付いていけるあなたは強い）」

そんな感じで夕飯はおわる。

SIDEアル

私がナギたちに会ったのは少し前の事でした。

なにやら街中で揉めていたのを目撃したところ、ケン力でした。はい、それはケン力でしたね。もう、魔法使いがやるような事ではありませんでした。

無茶苦茶な身体強化をして殴り飛ばし、投げ飛ばし、蹴り飛ばし。その傍らで立っている少年はケン力をしている子のことをずっと見ている。

きつと、あの二人が仲間ですね。

案の定、その少年はケン力をしているところを後ろから不意打ちをしようとした敵を魔法で叩きのめしました。なかなかな連携でしたね。

その二人が町を離れるのをつけてから数10分のことでした。なんと私が気付かれたのです。

それから、二人の話を聞きました。

旧世界から来た旅人。

ナギ・スプリングフィールド。脅威的な魔力を持ち、無茶苦茶な男。その横に立つ平凡極まりない従者リン・イースト。ナギにすべてをかけた少年。

なかなかおもしろいですね。

という事で私はその二人に同席して旅をすることにしましたのです。

ナギはいつも無茶苦茶で、それについていけるリンがすごいです。リンはナギがすべてだと言いました。

彼は何があつたのでしょうか？

そんなこんなで、仲間もまた増え、ゼクト、ナギの師匠、詠春、常

識を持ったサムライマスター、がパーティーにお加わりしました。
常識人は今の所、私、ゼクト、詠春だけです・・・リンはナギのことなら何でもしますし、ナギはバグですからね・・・

SIDE OUT

次の日が訪れた。

「リン、あなたはナギと契約してるのですか？」
アルが突然聞いてきた。

「ええ、当然してますよ？僕はナギさんの従者ですから。」

「そっいえば、リン。お前まだアーティファクト使った事ないだろ？出してみろよ！」

「分かりました。」

そう言っ僕はポケットからカードを取り出す。

「アデアット」

出てきたのは指輪だった。

「指輪ですね。」

「」「」「あぁ。」

「どう使っんでしょっ？」

「そういうのは本能でどうにかするもんだぜ！」
ナギさん・・・そうなんですか。

「分かりました。本能ですね」

「いや、それはないぞ、リン」

「そうじゃぞ、そういうのは脳に情報が来るはずじゃ・・・」

「ありがとうございますゼクトさん。たしかに、知識がありますね」

「使ってみるよ」

僕を促すナギさん

「はい。『我守らん。我が大切な者達を。』」
そう呟くと、みんなの体がうつすら光る。

「おお！なんかすげえ！体が軽いぜ！」

「たしかに、気も濃くなっている」

「うむ、魔力も増加しているな」

「これは、すごい」

「これは、仲間の強化ですね。次に『我の盾、我を害するものすべてを弾く』」

そう呟くと、周りに一枚の膜が展開される。

「結界ですね」

「強度どれくらいなんだろうな？」

そう言つて、ナギさんは外に出て魔法を唱える。

「来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！雷の暴風！」

「ちよっ！ナギいきなりは！うわああー！！！」

詠春が叫ぶ。アルが汗を流す。ゼクトが顔を引き攣らせる。

しかし、その衝撃は来る事はなかった。

「すっげえー！なかなか強度じゃんかよ！」

そう、攻撃はすべて僕の結界が止めたのだ。

「これぐらい無いと、ナギさんを守れませんから。」

「おう！俺の背中中は任せられるな！」

「僕だけじゃありませんよ？皆さんだっているんです。あなたの背中に傷なんてできませんよ。」

「そうだったな！まあ、一人でもできないけどな！」

「たしかに、そうかもな・・・」

一人疲れたように、呟く詠春

「まあ、バグですからね。」

アルの言うバグ・・・それは理不尽をあらわす言葉。ナギさんにピッタシ。

「うむそつじやな」

それに同意するゼクトさん。

今日もいつも通りの日です。

第1話―旅は続く、新たな仲間と共に―（後書き）

指摘、感想など待っています！

第2話―ナギさんはやっぱ、最強無敵―（前書き）

自己満足で書いてます。更新はきつと亀です。

第2話―ナギさんはやっぱし、最強無敵―

本当は今日の夕飯は鍋だった・・・
しかし、夕飯の前に戦場が訪れた・・・
僕たちはこれから、大戦に首を突っ込む事になったのだ・・・

第2話―ナギさんはやっぱし、最強無敵―

僕たちのパーティーは名前が付いた『紅き翼』。
名前が付いたからって何かが変わるかというと、答えはNOだ。
僕たちは今日も今日とて変わらない日をすごしていた。
歩き、歩き、歩き・・・歩いた。

そして、夜が来る。

僕たちが来ていた森では、戦争が起きていた。
その理由・・・それは魔法無効化能力だ。
オスティア王族に稀に生まれる、子供。
その能力を担うことがある。
今回は少女であった。

そして、今は戦乱のとき。
魔法使い同士の戦いでこの能力がどれほど有利なものだろうか・・・

用は、これをもってさえ居れば相手の魔法が効かないのだ・・・
とてつもなく厄介、そして有利になる。

「黄昏の姫御子！なんたってそんなもん！？」
僕たちは今飛んでいる・・・あの戦場へ・・・

「ナギ！冷静になってください！」

「俺は常に冷静だっつーの！」
ある少女を助けに・・・

向かうところはあの塔・・・
今鬼神兵がつかもうとしている塔

「ナギさん早く行って下さい！『我守らん。我の大切な者達を』」
そう言う、みんなの体が光だし、スピードが上がる・・・

「サンキュー、リン！じゃ、行くぜ！」
僕はナギさんに捕まり、一緒に飛ぶ。
僕が飛ぶと遅いので・・・

ナギさんが鬼神兵を一撃で仕留め、言う

「俺はナギ・スプリングフィールド！！またの名、サウザンドマス
ター！！！」

「紅き翼！！！」

そして、僕たちの熾滅戦が始まった・・・

相手が兎に角多かった。

僕の活躍といえばナギさんやほかの人に降り注ぐ攻撃を弾くことしかない。

「アデアット！『私の盾、我を害するものすべてを弾く』」

鬼神兵の一撃すら弾くこの盾は、きっと僕の思い・・・
僕が強い思いを持てば持つほど・・・強くなる・・・

「僕は・・・ナギさんを守る！」

「『我薙ぎ払う、私の敵全てを』」
そして、放たれる光の豪雨。一本一本が弱くとも、その思いは万にも上る。

下にいる魔法使いを薙ぎ払っていく。
ほかのみんなは空の敵を倒しつつ、ナギさんは鬼神兵を倒す。

圧倒的力量差を見せつけ、僕たち『紅き翼』は勝利した。

少女の名前はアスナと言うらしい。ナギさんに懐いたそうで・・・

「ナギさんお疲れ様です。」

「おお、リン。お前もすごかったじゃんかよ！」

「ナギさんには及びませんよ。僕は自分できることをしたまでです。」

「それが、すごいのですよ、リン」
アルが褒めてくれる。うれしい・・・気がする。

これ以外にも、僕たち『紅き翼』は戦場に出る事が多い・・・偶然
だけど。

とある、夕飯の事だった。その日は鍋。
鍋をする道具は僕がの魔法使いが使う鍋を使います。
まあ、魔法薬なんて調合しないからいいですけど・・・

「トカゲ肉でもうまいのかの？」

「おいしいんじゃないですか？」
ゼクトさんの問いに僕が答える。

そのころ詠春は

「ナギ、おまつ！何肉を先に入れてるんだ！」

「いいじゃねえか、うまいもんから先でよ！ホラホラ」
ナギに鍋を教授しようとしていたが、無理であった。

「バツバカ！火の通る時間差という物があつてだな！って、もう入
れてる！」

「あー、うつせ！うつせーぞえいしゅん！」
と、こんな感じで無視して己が道に行くナギさんです。

「フフ・・・詠春知っていますよ。日本ではあなたのような者を・
」

アルは何を言うんだろうか？

「『鍋將軍』と呼び習わすそうですね！」

「ナベ・シヨウゲン！！」

「わ、分かったよ詠春・・・俺の負けだ・・・今日からお前が鍋將
軍だ」

そんな雑談をしているときの事だった・・・

いきなり剣が地面に刺さった・・・鍋を弾いて・・・

弾かれた鍋はひっくり返り、宙に舞った肉はナギさん、ゼクトさん、

アルに全部取られる。

「ほら、リン。お前の分」

「ありがとうございます、ナギさん」
ナギさんはとっても優しいです。

よく見ると、詠春の頭の上に鍋が掛かっている・・・

「食事中失礼！俺は放浪の傭兵剣士！ジャック・ラカン！いつちよやろうぜ！！！」

なんだあの馬鹿は？

僕たちを狩に来たのかも？

「フフフッフ・・・」

「え、詠春さん？」

「食べ物を粗末にするものは・・・」

詠春さんが壊れました・・・
と思っただけもう居ません？

「斬る」

って、もう戦闘に入ってますね・・・

あの、傭兵剣士・・・なかなかやるようです。
詠春さんの攻撃を凌いでいます。

「情報その1、生真面目剣士はお色気に弱い」

たしかに、そうですね、うちの詠春さんも・・・
ア・・・詠春さんの苦手な色気で負けましたね・・・

「ナギさん、待ってください・・・」

もう戦闘に飛び込もうしているナギさんを止める

「なんでだろう、リン？俺は早くやりてえ！」

「僕が行きます。」

「リンが？分かったぜ！」

僕は飛ぶ、ゆつくりと、剣士の元へ

「次は僕です。」

「お前が？ぜんぜん強そうじゃないな？」

「はい、強くありません・・・」

「まあ、いい。まあ、一応情報はある。情報その5、平凡魔法使いは実は鉄壁？備考なし」

「いきますよ！」

そして、僕は動き出す。

「アデアット！『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」

自分の力を収束する。一点へと、そして、形成する。

「これは僕の思い・・・僕の思いは僕の意のままに」
できたのは、剣・・・いや、この場合刀だろう・・・
詠春が持つている本で読んだことがある。
たしか、斬る事に特化した剣。

「なんだそりゃ？そんなんじゃすぐ折れるぜ？」

「さあ、それはどうでしょうか？」

その瞬間僕はラカンの懐に入る。

「うお！何気に早い！」

そして、叩き込む僕の最高の一撃を。
と、言っても斬るだけだ。

「はあああ！！」
刀を上から下へ振る。

しかし、ラカンはいくぶん後ずさっただけ・・・

「いてえじゃねえの？」

「ぜんぜん痛そうじゃありませんよ？」

「まあな！！！」
そして、ラカン無双がはじまる。

「おらおらおらおら!!!」

僕はラカンの適当なパンチを刀で受ける。

「なんで、折れねえ!」

「言っただけです!これは僕の思い!」

僅かな隙間が見えた・・・気がした・・・

そこに入り込もうとするが、ラカンのパンチが少し掠る・・・

「いつ!」

なんて威力のパンチなんだ・・・

掠っただけで内臓まで・・・

やっぱり、僕は平凡・・・こんなところに居るべきではないのかも
しれない・・・

でも、それでも・・・

強く刀を握る

「それでも・・・僕はあなたの元に居たいんだああ!!」

そして、その時、一番思いが昂ぶったとき刀を振った。

たぶん、これが本来の斬り方・・・

ぶつけるのではなくなぞる流れる感じだ・・・

少し切れた・・・

皮一枚切れ、血が流れる。

「ほお、なかなかやるじゃないか?平凡が!」

僕はラカンに殴り飛ばされ、意識が刈りとられた。

「ぜん・・・ぜ・・・ん・・・です」

痛いな、ラカンのパンチ・・・
そんな事を思い、僕は飛んだ・・・

こっちに駆け寄ってくるナギさん。

その顔は少し怒りが含まれており、僕を心配していてくれた。
それが何よりも嫌だった・・・うれしくも感じたが・・・

僕はナギさんに心配されてしまったのだ・・・

彼に心配されなくなかった・・・それくらい、強くありたかった・・・

僕は彼に守られるのではない・・・彼を守るんだと、このとき再度、
自分に誓った。

ア・・・僕の鍋・・・壊れただろうな・・・

第2話―ナギさんはやっぱ、最強無敵―（後書き）

感想・指摘など大歓迎です。

キャラ紹介と行きましょう（前書き）

キャラ紹介です。何気にオリ呪文が入ってたりしますが、作者の勝手な妄想でこの作品の魔法に独自解釈がたくさんあります。

キャラ紹介と行きましょう

キャラ紹介

と、言ってもオリキャラだけで

リン・イースト 後に あずま 東鈴

年齢：11歳

容姿：髪は黒、目は金、身長は11歳で160程度

顔は割りと整ったほうで、美形とまではいかないが、普通よりいい。

ウェールズの魔法学校からナギが出て行くときについていくことにした。そのときからナギの元で生きることが自分の人生ときめ彼を守ると誓う。それから、仲間に出会い戦争に介入していく事になる。実力的に言っていると強く感じてしまうが、それはアーティファクトの力

で本人の力は一般の見習いより幾分か強いだけ。ナギを思う気持ち
は誰にも負けないと思う。のちにアリカに負けるが・・・それは別
の話。

得意属性：風、光

苦手属性：闇、氷

魔法発動対：指輪（アーティファクトとは別）

技：魔法の射手全般

しかし、風と光以外の魔法の射手は格段に威力と精度が落ち、
命中率も悪い。使えても牽制にもならないから、威嚇程度。

風陣結界・光陣結界

風楯・光楯

風花・風障壁・光閃・光障壁

などの、防御呪文

ナギから習った雷の斧の光、風ヴァージョン、光の槍、風の薙刀
といっても、威力はそこまでない・・・

アーティファクト：想いの指輪

効果は呪文が幾つかある。1つ、身体強化でき
る。呪文は『我守らん。我が大切な者達を。』自分もされる。2つ、
結界の構築『我の盾、我を害するものすべてを弾く』強度はなかな

かで、ナギの一撃なら防げるが、二撃目は無理。3つ、攻撃『我薙ぎ払う、我の敵全てを』光の矢を何本も構築して敵に打つ。魔法の射手と違うのは始動キーがいらないためもない。強く思えば思うほどの能力も向上する。

実はまだ、能力があったり？結構強いアーティファクト。さすがはナギと契約しただけはあると思う。

キャラ紹介と行きましょう（後書き）

なにか、（魔法とか）間違っていたら指摘してください。

第3話―理不尽を生き抜くために―（前書き）

前回キャラ紹介をしたのに・・・技が増えました・・・くそう・・・

第3話―理不尽を生き抜くために―

ラカンさんに吹き飛ばされ、気絶した後、どうやらナギさんが撃退したらしい・・・

しかしはナギさんと戦うために何度も再戦を申し込んできた。

まあ、それすらもすべて受けラカンさんとともにやりあうナギさん・・・

二人とも理不尽だ・・・

第3話―理不尽を生き抜くために―

なぜか、何度もラカンさんが戦いに来るうちに行動を共にしていて、ラカンさんも『紅き翼』の一員になっていた・・・

そして、このころから僕たち『紅き翼』は今魔法世界で起きていた大戦に介入していった。

ヘラス帝国対メセンブリーナ連合の大戦。オスティアの奪還・・・僕たちは連合側として大戦に参加、ナギさんは敵から『連合の赤毛の悪魔』と恐れられ、仲間からは『千の呪文の男』サウザンドマスターと讃えられた。

そういう僕にも二つ名付いたらしい、あとファンクラブも・・・ほかの皆さんには及ばないけどね・・・

僕の二つ名は『千の呪文の男の腰巾着』や『紅き竜の尻尾』などの中傷な名前もあれば

『千の呪文の詠唱部分』とか『紅き翼の常識人（？）』、『紅き翼の中の平凡』、『最強の平凡』などもある。

別に僕を中傷するのは構わない、弱いですし。だって、使えて、魔法の射手や戦いの歌などですから・・・

「まあ、気にするなよ二つ名なんてよ！お前は俺が一番分かってる！」

「ありがとうございますナギさん・・・でも事実です・・・僕は弱い・・・」

ナギさんは優しい・・・でもその優しさが僕を苦しめる・・・

「そんなことねえよ・・・お前は最初から俺についてきてくれたじゃないか、それだけで俺は十分だぜ？」

「僕はそれじゃ嫌なんです・・・僕はあなたに守られたいんじゃない・・・あなたと肩を並べて戦いたいんだ！」

沈黙が走る

そして、それを破ったのは・・・

「ほお、じゃあ、強くなりたいのか？」
ラカンさんでした・・・

「はい、強くなって・・・ナギさんに降りかかる火の粉を振り払えるように」

「おし！それなら、俺が鍛えてやる！」

「ラカンさんですか？」

「おうよ！何か不満か？」

「いえ、ぜんぜん・・・むしろその方がいいですね・・・ナギさんと同じバグですから。」

「おし、それなら今からはじめるぞ！」

「はい！」

そして、僕とラカンさんの修行が始まった・・・

「がんばれよリン！」

「はい、絶対強くなります！」

ラカンさんの修行はきつかった・・・

もともと彼はバグなので常識がないです。

「おし！まずは、俺の一撃を受け止める！」

「それは、無理っ！ぶへえー！」

そして、修行初日は終わった・・・

なんかデジャヴが・・・

次の日・・・

「ラカンさん昨日は少し無理がありました・・・」

「そうだったな、お前って普通だったんだよな・・・」

「すみません・・・」

「よし、それなら身体強化でも覚えるか！」

「分かりました、で、身体強化って？戦いの歌なら覚えてますよ？」

「違う違う！戦いの歌なんて目じゃないぜ！名づけて『武神の舞』だ！」

「何か無駄にかっこいい名前ですね・・・」

「だろう！よし、さっそく覚えろ！魔力を内から外に弾きとばすように激しく！そして、平常心！」

「それって矛盾してますよね？激しく平常心って！」

「そんな細かい事無私だ無視！」

「理不尽です・・・」

そして、僕の修行が始まった・・・
やっとな・・・

一カ月後・・・

「やっと・・・でき・・・た」

「時間掛かったな？」

「説明が足りないんです・・・なんで、激しく平常心で『心は熱く、頭は冷静』になるんですか？」

「それぐらい分かれよ！な、ナギ！」

「そうだぜ！それぐらい分らないと生きてけないぜ！」

「まあ、できたからいいですけど・・・」

「よし、それなら！ほらやれ」

「はい、『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』」
「まわりに風が舞う・・・僕を中心として」

「いつも思っんだが・・・その詠唱いらなくね？」

「あなたと違って凡人なんです！」

「まあ、いい！よし、俺の一撃を受けろ！」
「ラカンさんが殴りかかってくる・・・」
「前までなにも見えないほどの攻撃が見える・・・」

避ける場所も、防御する点も分かる・・・

これが、『武神の舞』・・・武人としての極みに近づくための集中方法・・・身体強化ではない・・・

「っふ！」

僕は体の前に腕を交差させて防御に移る・・・

交差したてんに魔力を集め、衝撃の瞬間爆発させながら足を地面から離す・・・

「ほう・・・いい出来じゃねえか！」

僕は10m先に吹き飛ばされている・・・

前回と違うのは、気絶していないし、多少痛いけど重傷ではない・・・

「ラカンさんのおかげですよ」

「まあな！俺は最強の傭兵剣士だぜ！」

「なにを！俺が最強だ！」

そして、ナギさんとラカンさんの不毛な戦い（ケンカ）が始まった・・・

僕は覚えた・・・この世は受け止めるだけじゃない・・・流す事もできると・・・

「よし、次だ！」

「え！次もあるんですか？」

「あるに決まってるんだろ！次は『闇の魔法』だ！」

「ええ・・・あれって危険そうじゃないですか？」

『闇の魔法』真祖の吸血鬼が作ったとされる魔法。
自分の体内に魔法を取り込む『術式兵装』

「闇の福音」の作った術・・・

「何を言ってる！危険だ！」

「と、言つか僕闇の適正ないですよ？光ですよ？」

「『闇の魔法』は単なる属性の適正じゃねえんだよ！心の適正だ！
歪んでれば歪んでるほど適正ありとミタ！お前は適正ありまくりじやねえか！」

「まあ、試してみますか・・・」

「そうこないとな！男はドンと構えろよ！」

「はい！」

そうして、僕とラカンさんの修行2が始まった・・・

「ほらこの巻物だ！」

「これで、なにをしると？」

「開ける」

「はい」

シュルルという効果音で巻物を開ける

『ほう・・・私の魔法を覚えようとするか・・・身の程を知れ!』

その声で僕は精神世界へといざなわれた・・・

表では

「おい!どうなってんだよ!リンのやつ血吹いてるじゃねえか!」
怒るナギさん・・・

「まあ、そう怒るなって・・・この餓鬼もお前のために強くなろう
としてるんだぜ?これぐらいは見守れ!」
それを抑えるラカンさん

「まあ、そうか・・・がんばれよリン・・・」
その声は届いたのか、届かなかったのか?

精神世界・・・

「ふん!その程度か!」

僕はエヴァンジェリン・A・K・マクダヴェル(偽)と戦っていた・
・

「くっ……」

うそです……叩きのめされていた……
疼く腹、軋む骨、はがれた皮、流れる血……

「ふん、その程度で『闇の魔法』を覚えようなど！百年早いわ！」

「やつぱし……そうですね……はは、ラカンさんは無理をする……」

「ふん、どうせあいつもお前の主も弱いだろう？ああ？」

「ナギさんは……最強だ……僕なんかが傍にも寄れないほど……」

「ふん！ほざいている！どうせ、お前はここで死ぬんだ！」

「僕は……死ぬのか？」

「そうだ、精神が死に、肉体だけが残る……まあ、死ぬよ」

死ぬのか……

まだ、１１歳で死ぬのかな……まだ、ナギさんと居たかった
彼をこの戦争の間だけでも守って居たかった……いや、その後も……

なら、ここで死んでもいいのか？

いいはずない……僕は生きつづける……

ナギさんが居る限り・・・

僕は彼を守るんだ・・・彼の従者として・・・いや、一人の親友として、相棒として！

「僕は・・・死なない・・・いや・・・死ねないんだ・・・守りきるまで！」

「何を言うかと思えば・・・死ぬよ、確実にな！」
襲い掛かってくる真祖の吸血鬼

ここは、僕の世界・・・
ここは、僕の心・・・僕の原動力・・・

「僕はお前に勝つ！」

「ほざけええ！」
突進してくる爪・・・
頭に響く声・・・
そして、限界を超えようとする自分・・・

「降葉の舞・・・」

それは、まるで葉が落ちるような動き・・・
早くなり、途端に浮き上がり・・・しかし、何れは地面に着くとい
う絶対的な結果を避けようとする動き・・・

「それは・・・運命を抗う力・・・」

「なっ！」

爪を間一髪で避け、彼女の腹を一発殴る・・・

「がっ！」

力が抜け、僕にもたれ掛かる吸血鬼

「ありがとう・・・吸血鬼・・・僕に守る力をくれて・・・」
彼女は力なく地面に崩れた

「ふん・・・お前はいつか、裏切られる・・・そう知っていても従
うか？」

「従うよ・・・そう決めたんだ・・・」
あたかも、当然かのように言い放つ・・・

「そうか・・・飲み込まれるなよ？」

「分かってるよ・・・飲み込まれないさ・・・僕はナギさん『光』
を信じるからね・・・」

「ふん・・・光など弱い・・・闇こそが最強だ・・・」

「光あつてこそその闇・・・光あるところに闇がある・・・表裏一体
だよ・・・」

「そう・・・かもな・・・」

「じゃあね・・・」

そして、世界は光に満ちた・・・

「ただいま戻りました、ナギさん！」

「おお！帰ってきたか！リン！よくやったぜ！」

「さすがは俺様が教えてるだけはあるじゃねえか！」

「何いってんだよ！リンの実力だ！」

そして、また不毛なケンカが始まりかけるところで

「違いますよ？皆さんのおかげです・・・」

そして、二人は戦いをやめ、三人で笑い合う・・・

僕はいつまでもこの笑顔を守っていけるのだろうか？

いや、守れないだろう・・・でも、僕が見ているときは守っていく・・・

彼の心は今日も強くなった・・・

SIDEエヴァ（偽）

今回私の『闇の魔法』を覚えに来たのは僅か11歳程度の餓鬼だった・・・

奴は、恐ろしく、弱く、脆く、すぐに倒れた・・・
しかし、何度も立ち上がり、私に向かってくる・・・
その事は賞賛しよう・・・しかし、それでは、私には勝てないよ・・・

殺そうとした・・・私の手で頭を貫き
でも、それはできなかった

途端にやつの動きが早くなり、攻撃が外れる・・・

殴られた瞬間、伝わってきた・・・

餓鬼の思い・・・人生・・・感情

餓鬼は一人の男のために人生をつくしてきた

そして今からも・・・

私にはかなわない・・・そう悟ってしまった・・・

一つの存在をここまで信じきっているこの餓鬼に私の勝機など無い
と・・・

私にはまぶしすぎた・・・その存在が、その思いが・・・
それと同時に私もこうなりたいと思ってしまった・・・

胸が熱くなった・・・

それでも、無情にこの空間は閉じた・・・
また永遠の闇へと変わっていった・・・
餓鬼のわずかな光の軌跡を残して・・・

SIDE OUT

第3話―理不尽を生き抜くために―（後書き）

では、技紹介します！

『武神の舞』

魔力を自分の外膜に張る事で危険察知から音まで敏感になる。ようはすげえ集中モードです。この状態だと、時が遅く感じたり、直感が凄くなったりします。

『降葉の舞』

一種の歩法。まるで、木から落ちる木の葉の用に速度を変えたりし、敵を惑わす・・・しかし、実力者相手だと一瞬しか使えない・・・ずっと思っているリズムがつかまれてしまい、逆にあだになる。

指輪真呪文！

まだ出てきてないけど出すつもりなので！

『我は偏在する、数多の敵を止めるため』

まあ、ようは分身の術ですね・・・はい、作ってみたかっただけです。と、言ってもリンのじつりよくだと4、5人が限度です。

『闇の魔法』！

予定としては、光の槍を掌握した術式兵装

名前は『雲散霧消』

光の屈折などにより相手を捕らえる事が難度になってくる！
そして、隙を突いて攻撃のヒットANDアウェイの戦い向き！

これが技の予定です！

感想指摘など大歓迎です！

第4話―あなたのために―（前書き）

ふうー、疲れました・・・なんだか、話が進むのが早すぎるような気がしてきた・・・けど、俺ってオリ要素入れる才能がないというか・・・

第4話―あなたのために―

僕たちは今日の今日とて戦い・・・捻じ伏せ・・・勝利した・・・
今回の戦場は「グレート・ブリッジ」ここの奪還戦だ

ここは連合の喉元に当たるわけでここを奪還しないと戦争にもならないと・・・

まったく、なんで奪われるんでしょうか・・・

第4話―あなたのために―

そこは、戦場だった・・・

人が切られ、血が流れ、炎が舞い、人が焼かれる・・・

そこは、戦場だった・・・

肉の焦げる臭い、人間の悲鳴、潰れる人体の音・・・

そこは、戦場だった・・・

理不尽が一番目立つとき・・・

「ナギ！何隻落とした！？」

「はっ！今20隻目ええ！！」

「はっ！俺は今35隻目ええ！！」

「お前戦艦しか狙ってねえだろ！下の雑魚共も狙えよ！」

「下はほかに任せた！」

「一方下では・・・」

「死ねえええ！！！！」

迫る、脅威、魔法、斬撃・・・

しかし、すべてがすべてスローモーションの用に再生される・・・
それを一つ一つ掻い潜り敵の元へ疾走する

「なっ！」

「ごめん・・・『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」
光が収束し、刀を形作る・・・

「降葉の舞・・・」

その周辺に居る人間から血が吹く・・・

僕は今戦場に立っている・・・
人に情けをかける事が許されず・・・
すべては、ナギさんを守るための行動・・・そう思ってたやっとな人が
切れる・・・

こんなの、人のやる事じゃない・・・魔法使いがやる事でもない・・・

・
これは、悪魔のようなもの・・・病気のようなもの・・・
強制され・・・惑わされ、人を切る・・・そして、それが広がり戦
乱の世へと誘う・・・

「お、お前は弱いはずじゃないのか！」

「僕は弱い・・・ただ、あなたが僕より弱かっただけです」
僕はこの前の修行のときから格段に強くなった・・・
ラカンさんと戦い3、4分持つようになったし・・・

「ぎゃああー！！！！」

僕はすべての敵をなぎ払う・・・
すべてが彼のために・・・

「全員、撃て！！一斉射撃だ！」
周りから魔法の射手が数千矢飛んでくる

「効かない！『我の盾、我を害するものすべてを弾く』」
結界と矢が触れ合い爆発する・・・

「ふん、これならさすがの奴も生きていまい・・・」

「残念だったね『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」
相手と同等程度の数の矢を作り放つ・・・

「やめてくれえー！！」
助けを請う者・・・
仲間を庇う者・・・

仲間を盾にする者・・・

この世はさまざまだ・・・でも、全員が同じ・・・生きていた・・・

「なかなか、やるじゃないですかリン？」

「ありがとうございますアル・・・でも、まだまだです・・・」

「あなたはなぜそこまで力を望むのですか？ナギはあなたが居てくれるだけでがんばれるようですよ？」

「僕はナギさんを守り、肩を並べて戦いたいんだ・・・そのためにこの世の中を生きる力が必要なんだ・・・」

「あなたも、歪んでますねえ。こんな戦争に好んで介入するなんて・・・」

「僕は好きでやってませんよ？ナギさんが好きでやってるんです。それをいうと僕たち『紅き翼』自体が歪んでますね？」

「まあ、私たちはナギを元に行動していますからね」

「そろそろ戦いに戻らなくても？」

「いえ、もう大丈夫でしょう・・・バグが二人がんばってますから・・・」

と、上を向くと空で人間二人が起こし他とは思えないほどの被害を被っていた・・・

戦艦が落ちていき、そらに閃光が走り・・・
爆発が起こり、巨大な剣が現れ・・・

「さすが、バグ・・・」

その声が悲しく空間に響いた・・・

視線を下に戻すと。下も下で、詠春とゼクトさんが頑張ったおかげで敵はもう居ない

そんなときだった・・・

チユドオオオン！！！！

「へ？」

急いで音が鳴った上を向くと・・・

「うおおおおおお！！！！」

落ちてくるナギさんとラカンさんでした・・・

二人は戦艦の一斉射撃に合い、落ちてきたようです・・・

そして、不幸な事に・・・

「第2陣、突撃！！」

「うをおおお！！！！」

相手の軍の援軍が届いたようだ・・・

ナギさんとラカンさんは結構傷がある・・・
ほかの人間も似たようなもの・・・

僕だけは無傷だった・・・

自分を守り、相手の攻撃をすべて避けてきた・・・
と、いうか避けてないと一撃で死にますね・・・

相手が着々と迫ってきている・・・

「くっ！俺が！」

「だめですナギ！ラカンも！あなたたちは後ろに下がっていなさい！」

「でも、お前らだって！」

「あなたたちよりは大丈夫です！戦艦の一斉射撃を受けて生きているほうがおかしいんです！ここは、切り札としてあなたたちを残すべきだ！」

口論をするアルとナギさん

「そうだぞ、ナギ。お前とラカンがいなかったら俺たちはどうするんだよ？ここは俺たちが行く」

「そうじゃぞ？お主は一人で戦ってるんじゃない、仲間がある。」

「お師匠様・・・」

敵の数は数千・・・

こっちは6人・・・圧倒的力量差があるからといってこっちは今戦

闘後・・・

相手は装備あり、そして、補給も行き届いた部隊・・・
きつと、ここでみんなが戦ったら勝てるだろう・・・
でも、それは結果であって過程ではない・・・

きつと、全員が傷を負い、痛みを感じ、時間も掛かる

なにより、ナギさんが持たないだろう・・・彼はバグだ・・・しかし、いくらバグといっても数千人相手にもつだろうか？

まず、そこまで人を傷つけられるだろうか？そんな思い、彼にしてほしくない・・・

仮にも相手は魔法使いと剣士。いくらナギさんでも、魔法を食らえば痛いし、剣で切られれば血も出る

僕はと呼ばれたっていい・・・ナギさんに嫌われたって・・・彼が生きているのならば・・・

「ここは、僕が行きます・・・」

「・・・リン！」「」

「みなさんは逃げてください」

「何を言ってるんだリン！これくらい俺たちで！」

「数千の敵を相手に勝利できるんですか！？今の状態で！可能でしょう！でも、いくらこっちが最強無敵を自負するバグが二人居ても、今の状態じゃきつい！」

「だからっってお前一人で行くなんて！無謀だ！」

「無謀も承知！僕は今無傷です！それに・・・」

それに、僕は一番弱い・・・被害が一番少ない・・・

「それに、僕が一番弱いじゃないですか・・・僕じゃ、ナギさんは守れない・・・だから、皆さんに頼みます・・・この戦争が終わるまでは・・・ナギさんをどうか頼みます・・・」

僕は一礼して、敵に向く

「おい！何してんだリン！俺は守られなくてもいい！お前は居てくれるだけでいいんだ！」

「僕はそれじゃ満足できない！僕は守られるくらいなら・・・死んで、あなたを守る！」

「リン！」

そこで、ゼクトさんが手刀でナギさんの首をたたき、軽い脳震盪（普通で言ったら首が切れる程度）を起こし気絶させる・・・

「ゼクトさん・・・ラカンさん、今までありがとうございました・・・皆さんも・・・ナギさんを守ってください・・・」
そうして、僕は敵に走りだした・・・

SIDE 詠春

今私の前には一人の男が居る・・・この前少年だと思っていたこの男は今自分の信念を貫き・・・その主、ナギ、を守ろうとしている・・・自分は死んでナギを守ると・・・私はとめる事ができな

った・・・

彼の目は真剣そのもので、ラカンとは別に威圧感を感じた・・・逆
らえないと・・・絶対に譲らないと・・・

私は弱かった・・・力ではなく・・・心で彼には圧倒的に負けてい
た・・・一人の人間のために死ぬなんて私にはできない・・・それ
でも、彼はそれをやってのけた・・・彼は、私の知る一番強い男な
のかもしれない・・・

SIDE OUT

SIDEアル

今私は選択に迫られている・・・私の前に立つ少年は今決心した自
分を犠牲にすることを・・・自分を犠牲にして、他者を生かすと・・・
・彼は自分が弱いからといった・・・弱いからしんでも困らないだ
ろうと・・・しかし、あなたが死ぬのが一番困るのです・・・ナギ
は何かを守ればそれだけ強くなる・・・あなたを守っているナギが
居るからこそ・・・ナギが強いのです・・・それでも、それを知っ
ていても私はあなたを止められないだろう・・・あなたを止めれば何
かが狂う気がした・・・あなたが狂い、私たちを拒むと、彼を拒む
と・・・それは、あつてのならないこと・・・しかし、あなたが死
んでいけない・・・これは、選択・・・

SIDE OUT

SIDEリン

僕は走る・・・

あの人のために・・・

僕は叫ぶ・・・

あの人のために・・・

僕は生きた・・・

あの人のために・・・

そして、僕は戦う・・・

あの人のために・・・

最後に僕は死ぬだろう・・・

あの人のために・・・

「はあああ！！！」

僕は今敵地の真ん中に居る・・・

結界を展開して敵の進行を遅めようとしている

「殺せ！早くしろ！ほかの奴らが撤退している！今の絶好チャンスだ！早く突破しろ！」

司令官が叫ぶ

「無理です！なにか結界に拒まれています！」

「ぬぁにいいー！！壊せ！早く壊すのだ！えゝい！最弱にないをてこずっておるのだ！」

「無理です！突破できません！と、いうか押されています！」

「くそお！もう、いい！突撃やめ！魔法をありつたけ撃て！」

そして、奴らは詠唱を始める・・・

「させると思ってたか！『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」
光の矢が相手に注ぐ

「ぐあつあー！！」

敵が倒れ僕を恐れる・・・

「くそ！お前は誰だよ！弱いんじゃないのかよ！」

たしかに、僕は弱い・・・いや、弱かった・・・

でも、今の僕は負けない・・・そんなことはないが・・・
彼のために

「僕は・・・強くなる！ナギさんが居る限り！僕が食い止めるんだ・・・」

「結果が解かれている！突撃いい！！」

「」「」「うおおおりゃああ！！！！」「」「」

「僕に力を・・・」

温もりが体の中を通る・・・

自分は知っていたのだろうか？この力を・・・

「『我は偏在する、数多の敵を止めるため』」

「なっ！分身だと！」

僕が6人に増えた（内一人リアル）

「お前等に」「一步も」「進ませない」

一人ひとりが僕だ・・・

「ナギさんに」「指一本」「触れさせない!!」

1対数千が、6対数千になっただけ・・・

それでも、僕は戦うよ・・・

あなたのために・・・

分身した自分を接近戦に使い自分は詠唱に入る。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！来れ、虚空の光、射殺せ！光の槍！」

光の槍を飛ばし、敵に突き刺し、突き殺す

じぶんの信念のために・・・

「『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』」

集中モードに入り、相手の攻撃をかわしながら詠唱をする。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！魔法の射手！連弾・光の

「100矢！」

そして、それを後方に飛ばし後ろに回りこんだ敵を排除

「『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」

刀を形成させる・・・

ここから、俺は死闘を繰り広げた

相手を切り伏せ、相手の攻撃をよけ、相手を絶命させ・・・
相手の魔法を受け、焼かれ、貫かれ、悲鳴を上げ

そして、戦闘は数10分続き、終焉を迎えた・・・

僕の体には無数の傷が付いた、擦り傷、切り傷、焼けど、穴・・・

僕は満身創痍、相手はまだまだ居る・・・

ぼくはきつとここで死ぬだろうな・・・

司令官の杖が俺の喉元にある・・・この状態なら死ねる・・・

「目標『紅き翼』ロスト！！」

「くそ！追いつけなかったか！全部あいつのせいだ！」

男が声を荒くし司令官に報告をしにきた

「ざまあ・・・みやがれた・・・」

思わず言ってしまった・・・

ナギさんたちは生きている・・・

僕は今安心しているのだろう・・・

きっと僕はここで死ぬ・・・でも、ナギさんが生きているんならこ
んな戦争終わらしてくれるだろう・・・

「おまえ！」

男がいきなり僕の胸ぐらをつかみあげる

「やめい！我等は敗れたんじゃ！たった一人の男に！」
司令官が男に静止をかける

「しかし！」

「やめい！・・・お主、名はなんと言う？」

「僕の名前・・・」

たぶん、これが最後になるのだろう・・・

「僕の名前はリン・・・リン・イースト」
主の名前を噛み締めながら言う

「ナギ・スプリングフィールドの1番目の従者だ・・・」

「そうか・・・では、さらばだ、リン・イースト。連合の赤毛の悪魔の1番目の従者よ、もう会うことはないだろう・・・」

「だろうな・・・じゃあね・・・ナギさん・・・」
そして、僕は死を覚悟して目を瞑った・・・

「お前はこれからヘラス帝国に連行する・・・『紅き翼』の事、連合の事、洗いざらい話してもらおうぞ・・・」
が、覚悟の意味がなくなつたようだ・・・

「へ？僕は死ぬんじゃないんですか・・・？」

「何を言っている？大切な情報源だぞ？じゃが・・・死ぬほうが楽

だったかもな？これから拷問の時間だ」

僕は生きていけるのでしょうか・・・？

SIDE 三人称？

リンが一人で敵に向かって行きから数10分が経ち『紅き翼』の面々はもうすでに追いつかれない距離まで遠ざかっていた。

しかし、彼等は逃げ切ったにもかかわらず浮かない顔をしていた・・・そう、彼等は大切な仲間を失ったのである・・・

「くそっ！今からでも遅くない！リンを助けに！」
荒ぶるナギ、リンの親友

「何を言ってるのですか！それでは、リンが一人で立ち向かった意味がない！彼の死を無駄にするのですか！」
それを止めようとするアルビレオ「イマ

「リンは死んでない！」

「そうじゃぞアル。リンなら死なんさ・・・きっと帰ってくるはずじゃ・・・じゃから、ナギ・・・それまでは戦え・・・奴が帰って来たとき安心させられるように・・・」

「そう・・・だよな・・・リンは俺等を生かすために戦ったんだ・・・なら、帰りを信じてやる事やるしかないよな・・・」

「そうだぞナギ。俺たちがやる事・・・それは、この戦争を終わらせる事だ・・・」

「そうだな！よし！この戦争、終わらせるぞ！」

「そこなくちゃな！くよくよしてるお前はお前じゃねえぜ！」
そして、彼等のたびもまだまだ続く。

第4話―あなたのために―（後書き）

戦闘描写は難しいです・・・許してください・・・
感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第5話―新たな出会い、帝都で―（前書き）

いやぁー、なんか書いてたら長くなってしまいました。友達に言われました！「・・・」は「・・・」のほぅがiiiiって！どうなんでしょう？だから、後半変わってます！

第5話―新たな出会い、帝都で―

そこは暗かった・・・

でも、一筋に光があり・・・

僕はその光をつかもうとしていた・・・

それが、僕の人生・・・

第5話―新たな出会い、帝都で―

僕はあの後捕まり、今ヘラス帝国に運ばれている途中だ

司令官が僕に回復魔法をかけてくれたおかげで前回だ、さすが司令官！というかべきか？

話してみると、こっちの兵もそこまで悪い奴等ばかりじゃない

やる気のないもの、生真面目なもの、様々居るが、根本的に連合側と変わらない・・・

なら、なぜ戦争なんてするんだろう・・・

それは、領地が違ったから？

人種が違ったから？

はたまた、それが運命？

全部違うだろう・・・それは、上の命令だから・・・

国のため、民のため・・・オスティアを奪う・・・

それにどれだけの意味があるというのだろうか・・・
この戦争全てがどこかおかしい・・・
そう、思う今日この頃・・・の夕方

「兵隊さん？後、どれ位で着くの？」

「うああ、後なあ・・・10分くらいだろ」

「え？ちよつ！心の準備とかが！早く言ってくださいよ！」
そう、僕はこれから拷問を受けるとか言うじゃないか・・・

「ああ、安心しろ、お前は拷問なんか受けねえよ。」

「へ？・・・」

僕は突然の出来事に間拔けな声を上げていた

「お前は軟禁されるだけだ。ずっとだけどな。解放はなし、そして、
穏便に平和的に話してもらえればとっても助かる。ま、話さなくても
ずつとそのままなだけだけどな？」

「な、なぐんだ・・・てつきり、バリバリに拷問されて、自白剤で
も飲まされるのかと思った・・・」

「そりやあゝ、ないだろう・・・なにしろ、お前はただの兵隊だし
な・・・まあ、何か知ってたらいいな的な感じだよ」

「そつかあゝ、なんだか安心しました・・・」
そして、その後この兵隊さんと話しをしていると

「やっぱし、ナギさんのかつこいい所はですねえ．．．」

「あ、ああ．．．」

「ラカンさんともはりあえる．．．」

「で．．．？」

「魔法も実はあんちよこだったり．．．」

「まじかよ！って、着いたぞリン・イースト！」

と、ずっと世間話という名のナギさんの話をしていました．．．

「うわゝ、ここがヘラス帝都ヘラスですかあゝ．．．」

と、僕は立ち並ぶ家を見て感嘆の言葉を漏らす

「なんだ、そこまで驚く事か？」

「いや、実は言うと僕こっちにきて村とかつてそこまで寄らないんですよね？野宿がほとんどだったり、僕だけキャンプで留守番とか．．．」

そうなのだ、僕は村に立ち寄らないのだ、なぜかって？あまり、役に立たないからである．．．

知識があるわけではないし、力持ちでもない．．．まあ、せいぜいできて敵の撃退、足止めなのでキャンプで留守番と．．．

「この町は立派ですね．．．」

「おうよ！ここは俺等が誇る帝都ヘラスだぜ？なめてもらっちゃ困

る！」

まあ、こんな感じ（どんな感じ？）で帝都ヘラスの城についてしまった……

「ここで、お別れですね兵隊さん……」

「そうだな、まあ、なんだ？お前そんなに悪い奴じゃなさそうだし……がんばって生きろよ！」

「はい、ありがとうございます……兵隊さんも死なないでくださいね……」

「っへ！それは、分からねえな！俺等は兵隊だぜ？お前も分かっただろう？」

「はい……それでも……死なないでください……」

そう、僕等は兵隊……戦場で戦う存在……

僕はナギさんやラカンさんを始め、詠春さんやゼクトさん、言いたくないけどアルなどのつわもの揃いの部隊で守られていたからこそここまで生きてこれたのだ……

普通の兵は、まるで使い捨ての駒のようなもの……

そして、そこで、その兵隊さんとは別れた……

すぐにやってきたのが、城の衛兵だ

「貴様がリン・イーストか？ぜんぜん『紅き翼』の構成員の用には見えないな……」

「はい、よく言われます……でも、そうです。僕がリン・イーストです。」

「そうか、ではこちらへこい」

そして、僕が連れて行かれたのはある部屋

「お前にはここに居てもらう、食事は衛兵が持ってくる、それ以外に何か要望があればドアの前に立っている警備兵に言ってくれ・・・
叶うかは別だが・・・あと・・・」

「後？」

そうすると、衛兵が杖を取り出し

「誓約の黒い縄よ、かの者に定められた制約を。」
そう唱えると、僕の右手首に黒い模様が浮き上がる

「これで、お前は私が魔法を解くまで、魔力、気ともに使えなくな
った・・・逃げようなど思うなよ？我々も忙しいのでな・・・」

「まあ、分かりましたよ・・・魔法が使えないんじゃ、僕は何もで
きません・・・」

そう言い言われた部屋まで移動した

僕に宛がわれた部屋は別段普通の部屋だった・・・

城内にある部屋としては質素なものだったが、野宿をずっとしてい
た身としては、まあまあ、いや、すごくよかった

まず、ベッドをはじめ、鏡もあるし、タンスだってある・・・

「この部屋ですか？」

「ああ、この部屋だが？何か問題か？」

「いや、こんな部屋いいのかなあ？つて思って・・・なんていうか、豪華すぎやしませんか？」

「ああ、その事だが・・・本当は牢屋にぶち込んでおくつもりだったんだが・・・何せうちの第3皇女が・・・」

「へ？」

第3皇女？ヘラス帝国、第3皇女・・・テオドラ・・・だっけ？

「お前に会いたいと言ったきり、聞かなくなつて・・・しょうがなく、普通の部屋にしてやったんだ・・・」

はあ、まあ、普通の部屋になった事はよかったな・・・

「まあ、お前はずっとここに居ればいいんだ・・・それ以外はできない、何か質問はあるか？ないな？おけー！じゃあな！」

「あ！ちよっ！」

なんか、さつさと言ってしまった衛兵・・・

それから、僕は部屋でゆっくりし、床についた・・・

はあ、なんだかこの安心感がとっても不安だよ・・・

なんだか、とつても悪いことが起きそうで・・・

なんだか、待遇もあれだし・・・帝国人って馬鹿なのかな？

まあ、どうせ俺なんて情報もくそも持つてないけどさ・・・

ああ、心配だああああ・・・って、すごい眠くなってきた・・・

おやすみー・・・

そして、次の日がやってきた・・・

「ほら、朝飯だ」

警備兵が中に入ってきた

「ふああゝ・・・ありがとうございまふ」

今日の朝ごはんは、パンにスープ・・・

なんて、いい朝ごはんなんだろうか・・・

野宿しているときはクラッカーと肉程度だったし

朝っぱらからラカンさんはどこから持ってきたから知らないけど酒を飲むしで落ち着かないんだよね・・・

「朝飯の後は第3皇女がお会いに来る・・・無礼のないようにな、あつたら」

「あつたら・・・？」

「首が飛ぶ・・・」

ああ、死ぬのね・・・

それにしても第3皇女があゝ・・・

俺に何を聞きにくるんだろう・・・まさか、第3皇女自ら事情聴取

(?)・・・

なわけないよなあゝ・・・じゃ、なんだろ・・・

「ご馳走様・・・」

ふうー、おなかいっぱいです・・・

「って、おまはやー!」

「まあ、これくらいじゃないと、ラカンさんとかは食べるのとてもなく早いですからね……」

「さ、さすがは、平凡でも『紅き翼』なだけあるぜ……」
いや、そこ関係ない……

「で、一つ質問なんですけど……第3皇女が僕に何の用なんですか？」

「ああ……なんていうの？テオドラ様は……好奇心旺盛だからね……色々知りたがりなんだ……」

「はあ、で？」

「ここの兵たちは基本、この城漬けだから……外の世界なんてあんまし行かないわけだ……で、そこでお前が来るじゃないか？世界を放浪した『紅き翼』の一人がよ？それを聞いたテオドラ様は……」

と、なんだか、少し愚痴気味になってくる警備兵……

そんなとき不意に

「妾がどうしたのじゃ？」

幼女角人間っばい（？）が話しかけてきた……

走る沈黙、流れる汗（警備兵の冷や汗）、とまる時・・・

「て、テオドラ様ああ!!」

そして、時は動き出す！なんてね。警備兵がいきなり叫んで土下座し始めて・・・

「すみませんでした！別に何もテオドラ様が好奇心旺盛すぎて我々兵達が遊び相手として使われる事に私は何も反対していませんよ？むしろ大歓迎です！あははははは!!」
はあ、かわいそ・・・

「お主がリン・イーストか？どこにでも居そうな奴じゃぞ？」
それをすべてスルーする第3皇女もすごい・・・これが、ヘラスの実力か・・・!!

「はい、僕がリン・イーストですよヘラス帝国第3皇女様。まあ、僕の特徴自体が、特徴がない平凡なんで・・・」

「妾のことはテオでよいぞ？呼びにくいじゃろ？」

「いえ、でも、さすがに僕敵国の兵だし・・・」

「そんなことはいいのじゃ、妾がそうしろと言ったらそうするのじゃ！」

目線で警備兵に助けを求める・・・
が、警備兵はもうそっぽを向いて口笛を吹いている・・・

少し反撃

「いや、でも「だめじゃ!」だから「だめじゃ!」いや、でもさあ「だから、だめじゃ!」ええー……………」
なんなんだろう、この皇女さま?

「はあ……じゃあ、テオドラ様と呼ばせてもらいますよ?」

「うむ、それでいい!では、中に入るぞ?」

「あ、はいどうぞ」
と、言つて中に招待する

警備兵のほうを見るとこつちを見て、『ざまあみやがれ!せいぜい頑張れ!』みたいな目で見てきます。
え?なんで分かったかつて?それぐらい分からないと生きてけませんよ?

「で、お主がナギ・スプリングフィールドの従者のリンなんじゃない!」
「!」

ああ、やっと分かった……警備兵の動揺、そして目線……

「そう……………ですよ?」
この子は……………」

「それにしても、弱いのー!」
この子は……………」

「僕は非戦闘員みたいなものですから………」
というより、今は魔法切られていつもの体だから………」

「お主それでも『紅き翼』の一員か？」
そう言ってやっと肩から降りてくれる………」

この子は………なんて、元気なんだ………」

こっちの身が持たない！！

テオドラが僕のベッドにちょこんと座り、手で僕を誘う

「ほれ、こっちにきて話を聞かせろ！」

「へ？話？」

「そうじゃ！妾に話せ、外の世界の事！」

「なぜ？そして、僕？」

「なんじゃ？警備兵に説明されてないのか？妾はこの城から出ないのじゃ、だから外の世界の話が聞きたいのじゃ！」
ああ・・・・・・・・まあ、そんなことを言っていたような・・・・・・・・

「はあ、外の世界ですか・・・・・・・・何が知りたいんですか？」

「お主達の旅を聞きたい！」

「僕たちの旅ですか・・・・・・・・少し長くなりますね・・・・・・・・僕らは少し昔の事を思い出しながら話し始めた・・・・・・・・僕たちの旅を

「まあ、とにかくナギさんが通る先邪魔のものを蹴散らしたただけですね・・・・・・・・」

「短い！嘘を言うな！もっとまじめにやれ！」

と、ポカポカぶってくるテオドラ様・・・・・・・・不覚にもかわいいですね・・・・・・・・

「はい、では。気を取り直してもう一度です・・・・・・・・」
そして、少年は思い出す、彼等の出発点を・・・・・・・・

少年たちが出発したのはイギリス、ウエールズの山奥のとある魔法学校だった。そこに通っていた当時の彼等は先輩と後輩という関係だった・・・・・・・・とある事件が起こるまでは。その事件の被害者はリン・イースト。彼が魔法学校に居た当時は性格は陰気で根暗、引っ込み思案であった。今になったのが奇跡のようだとも言える。そして、学校は全寮制で親も居なく、成績が一般より低い彼には味方をする教師も居なかった。そんな、彼の周りでは虐めが起きていた。虐めといっても、靴を隠したり、教科書を隠すなどの子供っぽい事だった。されど、小さい事でもそれは虐めだった。虐められても、相談する相手も、助けを求める教師も居なかった。彼は、その虐めを耐えるしかなかったのだ・・・・・・・・

そんな、虐め漬けのある日だった。まったく、口答えをしないリン。そんなときに、一人が言ってしまった、もつとやってもいいんじゃないか？と。次第に虐めはエスカレートした。靴を隠すが、靴を解体になり、教科書を隠すが、教科書を燃やすになった。それでも、

彼は耐えた、耐えてみせた。それが気に食わなかった少年たちがいた。彼等は放課後人気のないところにリンを呼ぶと、そこでリンチを始めた……。そのころ覚えた手の魔法『魔法の射手』を試し打ちにとリンに照準を定める少年、それを周りから笑う少年。誰もそれを止める事はなかった……。『魔法の射手』それは、魔法使いが一番最初に覚える攻撃呪文。初歩中の初歩と言っても、『攻撃』魔法だ。矢は放たれ、リンの背中に直撃……。半ば、リンの背中を挟みそれは爆発した。そして、なぜかそこにいた、先輩ナギ・スプリングフィールド、学校一の問題児と同時に天才、はその場面に鉢合わせてしまった。彼はリンを見て、首謀者たちを叩きのめした。それは一方的、しかし、その力こそが世界すべてだった。力があれば生き、なければ死ぬ……。この世界は弱肉強食だった。急いでリンを保健室へと運ぶナギ。その速さはまるで風。その風に包まれながら少年は一瞬息を引き取りかけた、しかし、そこで聞いた彼の声を。死ぬな。彼は確かにそう言ってくれた……。その後、リンは無事教師の回復魔法で完治とまでは行かないが、復活。しかし、その傷は消える事がなかった。

それから、ナギといつも一緒に居るようになったリンは、ナギの影響で性格も明るくなり始め、行動を彼と共にし、魔法を励むようになった。そうして、すごされる穏やかに日々、突然ナギが学校から追い出され、それに付いて行くことを決心するリン。目指した魔法世界で困難を軽々と乗り越えるナギとそれに付いて行くリン。彼等はその困難の中で新たな仲間に出会う。そして、その仲間たちと作った『紅き翼』で歩く先にある戦闘を実力行使で解決していく。自称『最強』の傭兵剣士ジャック・ラカンとの数々の戦闘により地図が改変される毎日。ついには、ラカンまでもが『紅き翼』ナギについていってしまう。そして、今起きている戦争に連合側として介入して、今に至る。

「のお、まだその傷はあるのか？」
少し心配した目でこつちを見てくる

「はい、ありますよ」
と、言い服を背中の部分だけ捲くる。

そこにあつたのは大きな傷跡。
戦闘の傷跡でもなく、戦場の傷跡でもない……………
それは、幼少のときに受けた傷……………一生消える事のない……………

テオドラがその傷跡を指で触ってなぞる
普段触れていないその部分は敏感になっていて、声を少し上げてします

「痛いのか？」と聞いてくるテオドラに「いえ、くすぐったいです」と答える。

服を戻し、強制的に触らせるのをやめる。

あたりが、静かになる。誰も何も音を発さない……………

彼は窓の外を見る。そこに見えるのは、高く上った太陽……………
そして、自分の喋り疲れた顔

「ずいぶん、長く喋ったようだね……………もう、昼だよ？言っておいでテオドラ様」

隣に座っているテオドラに行く事を進める

「嫌じゃ・・・・・・・・」

「はい？」

「お主と食べる・・・・・・・・」
「この子は・・・・・・・・」

「仮にもテオドラ様は皇族ですよ？敵国の兵と食べていいはずないじゃないですか・・・・・・・・」

「嫌じゃ・・・・・・・・」

「だから「嫌じゃ！」でも「嫌なんじゃ！」言つこと」「きかん！」
「・・・・・・・・」

また、この皇女は！

しかし、決め技発動！

「妾と食べたくないのか？」

上目遣いでこっちを見てくる褐色幼女（？）

「うつ・・・・・・・・食べたくないわけではないですけど、そういう

問題じゃないんです。大人の事情というか……………」

「では、良いではないか！妾とお主はまだまだ子供じゃ！」

子供……………そう、僕等は子供だ、でも、子供が戦争をするだろうか？人を殺すだろうか？

僕は本当に子供なのか？そんな、たわいもない、そして終わりもない事を考えると、下からテオドラがこっちを見てる。

「……………そう、かもね。よし、じゃ、一緒に食べようか」

まあ、断る事は不可能っぽいからね……………

お前に拒否権はない！ってか？

「そうするのじゃ！おい！警備兵！妾とリンの食事をもってこい！妾はここで食べるぞ！」

そう警備兵に命令すると、警備兵がこっちをみて『？』みたいな顔をしてる。

「早くするのじゃ〜」

やる気のない声を出してベッドに倒れこむテオドラ
そんな仕草がどこか子供っぽく、かわいかった

僕はテーブルを用意する。

と、いつてもあまりすることはないが……

料理が運ばれてくる、2プレート。一方は質素、一方は豪華。一方は冷たく、一方は湯気が立っている。

これが格差……社会なのか……

まあ、そんな事はさて置き

「テオドラ様」

と、椅子を引いて、座る事を促す

「どうぞ」

「ふむ、なかなか様になつてゐるではないか？」

引いた椅子に座るテオドラ

「まあ、昔読んだ本の中でこんな描写があつただけですよ」

「ふむふむ……」

なにやら考え込んでいるテオドラ

「テオドラ様？何してるんですか？もらっちゃいますよ？」

と、言って宣告通りテオドラのプレートに乗っていた肉を取り、口の中に入れる

「いや、お主を執事にでもしようか考えていたのじゃが……
って、おまつ！なにを取っておるのじゃ！」

……へ？

この間 0・5 秒

ぶふ——！！

「汚い！」

「うう、すみません……でも、テオドラ様が悪いんです、いきなり変なこと言うから……僕を執事なんて、無理ですね。立場上。」

「おい、召使1号！：

と、呼んで飛んでくるおっさん1号

「はい、なんでしょうかテオドラ様？」

「この者を今日から妾付けの執事にする。異論は許さないぞ!」
なんて無茶苦茶なことを……………」

「しかし、テオドラ様「異論は許さんと言ったのじゃ」「はい、では……………」
目で『名前何?』と聞いてくる召使1号

「リン・イースト」

「では、リン・イースト。あなたは今日からテオドラ様付きの執事となります。(ちっ!めんどくせえ!)」

「はい、分かりました(こっちだって被害者です!)」

そして、すこしの間召使1号と話をし、書類を書き、睨まれ(親の仇の用に)
召使1号は出て行った

「はあ……………なんでこんなことしたんですか?」

「ん、暇じゃし」

「僕は暇つぶしですか!？」

「それに、お主の事を気に入ったのじゃ、もつとお主といて、話が聞きたいのじゃ！」

『もつと、あなたといたい』それは僕が一度願った事……
ナギの傍で肩を並べて戦いたいと、自分の心から願った願い
それ以外何もいらないと、自分の人生をかけた目標……
しかし、それは終わるかもしれない……そう思っていた時
もあつた、あそこで死ぬつもりだった……
でも、今はどうだろう？彼女の言葉を聞いて気がついてしまった、
自分の気持ちに……

自分は生きていたいと……
死にたくなんか無いと……
まだ、一緒に居たかつた……
いまさらになつて気付いてしまったのだ……

僕はこんなにも生きていたかった．．．．あの人の傍に居たかった．．．．

でも、僕はあの時、彼を助けよと死のうとした．．．．その事がいきなり怖くなった．．．．彼という存在が自分から遠く離れていく、この感覚が．．．．

気付いたときには涙が流れていた．．．．再び窓の外を見る、そこにあつたのは．．．．高く上った太陽、そして．．．．自分の泣き顔だった．．．．

「リン．．．？」

テオドラがこつちを見ている．．．．

「僕はこんなにも生きていたかったのか．．．．」

そして、声を絞り出し

「彼に．．．ナギさんに会いたい．．．まだ、守っていたい．．．」
そう、小さく呟いた．．．

その日はその昼の後でお開きになり、また明日という事になった

テオドラは聞こえたのだろうか．．．僕の悲痛の願いを．．．．

第5話―新たな出会い、帝都で―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第6話―One Little Wish―（前書き）

この話のメインヒロインはテオドラにしましたあゝ。なんていうか、主人公のキャラがぜんぜん変わってる気がする。そして、平凡でもない気がする・・・まあ、後でやることはもう決まってます。

第6話 | One Little Wish |

それは、突然、そして必然……..
運命なんてものがあるのなら、偶然なんてない、そこにあるのは必然……..

ただ、人はなぜ『必然』を『偶然』にしたんだろう？

それは、ただただ…….. 幸せを感じていたかったから…….

第6話 | One Little Wish |

僕は今、走っている…….

そこに壺があれば中を確かめ…….

隙間があれば入って見る…….

ドアがあればそれを開ける…….

そう、僕は今…….

「お主本当にだめだめじゃのう？」

僕は今・・・

「テオドラ様が上手過ぎるだけです・・・・・・・・」
僕は今かくれんぼをした！

おかしい・・・・・・・・
なぜ、ここまで見つからないんだ・・・
地の利があるからって、壺に入った瞬間消えるし・・・
人間業じゃない！って人間じゃない？

「よし！では、次は何をする？」

「いや、テオドラ様、もう夕飯の時間です・・・おねがいだから、
もうやめて・・・」

「むー、そう細かい事言っな」

「細かくないです・・・もう30分遅れてます・・・」
ごめんなさいコックさん達・・・今日も遅れました・・・・・・・・

「じゃ・か・ら！妾はお主と夕飯が食べたいのじゃ〜」

「だめですよ・・・家族との交流とかは大切です・・・」
「はあ、いつもこの調子だ・・・」

「家族と言うと、お主の家族はどうなのじゃ？」

「普通に居ますよ、父、母そして妹です」

「父がコール・イースト、母がマヤ・イーストそして妹がスカーレット・イーストです。」

「では、お主はなぜ家族と居ないのだ？妾に家族の交流どうこう言ってるくせに家で少年ではないか？」

「うつ・・・すいませんでした・・・」

「では、今日も一緒に食べるのだ！」
「いつもこんな感じ・・・結局は一緒に食べる事に・・・」

「はは・・・参ったなあ・・・」

「ほれ、早く屈め」
そして、片膝床につけ屈む。

「うつむ」

そう言いながら肩に上るテオドラ

そう、これは・・・肩車だ・・・

「うむ、視界良好じゃ」

まあ、お前小さいもんな・・・

「お主今妾を侮辱しただろう？」

「え？そんなことないですよ？」

サラッと嘘言いますよ。にしても、こいつは心が読めるのか・・・

僕がこの城に来てから数日が経ち、二日目に執事にされてから（執事の仕事なんてやってないけど）ずっとテオドラの身の回りの管理（という名の遊び相手）をしている僕です。

本当にあの時はびっくりしました。でも、なつてみると別段悪いものではない・・・と、言っておこう・・・いや、やっぱり超、劇的に疲れる・・・

毎日テオドラの遊び相手をするというのは本来この城に居る、衛兵、警備兵の役目であつて、それをすべて俺が一人で受けているのだ・・・

俺の気持ちを知れ！

毎回毎回かくれんぼして、見つけれない！
おにごっこして捕まえられないでずっと走って！
しかも、相手はあのテオドラ！一日ずっと遊んでいても疲れを知らない、あのテオドラなのだ・・・
子供ってすげえー！って思う今日この頃、僕はもう果ててしまうかもしれない・・・

次の日・・・

今日はなんとお休みを頂きました。執事長から『お前も大変だろう・・・』と泣かれ、くれました。

この休みはこの城にある魔道書庫に行こうと思っている。
もう許可ももらったし（さすがはテオドラ付きの執事、権力ばねえー！）

うすくらい、そして本くさい一室

ほかの部屋とは別の雰囲気漂っている

そう、ここは魔道書庫！魔道書が眠る場所

「うーん、なんか良い魔法ないかな？」

僕は今自分に最適な『魔法』を探している

『武神の舞』などの強化系でなく、『光の槍』などの魔法だ。

「はあ、そう簡単に見つかるわけでもないか・・・」

しかし、結果は一目瞭然・・・目が疲れただけだった

そして、僕は一冊の本を取る
題名は『呪』・・・・・・恐っ！

その本を試しに読んでみると

『この本を読む者よ、あなたは今非常に誰かを殺したいんだろう？
しかし！殺したらそこで終わりです・・・・・・そこです。呪っ
てやりませんか？呪って死ぬよりつらい現実を味あわせてやりまし
よう！』

と、書いてある・・・・・・なんか、ひどいな・・・

そして、パラパラとページを捲っていくと『衰弱呪術』と言う部類
に入った

衰弱呪術って言うんだから、相手を衰弱させるんだろうな・・・・・・

・

その章を読み進める事30分

『この呪いを使えば、相手は子供になり自分の言いなりに！そして、
魔力、気が衰弱！ロリっ娘が大好きなあなたへ！ あ、別にシヨタ
でもいけますよ』

と、書いており、『呪術名：ロリ奴隷』と書いてある・・・・・・
この本アルに持っていきこうかな？何々？呪文は『来れ！千のロリ！
我が欲望をもつてこの者を我が奴隷にせよ！ロリ！奴隷！』

なんか、色々とおかしい気がする・・・・・・うん、なんだろう？
もう、よく思い出せないや・・・・・・

「はあ、なんかいい魔法ないかな？」

独り言を漏らす

「いい魔法か？」

しかし、結果独り言ではなかった……

「ああ、そうなんだ……僕もいつかは戦線に復帰するし……つて、テオ……」

「お！今お主、妾のことテオと呼んだじゃろ！そうしろそうしろ！」

「で、テオドラ様、なんのようですか？」

「つて、戻さなくてもよいではないか。つと、良い魔法だったな……」

「テオドラ様は魔法とか覚えてるんですか？」

「うむ、妾もなかなか魔法は使えるぞ！
そうだったんだ？」

「何知ってるんですか？」

「仮契約」

「へ？」

今なんて言ったこの幼女

「仮契約ならしつとるぞ？」

そう言い、地面に魔方陣を書き始める

「テオドラ様床に落書きをしちやいけませ……じゃなくて！なぜ、知ってるし！」

「お母様が言ってた『心に決めた相手にならしてよい』と。じゃから、覚えた。万一の時のために」
そんな万一きません！

「いや、でも、何で今？なぜ、今書くの？」

「それは、お主。今からするからじゃ・・・」
と、顔を赤らめる少女・・・・・・・・かわいいから幼女から少女にレベルアップ

「は？」

「今からするって・・・はははは、冗談うまいですね！」
と、笑う（ちよつと本気）僕

「冗談ではない！本当にするのじゃ！」

「・・・・・・・・・・」

ど、どうしよう・・・この方、生まれてから女性に迫られるなんてナギさんのイベントなかったし・・・・・・・・
くそお！僕は今自分の経験不足の人生を呪いました。

「ん〜」

と、強引に仮契約を行動にうつそうとしているテオドラ

「つて、だめだめ！」

そして、彼女を突き放す

突き放されたテオドラはポカーンと宙を見ている

「な、なぜじゃ！なぜだめなのじゃ！」

「何を言ってるんだ！テオはもつと長く生きるんだ！君には僕なんかよりもつと相応しい相手が現れるだろ！」

「そんな事ない！妾はお主がいいんじゃない！」

「まだ、会って数日しかたってないだろ！」

そう、僕と彼女は出会ってまだ数日……

好きか嫌いか？と聞かれたらそれは、好きに入るだろう……でも、それは女性としての好きじゃなくて……

ええ、なんていうの？妹的な存在。構ってあげたくなる、保護欲をくすぶる存在。

テオドラは黙ってしまった……
床にすわり俯いている

「……の……か……」
最初に喋ったのはテオドラだった……

「なんですか？小さくて聞こえませんか？」

「リンのバカ!!」
そう言ってテオドラは部屋から走って出て行ってしまった

僕は部屋に戻りベッドに倒れこむ

「はあゝゝ．．．．．なんで、こうなるかな．．．
頭を抱えながら独り言を言う怪しい人です。」

「おい、新執事！今から飲むけどお前どうする？」
この年で酒に誘われるのか．．．．．まあ、いいか今無性に飲みたい

「受けてたちます！」
え？なにが違う？

「よし、来い！」
いいんじゃないですか？相手もその気です。

「ぼくはですねー！！ぼくはですねー！！」
ただいま絶賛酔っ払い中．．．．．お恥ずかしい．．．．．

「おお！言ってまえー！らくになるぞー！！」

「ぼくはですねえー！べつにテオドラさまのことが好きですよー！」

「おおー！..！」

「でもなんかじょせいからこっついんっていやなんですよねー！..！」

「そーだそーだー！」

「ここはやっぱしおとこからだ！」

「いけいけー！」

そして、僕は皆に無理矢理いっしょのぼくごっつはテオドラ様のところに仮契約をしに行く事になった。

今のぼくは超ハイです。

バン！

ドアを思いっ切り開け放ち、テオドラを見ると、彼女はベッドの上で拗ねていた

「なっ！り、リン！お主何をしてるのだ！」

まだ、ぼくの事を怒ってるらしい.....

「テオ！」

ぼくはユラユラと一歩ずつ彼女に近づく

「な、なんじゃ？」

拗ねている彼女の横に座る

「テオ………」

彼女の目を見る、

彼女の茶色の目に吸い込まれる

「リン……って、酒臭いわ！」

ムードもあつたものでもないが、ぶち壊すテオドラ

「テオ………」

そう言つてそつと彼女を押し倒す

「り、リン！だめじゃ！と、いつかお主がだめといったではないか！」

暴れて抜け出そうとするが、相手はまだ少女こっちは青年……勝つた

「ぼくの事を怒っても構いません・・・でも、それでも、ぼくはあなたが好きなんです！」
最後のほうはハイです。

「なっ！う、嘘をつくな、お主は妾を拒んだではないか！」

「あれは・・・あなたを思ってたの行動です。きっと深く傷つくと思
った・・・」

そして、ここから恥ずかしいです、ここまでも恥ずかしいけど・・・

「でも、気付いたんです！自分の気持ちに！心のおくから湧くこの
想いが！ひどく切ないんです・・・」

「リン・・・」
彼女が目を瞑る

「テオ・・・」
そして、彼女の唇に自分のを近づけ・・・

触れる

そして、もっと奥へと・・・

「ん・・・ふ・・・」

彼女が酸素を求めて声を漏らす

「ふは・・・」
唇を離す・・・

そこに居たのは、一人の少女
顔を赤らめこつちを向いている・・・
急に覚醒する意識・・・
血の気が引いていく感覚・・・
これが、アルの言っていた賢者タイムか・・・？

「やっつてしまったあああ！！！！」
頭を抱え高らかと吼える

「うわ、いきなりどうしたリン？」

「僕今・・・キスしましたよね・・・」

少し戸惑いながら

「うむ、したぞ」

と、言うあなたはとってもかわいい・・・

「だ、だけど、あのとってもいい難いんですけど「酔った勢いとか言ったら殴るぞ？」好きです！」

逆らえない・・・僕はここまで無力だったのか・・・・・・・・・・ぽかーん

「妾も・・・お主のことが好きじゃ・・・」

そう言つてこつちに寄りかかってくるテオドラ

お前、僕に無理矢理言わせただろ・・・好きだけどさあ・・・・・・・・・・僕つてお人よしなのかな？

内心もう今すごい冷や汗だらだらだったりします。
絶賛後悔中です。

「では、もう一度するぞ！」

「なぜに!？」

「仮契約じゃ」

そう言いいそいそと魔方陣を床に書き始める

「だから、床に落書きはダメですよ」

「いいのだ」

そうして、書き終わり陣の中に立ちこちに視線を送ってくる

また突き放したらきつともう二度と戻れない

でも、突き放さなくても戻れない

結果は同じでも、きっと彼女は突き放したら傷つくだろう

なら、僕はあなたを傷つけない、傷つけるものはすべて排除しよう

僕が今までしてきたように……主が変わっただけだ

「分かったよ……僕の負けだ」

微笑みながら彼女に言い放つ

そして、今回はちゃんと一歩一歩人の中に歩み寄る

「決まっておろう、妾はいつも勝つのじゃ」

たしかにな、かくれんぼでもおにごっこでも、俺は勝てないんだ・

・

「じゃ、よろしくなマイ・マスター」

そして、再び口付けをする

辺りが暖かい光に満ち、また消える

翌日

「む、なぜ捕まるのじゃ……」

僕は今……

「はは、仮契約したおかげかも」
僕は今……

「む？関係ないか？」
僕は今鬼ごっこで勝ったんだ

「関係あるさ、繋がったんだろ、テオと僕、僕とテオ。離れてたつて分かる絆って物がさ」

こんな関係初めてだよ

僕は臆病で、恐がりだ。でも、少し勇気を出せば、君に手が届いた（酒の力を使ったけど……）気にしない！

これからも、僕は恐れ、怯え毎日を過ごすんだろ。でも、君だけは守ってみせる、君の笑顔だけは。

第6話―One Little Wish―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

次回、カードの説明します。

第7話―再会―（前書き）

いやあ、色々矛盾してきた気がするけど気にしない！それがモットーです！きつと！

第7話―再会―

『最近戦場で活躍をしていた『紅き翼』が今は大犯罪者に！？今日はその真相を探ってみよう！』

今僕はテレビを見ている

『まず、大犯罪者と呼ばれている理由ですが、先日『紅き翼』のメンバーが数人でマクギル元老院議員を殺害しようとしたことですね』

『いやあ、私もびっくりしましたよ。その時僕もメガロメセブリアに居てね……………』

ニュースを見ていたらなんとナギさんたちのことが出てるじゃないですか

・
ためしに見てみたら、まさか、こんな事になってるなんて……………

「なんじゃ、お主の仲間たちは犯罪者なのか？」

「いや……………そんなことない……………はず」

もしかしたら、酔った勢いでとか……………

暴れただけとか……………ラカンさんとナギさんならあり得る……………

第7話―再会―

「あのお、衛兵さん？僕の魔法封印解いてくれませんか？」

「だめだ、まず、なんで解いてほしいんだ？」

「だって、僕いつもテオドラ様の相手をしていて・・・魔力強化もなく・・・無理です・・・死にそうなんです！」

と、必死で説得する事1時間・・・

「わかった・・・くう・・・お前の苦労は分かった・・・解いてやろう・・・うっ」

泣きながら封印を解いてくれる衛兵

「ありがとうございます・・・」

この衛兵は大事な事忘れてないか？

僕一応敵なんですよね・・・もしかしたらって事もあるかもしれなのいに・・・

まあ、そんな事しないけど・・・

あの日から僕とテオは前以上に一緒に居る事が多くなった
朝起きてから、身を整えテオドラを起こしに行き、朝食をとり、遊
び、昼食をとり、遊び、夕食をとり、話をして、別れ、寝る。
こんな感じでサイクルしながら僕の生活は成り立っている。

テオとの遊びは様々。彼女見た目の割りに頭がいいからカードとか
もできるし。

まあ、できるからといってやるかと言えば、やらないのだが・・・
主にやるのは、かくれんぼと鬼ごっこなどの走る回るもの
あと、時々人生ゲームなどの長いボードゲームだ。ボードゲームの
場合、衛兵なども加わる。

カードは、ポーカールとかが好きだそうだ。

「ちっ！なんで、俺だけいつも！理不尽だ！」

「ふはははー！我は億万長者の道を往く！」

「何を言う！俺に決まってるだろ！」

「ふん！妾に決まっております！」

「残念でした。」

そして、自分の手札を明かす。

「「「「「なっ！ろ、ロイヤルストレートフラッシュだと（じゃと
！「「「「」

そして、今は絶賛ポーカール（賭けなし、今さっきのはノリトーク）

中。

「はっはっはー」

ちなみに、僕はいかさましてますよ？

え？何が悪いんですか？騙されるのが悪いんです！

「くそおお」

「お主、いかさましてるじゃろ！」

「何を！してませんよ！」

ふっ、サラッと嘘も言います。

これも、生きていくため！金のため！

「もう、ポーカーはやめよう………」
一人が言い出す

「では、次は人生ゲームじゃ！」

「また、やるいんですかあ？」
衛兵が文句を言い始める

「そうですよ、昨日も一昨日もその前もやったじゃないですか？」
他の衛兵も言い始める

「そうですよ、ここは『野球拳』やりましょぶ！」
この人たちはテオドラに何を求めてるんだろ？

「何を言ってるんですか？ああ、野球がやりたいんですね？あなたの頭をボールと見立てて！」

「ヒィー！すいませんでしたー！！」
ふう………

なぜかこつちを見上げるテオ

「どうしたんだテオ？」

「のお、リン『野球拳』とは何じゃ？」
それを聞きますか………

「て、テオは知らなくていい物だよ。分かった？」

「むう、妾に隠し事はするなあ。教えろ」

「じゃ、じゃ、後で教えてあげますから……」
くそ……僕はロリコンじゃない！……とりたい

「「「なっ！」「」」

「外野うるさい！」

「「「さーせんしたー！」「」」

「と、いつかテオも昼の時間だ」

「そうじゃったの。では、昼を食べに行くぞ！」

「はい」

今日の昼はサラダに鶏肉を炒めたもの、オニオンスープ＋デザート
のプリンでした。
コック長つまー！

そして、今日も昼の後散々走りまわされた僕だが、今日から魔法が使えたので身体強化が少しされいともよりは疲れなかった。

「ふう」

部屋に戻りベッドに重く座り込む

今日一日を振り返る

衛兵達と仲良くポーカーをして

テオと走り回り、日常だった

あと、テレビも見た

テレビか・・・みんなどうしてるかな？

そんなことを考えてると、頬に一筋の雫が走る
自然と目から涙が零れる

なぜ、僕は泣くんだろう

頭をよぎるは不安

『紅き翼』が大犯罪者として認識されたこと。
思い出すは友

『紅き翼』の共に戦った人達
込み上げるは後悔

『紅き翼』から離れた事
振り払うは疑念

『紅き翼』の真相を知りたい気持ち

僕は迷っていた

自分の中で優先順位が決められなく

今のままテオドラと居るのもいい……………

でも、僕はもともとナギさんと旅をしていたんだ、しかしここから
抜け出すとテオが傷つく……………

そして、気付く

ああ、僕は今こんなにも不安定なんだと

僕の気持ちはここまで弱いのだと……………

自然と胸が締め付けられるような痛みを感じる

膝に肘を突き頭を支え俯く

涙の粒が床に落ちる

タン

落ちたつ粒が弾ける

僕の部屋だけに雨が降っているように感じた

この部屋が僕の心のような感じがした

暗く、物が少なく、雨が降る

区切られた空間……………

でも、そんな僕にもドアはあった

ドアが開く

「リン〜」

テオが部屋に入ってくる

僕のほうを見て

「お主泣いておるのか・・・？」

「いえ・・・ただ・・・目にゴミが入っただけですよ・・・」

はは、こんな嘘バレバレだろうな・・・でも、本当の事は言えない・・・

きっと、彼女は僕を許してくれる、僕を仲間の元へ行かせるだろう・・・

「そうか・・・この部屋も掃除しなくてはな・・・」

どうやら、空気を読んでくれたようだ

「で、テオ何の用だい？こんな夜遅くに」

実のところそこまで遅くない・・・

「う、うむ。実は・・・リンと一緒に寝たいんじゃない・・・」

「いや、さすがにそれは・・・仮にも10代ですよっちも」

そう、容姿に惑わされているが・・・テオも何気に10代なのだよ・・・

「むう、いいではないか・・・」

「はは、分かりましたよ・・・」

「へ？」

彼女が変な声を上げる

「いいのか？」

「いいよ、どうせ断れない・・・」

そう、どうせ断れない・・・僕は逆らえない・・・

「そ、そうか・・・」

もじもじとする彼女もまたかわいい

「どうしたんだ？嫌なら別にいいぞ？」

少しいつもの仕返しをしてやろう

「い、嫌ではない・・・お主がこんなにも早くオツケーするとは思ってなかったから、本当は色々考えておったのじゃ」

「はは、そこまでして僕と寝たかったのかい？」

「・・・そうじゃ・・・」

すいません、逆にこっちが恥ずかしいです・・・

「ほら」

先に布団に入り、彼女を布団の中へ誘う

彼女は無言で布団に入り僕の横に寝そべる

「腕枕する？」

「なんじゃそれは？」

「こうやって」

と、言って手を伸ばす

「僕の腕を枕にするんだ」

「そうか」

そう言って彼女は僕の二の腕に頭を乗せ、僕の服を掴む

「別に掴まなくてもどこへも行かないよ？」

「嘘じゃ・・・いつも、お主はここにいないではないか・・・」

「へ？いつも居ますよ？」

だって、いつもここで寝てるし・・・

「お主はいつも何を悲しんでおるのじゃ？妾はお主の涙なぞもっ見たくないのじゃ・・・」

「・・・」

「教えてはくれんのか？」

僕は口ごもった。まさか、彼女にまで心配をかけてしまうとは・・・

「実は・・・仲間の事が心配で・・・はは、心配しても意味がないのに・・・」

そう、あの人たちは最強、僕と違い、力もあり心に芯が通った人たち

「そうか・・・妾は、妾がお主をここに縛っているのか？そうなら
「そんなことありませんよ」「え？」

「僕がここに居るのは、僕の意志です。でも、仲間の元にも居たい。
僕の我がままです」

「それでも」「デモもテロもありません」「むうゝ」
むくれるテオも子供らしくて・・・何回目だこの台詞？

「テオがいつも通りにしてればいいんだよ」

「そうか・・・」

そうして、二人とも口を開けず、眠りについた

テオドラの顔が笑顔だったのは誰も知らない
作者以外は・・・

そして、次の朝テオと一緒に寝てるところを見つかり執事長に怒ら
れる僕であった

こんな日常が続くと思っていた

でも、それは叶わなかった

ある日城が襲われた

辺りは戦場の後がある

地面が抉られ、壁が破壊され、家具が潰れ、窓が割れてる

僕は地面に横たわっていた

敵は別段、僕達を殺しに来たわけではなさそうだ・・・

現に、他の警備兵なども気絶で済まされている

しかし、なぜ僕だけが起きているかと言うと、それは『紅き翼』での経験故だろう・・・ラカンさんのパンチとか・・・

僕は肩を負傷した

敵の魔法の射手を防御しきれず肩にもらった

壁に寄りかかりながらも主人の部屋へと行く

テオドラの部屋のドアは特別製で魔法のロックと鍵がどっちともついている、しかも両方とも堅固

ドアの前には男達が集まっていた

それにしても、あいつ等の服、メガロセンプリアの紋章入ってやがる・・・

「くそ！このドア、早く開けよ！」

「ちょっと待て！もうちょっとで魔法ロックが解ける！」

「ちっ！早くしろ！他のが起きちまうだろ！」

「分かってるよ！だから、黙っててくれるか！」
ドアの前で口論している。

僕は静かに唱える

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン、魔法の射手、連弾・風の
50矢」

魔力を練り始める

そして、一気に解放する

男共に猛スピードで飛んでいく

「ぎゃー！！！」

そして、着弾

俺は急いでドアに向かい暗証番号を言い（？）ロックを外す、そして、鍵のほうは
ドアを蹴破った

「テオ！」

「リン！」

テオはどうやらベッドの下に隠れていたらしい

子供っぽいな・・・

「リン！」

テオが僕に抱きつき泣き始める

そんな彼女の頭を撫で

「もう、大丈夫だよ。僕が付いてる」

そう言って、彼女と同じ視線になるまでしゃがみ抱きしめる

「よし、じゃ、行かないと！」

「ど、どこに行くのじゃ？」

「まあ、ここじゃない所」

「そうじゃ！アリカから交渉の手紙が来ておった！その場所に行く
う！」

「分かった」

そして、僕は城の後ろに常備してある飛行船で逃走した

なぜMMの連中がテオを狙ったんだ・・・

第3皇女なんて殺しても意味がないはずだ・・・

まさか、本当の狙いは僕？でも、僕を狙う意味もない・・・

ちなみに、怪我はテオが魔法で治してくれました。
治療は使えたみたいですね。

そして、着いた場所はどっか高い塔
そこに居たアリカ姫が僕の顔を見て

「お主リンか!？」

「え?そうですけど?なんで?怖いんですけど?」
なんかいきなり、怒られてるんだけど?

「ナギたちがどれだけお主を心配してると思っておるのだ!」
と、言うアリカ姫

「でも、僕テオの執事になったから・・・それに、この前だって襲
われたし・・・」

「襲われた理由はお主じゃ!お主を人質に取り、ナギに言うことを
聞かせようとMM元老院が企んだのだ!」

「まじでえー!!!」

僕ってそんなに重要キャラなのか!?そうなのか!

「すごいではないかリン!お主そんなにすごい人物だったのか?」
テオもびつくり、お兄さんもビックリだ!

「いやあ、僕も知らなかった・・・」

「お主何を呑気と!」
その瞬間

バン！

電気が消えた

「うわ、停電！」

ぷに

ん？

ふにふに

「んっ！つて、お主どこを触っておる！」

やべえー、アリカ姫にセクハラしてもうた・・・

「そうじゃ、リン触るなら妾を触れー！」

「テオとはもう一緒に寝てるから触るも何もない気がする！」
と、なんかバカな事をしていたが

「もがつ！」

「リモぐ！」

「ん！」

全員捕まりました・・・

ちなみに、頭に袋かぶされてますね・・・

そして、縄でぐるぐる巻き・・・

逃げられませんね・・・

どうやら、僕達は『夜の迷宮』と言う場所に連れて行かれるらしいです・・・

輸送中の話

「まったく、誰のせいじゃ・・・」

「いや、誰にせいでもないと思いますよ?」

「お主のせいじゃ!」

「なぜ!?!」

「お主が、お主が・・・勝手にさわるからじゃ!まだ、ナギにもっ
!」

まあ、ナギさんはどこに行っても女関係すごいな
一国のお姫様だぞ

「ん?ナギにも?はっはー、まさかのナギさんにホの字ですか・・・
頑張ってください!」

「何を言っている!我を愚弄するのか!」
これが、いつもの強気アリ力姫

「まあ、恋愛は自由だと思いますよ!」

「このぉー!」

暴れだすアリカ姫

「のお、リン？ホの字とは何じゃ？」

「ああ、好きって事だ」

「では、リンも妾にホの字か？」

「・・・はい、そうです・・・」

恥ずかしいよ・・・

「ふん！お主だってロリコンではないか！」

「なっ！どこでその情報を！」

「アルビレオが言っておった『自分より明らかに小さい相手に恋愛する奴はロリコンと言つのですよ』とな！」

「アルのばかやろー！知らない知識植えるなよー！！」

『おい！お前等うるさいぞ！』

と、こんな感じで怒られました・・・

僕達が幽閉されて、1週間位経ったとき

「お主なぜそんなにウキウキしておる？」

「え？だつて久しぶりにナギさんに会えるんだもの！もう、結構会ってなかったからなあ」

「そういうば、お主がナギと2人で旅を始めたらしいな？本当か？そうは見えないんだが？」

「本当じゃ！リンはナギの一番目の従者なのだぞ！」

「なぜテオドラが答える？」

「リンは妾の従者でもあるのだ！と、カードを見せる

それを見たアリカ姫は

「ふん。ロリコンめ・・・もうすでに、キス済みじゃないか・・・」

「ち、違う！あの時は・・・（酒に酔った勢いなんていえない！）まず、ロリコンじゃない！テオはそれでも僕とそんなに年は離れてない！」

「年、はな。外見がのお」

と、じいーっとテオを見るアリカ

「アウトじゃないか？」

「うるせえー！」

と、拗ねる僕。

「それにしても、このカードのお主の装備、地味じゃの」

「え？装備何？」

そういえば、まだ見てない・・・

「手袋じゃ・・・いや、手袋から糸が出とるの・・・鋼線じゃな」

「なんか、また使い慣れてないの来ましたね・・・」

そんな時だった・・・

ずうん！！

壁が崩壊して、頭を出したのはナギさんだった

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士。それと吉報じゃ」

「なんだ？」

「ほれ」

と、アリカ姫が僕のことを指差す

「やつ！」

と、手を振る

「り、リン！」

すごい勢いで僕のところに向かってくるナギさん

「ナギさん、久しぶりです」

「おう！久しぶりだな！つてお前ここで何してるんだ？じゃなくて、心配しただろ！」

「はは、すみません。でも、ぜんぜん大丈夫です」

「はっ！さすがは俺の相棒だぜ！」

「相棒・・・ですか」

「ん、どうしたんだ？」

「いえ、なんでもありません」

相棒・・・いい響きです。

第7話―再会―（後書き）

テオドラとのカード

武器名：紅い糸

手袋に鋼線がついている。出したり、伸ばしたり、縮めたりできる。
普通に手袋として使用する事も可！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第8話―終戦の知らせ―（前書き）

どうも！作者のござーん・・・です！このごろ、なんか眠いんですよ・・・なんか今は職業体験で楽なのに・・・

第8話―終戦の知らせ―

「アルさん、この人誰ですか？」

タカミチ少年が問題発言中！

「ああ、彼はですね・・・フフ・・・ただのロリコンです」

「何言ってるんですかアルさん！ぼ、僕はロリコンじゃありません！て、言つかアルさん天才見ながら言っただでしょ？」

「はて？何を言ってるんですか？」

「タカミチ少年！僕はリン・イーストだ！決して！断じて！神に誓ってロリコンではない！」

若干タカミチ少年が引いているが

「分かったかい？」

「は、はい」

これで、問題なし！

今日も、もう一仕事した気分だ！

第8話―終戦の知らせ―

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！どんなかと思えば・
・掘立小屋ではないか！」

「俺等逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」
ラカンさんただの子供の戯言です・・受け流しましょう

「テオ、まだ屋根があるだけかもしれません？いつもは野宿なんだ」
そうである、屋根があり、壁があり、雨が凌げ、風が凌げるだけましです！

「お主ら本当に『紅き翼』か？」
疑わないでください！

「元々、ナギさんと僕が始めた旅ですからね・・結果的に功績を
挙げているだけですな」

そして、思い返す、旅の出发点、ウェールズの山奥

「父さんと母さん、スカーレットは元気かな？」
少し、感慨深くなってしまふ・・もう、離れて1年くらいがたつ・
・

これまで、戦って、戦って、戦って・・戦いしかしてないじゃない

いか・・・

俯く・・・なにか虚しいよ・・・

「心配になったか？」

ナギさんが会話に入ってきた

「まあ、きつと突然消えて心配されてるでしょうし・・・」

しかし、ナギさんのほうを向くとナギさんはそこに居なく、アリカ姫に連れて行かれた

「ああ・・・頑張つて下さい、アリカさん」

誰にも聞かれずその台詞は宙に消えた

見ると、ナギさんがアリカさんの騎士になった模様だ、それを僕にだっこされているテオが見ると当然・・・

「リンは妾の騎士か？」

と、聞くわけですよ・・・

「僕強くないから、執事ですね・・・」

「別に弱くても良い・・・傍にいてくれるだけで・・・妾はそれだけで安心できるのじゃ」

そつ、優しく言ってくれるテオが愛おしく

「ありがとうございます」

と、言っておでこにキスをする

「う、うむ。では、リンは妾の騎士じゃな」
頬を染めながら言い放つ

「はい、マイマスター」

テオが顔を僕の胸に埋める
その顔は笑顔だった

何 か 視 線 を 感 じ る ！ ！

「いや、ラブラブですね」

「そうじゃな」

「ひゅーひゅー」

「やったなりん！」

「やはり、ロリコン」

「私は、私は！」

「見てはいけないぞタカミチ」

「なぜですか師匠！？」

上から、アルさん、ゼクトさん、ラカンさん、ナギさん、アリカさん、詠春さん・・・、そしておっさんとタカミチ少年だ

「見ないでください！ほら、もうテオが茹でタコの用に真っ赤に！と、テオはもう湯気でも上げるんじゃないかと思うほど真っ赤になっ
っていた

「いえいえ、お似合いだと思いますよ？じゃじゃ馬な皇女に面倒見の
良い執事・・・フッフ非常に良い」
アルがコワレター

「まあ、なんにせよ祝ってやる」
ゼクトさん・・・あなたって人は、なんて良い人なんだ

「ああ、自己紹介忘れてた。俺はガトウ・カグラ・ヴァンデンバー

グだ。よろしくな」

「こちらこそよろしくお願いします!」
この人はまともだ!

「あ、ああ」

若干引いてしまったガトウさん・・・あなたは悪くないと思う・・・

全員集合した後は、まあ、僕たちは四面楚歌状態
まず、仲間を増やしながら、戦線に復帰していきました。

仲間の増加。これは、アリカさんやテオがやってくれました。
戦線の復帰。元々バグが足りているので無問題!

え?僕?僕はテオと遊んだり、修行したり。
最近は、瞬動術とかがんばってるよ?あと鋼線も!
タカミチ少年とがんばってます!

「リンさんって・・・弱いですね?」

「ひどい!少年にまで言われるなんて!」

「いや、だって他のメンバーがあれじゃないですか」

「タカミチ少年なんて、咸卦法も使えないじゃないか！」

「じゃあ、リンさんは使えるんですか！」

「使えるはずないだろう！」

「・・・・・・・・」

「ぼ、僕は元々非戦闘員に近いんだ。魔力も平均よりちょっと上位だし……」

「仮にも皇女の騎士でしょ？」

「くっ、そこまで僕を虐めたいのか！ そうなんだな！僕は怒ったぞ！タカミチ少年勝負だ！」

「受けて立ちますよ！」

そして、僕とタカミチ少年の戦いが始まった……

SIDEタカミチ

「リンさんって……弱いんですね？」

僕は、リンさんとの修行中に言ってしまった……いつも思ってい

たこと

なぜ、この人は『紅き翼』の一人なのだろう？
顔も、魔力も、趣味も別段目立つわけでもない・・・

「ひどい！少年にまで言われるなんて！」

「いや、だって他のメンバーがあれじゃないですか」

ラカンさんとナギさんはバグだし、ゼクトさんと師匠は強いし、詠春さんは剣術使えるし・・・

アルさんは博学だし（勘違い）

「タカミチ少年なんて、咸卦法も使えないじゃないか！」

「じゃあ、リンさんは使えるんですか！」

ちよっとカチンと来ました

僕より年上の癖に、年下を大切にしろ！

「使えるはずないだろう！」

「・・・・・・・・」

そこまで、堂々と言われると悲しいのだが・・・

「ぼ、僕は元々非戦闘員に近いんだ。魔力も平均よりちよっと上位だし・・・」

「仮にも皇女の騎士でしょ？」

そう、この人何気に、ヘラス帝国第3皇女テオドラ様の騎士、基、

恋人なのである！

「くっ、そこまで僕を虐めたいのか！そうなんだな！僕は怒ったぞ！タカミチ少年勝負だ！」

「受けて立ちますよ！」

いきなり切れたリンさんが襲い掛かってくる・・・

戦いが始まった・・・

しかし、そこに動きはない

ジリジリと距離が狭まる感覚、チリチリと感じる相手の殺気・・・これが戦い・・・

SIDE OUT

SIDE リン

最初に動いたのはリンだった

立った状態からの瞬動、ゼロからトップスピードへの瞬間的飛躍

僕はそれを目指していた

このごろ考えていた・・・僕の力、僕の戦い、どうすれば相手に勝てるのか・・・

そこに答えはなく、ただ考えが浮かんできた

僕の戦いは、僕だけのもの

いくら、まわりを模倣しようと、いくらカンさんやナギさんを見習っても

それは、僕ではない・・・そして、僕の本来の力でもない

僕の戦い

それは

意表をつく、戦力より戦術

まだ完璧ではない・・・瞬動

少しの溜めを必要とするが、今のタカミチ少年になら十分通用する

「フツ！」

行動を開始した

立った状態からの瞬動は成功、案の定タカミチ少年は驚いて行動が遅れている

「くっ！喰らえ！」

タカミチ少年が、師匠ガトウに教わった無音拳を無闇に放ってくる

しかし、タカミチ少年の拳はまだ遅い、素の状態の僕でも見切れる！

「らあ！」

また瞬動を使い、次はタカミチ少年の進行方向に移動

タカミチ少年の移動エネルギーと反対方向のエネルギーのパンチを放つ

これで、威力アップ！

タカミチ少年が吹っ飛ぶ、って言っても3mくらい

「どうだ、参ったか？」

「くっ・・・まさか、瞬動ができるなんて思ってたませんでした・・・」
「なかなか言ってくれるじゃない？」

「タカミチ少年の敗因は、僕の初動への動揺からの無闇な攻撃だね。いつでも冷静でいるように！」

「ま、まさか、あなたに戦い方を教わるとは・・・」

「僕これでも、結構戦場に立つてるんだよね？」
「今思えば、なんて無謀だったんだろう・・・死にかけてたな・・・」

「ま、精進したまえ少年！」
そして、僕は修行を一時中断した。

SIDEタカミチ

「師匠・・・実は今日・・・リンさんに負けてしまいました・・・屈辱です！修行付き合ってください！」
僕は今日のリンさんとの戦いを思い出す
僕に教えてくれた事実、それはありがたい
でも、でも、『紅き翼』最弱のリンさんに・・・

「いや、タカミチ、おまえは負けて当然だろ？」

「な、なぜですか!？」

「お前なあー、『リン・イースト：ナギとか初期からの付き合いで、魔法力などは平均よりやや上』、今のお前じゃ勝てない」

「だから、修行！」

「それにだ・・・奴は仮にも、英雄の一廓だぞ？超えてきた場数が違いすぎる」

「で、でも！」

「タカミチ・・・強さってのはな、力だけじゃないんだ・・・用は、相性と戦いようだ」

そう言って、師匠は仕事に戻ってしまう

戦いよう・・・相性・・・
力だけじゃない・・・

わけが分からない・・・

「わけ分かんねえーって顔してるな？」

「ら、ラカンさん！」

いきなりラカンさんが現れた

「まあ、今のお前じゃリンには勝てないだろうな。そりゃ、当然だ。あいつだって俺達と戦場に立ってたんだからな。」

「そ、それはそうですね・・・」

「でもな、勝つ方法はある。」

「本当ですか!？」

「ああ、どんなことも、戦術、相性、力、どんなものでも吹き飛ばせるまでの理不尽な強さ。それが答えだ」
そう、言ってスタスタと歩いていってしまう。

理不尽なまでな強さ・・・
そこに僕は到達できるのだろうか・・・
この僕が・・・

SIDE OUT

SIDE リン

時が少し経ち、僕たち『紅き翼』も味方が出来始めた
それから、また時が経ち敵を追い詰めるところまで来た

『完全なる世界』、敵の名前だ。

そろそろ、最終決戦があるだろうと言われているが、果たして僕が
参戦するのか？

きつと、皆に言ったら別に行かなくていいと言われるだろう
でも、僕は行く、僕だけ行かないのは僕が許せない

そんな感じで日々をすごしていると
テオがいきなり散歩に誘ってきた

今は森の中にいる、少し向こうには崖があり、そこが目的地だ
青く茂っている木々、踏み心地の良い苔、鳴いている鳥、いや、怪
鳥・・・

「ゝ」

今テオはいつも通り僕が肩車している

「テオ、何か見える？」

「うむ、木が見えるぞ！」
そりゃ、見えるだろ・・・

「もうそろそろ森を抜けて崖が見えるころなんだけど、って・・・
あそこですね」
木々が少なくなり、崖が見え始める

「おおゝ」

そう言ってテオが僕の肩から降りて走り始める

「早く来るのじゃ！」
テオが先に行ってしまう

「はいはい」
そう言って、テオの後を追う

崖に着くと、そこから下を見てみる

下が見えない・・・これだから、魔法世界は・・・嫌なんだ・・・

「おお、すごい深いぞ？」

「まあ、下が見えないくらいですからね・・・落ちたら死にますね・・・」

崖から3mくらい離れた場所に座る

「あのさ、テオ・・・なんで今日は突然散歩に？」

「お主と二人つきりになりたかったんじゃない・・・」
テオが少し俯き、呟く

「いつも二人じゃないですか？」

「違う、いつもはタカミチやナギや筋肉ダルマが近くに居るのだ」

「で、なんで僕と二人きりに？」

「お主は・・・戦争に出るんじゃない？」

「まあ、出ますね」

「戦場は危ないのじゃろ？」

「まあ、当然」

テオが黙ってしまった

しかし、決心したのか目を合わせて

「それが、最終決戦となれば・・・死んでしまつかもしれない・・・じゃから、妾はお主に行つてほしくないのじゃ！」

「テオ・・・」

きつと、皆の前では弱みなど見せたくないのだろう・・・特にラカンには

「分かつておる、お主は『紅き翼』の一員・・・仲間と一緒に戦いたいのも・・・それでもじゃ、それでも妾はお主を失いたくないのじゃ・・・」

一線の涙が落ちる

今、僕の前に居る女性は僕のことをこんなにも想い、守ろうとしてくれている

でも、僕は何をしただろうか・・・僕は彼女を守ったか？いや、守っていない・・・

それなら、恩返しをしよう。僕もこの世界を救う手助けをしよう

「ありがとうテオ・・・でも、僕は行くよ・・・ごめん・・・」

彼女の事を抱き寄せる

「いいのじゃ・・・」

彼女の頭の後ろに手を当て、頭を自分の胸にうめる

乙女の涙は見るものじゃない・・・

「リン、妾と約束できるか？絶対戻ってくると・・・戻ってきて妾

を抱いてくれると・・・」

「約束するよ。絶対戻ってくる。君が安心してきるまで君の傍にいるよ」

「では、約束の契りじゃ」

そう言つて、彼女が顔を近づけてくる

僕はそれを拒むことなく、受け流す事も無く受け止める

彼女の温もりが、想いが、不安が感じ取れる、流れてくる

胸が熱くなり、彼女がより一層愛おしくなる

「ん、ふっ」

唇を離す

でも、彼女は放さない

ずっと、自分の手で抱いていた存在・・・

・・・

「すう、すう」

時が進み、彼女は僕の手の中で眠りに落ちた

頭を撫でる

「ん・・・リン・・・」

目尻に少し涙が浮かび上がる

「テオ・・・ごめんね・・・」

そう言っ、彼女を抱き上げ、皆の下へ戻る

テオを抱きながら帰ると、皆に色々言われた

それが、日常で、ずっとそのまま居たくて、そのために僕らは戦
つていて・・・

そして、数日後テオとアリカさんは本国に戻り明日の作戦の準備の
最終段階をし始めた

「いよいよ明日だな・・・」

ナギさんが僕に言った

僕たちは今夕日を眺めている
明日守るもの・・・

「明日・・・ですね・・・」

「リン・・・別に来たくないなら「行きます」でも・・・」

「僕は行くと決めたんです・・・何のために覚悟を決めたんですか？」

「でも、お前は「弱い・・・ですか？」・・・そうだな・・・」

「それでも、いいんです・・・別に、活躍しようなんて思っていないです、重要なのは、僕が皆さんと戦場に立つこと・・・」

そして付け加える

「それに、行かなかったらテオが見せた涙の意味がありません・・・そんなのひどいでしょ？」

そう、テオは僕のために涙を流してくれた

「そうだな・・・分かった、もうこれ以上は言わねえ、でも、リン。無理だけはしないでくれよ」

「僕が無理をするように見えますか？」

まあ、ナギさんとテオのためならしますけど

「見える」

「そうですね・・・分かりました、無理はしません。でも、それならナギさんも約束してください・・・生きて帰ると」

「あつたりめえだろ。俺を誰だと思ってるんだ？俺様はナギ・スプリングフィールド」

「最強の魔法使いだぜ（ですね）」
二人同時に言う

二人とも目を合わせ

「あははは」
笑う

僕は願った、この笑顔が最後にならないように
本当はそんなことしなくても彼を信じていた
でも、こんなこともやってみたかった
これで、彼が生きる可能性があがるなら・・・

次の日、決戦当日

「不気味なくらい静かだな奴等」

「なめてんだろ？悪の組織なんてそんなもんだ」
その認識は偏見だと思います！

「はあ、やっとここまで来たんですね・・・もうそろそろ旅も終わ

りって事ですね・・・」
少し感慨深く独り言を言ってみた

「何を言ってるんですか？人生と言うのはずっと旅ですよ？」
しかし、僕の独り言はいつも誰かが入ってくるようだ・・・いい事
言うなアル

「既にタイムリミットだ」
らしいですね・・・いつきますか！

「行くぜ！」
ナギさんの号令の下僕たちは飛び出した

中はもう戦場と化していた
皆が皆敵と戦っている
その中僕は・・・

『墓守り人の宮殿』内部へと侵入していた
僕は儀式まで行き、発動までの時間を計算する
そのため、通信機を全員が所持している

内部は入り組んでいて、やっとの思い出中心部、世界を無に帰す儀式の場所へとたどり着いた

しかし、そこには一人の人が立っていた
全身を黒に染め、黒のローブをなびかせた黒い人

上でものすごい振動が鳴り響き
その黒い人も転移をした

儀式が行われる球体のところまで急ぐ
その中に、少女が独り居た、黄昏の姫御子だ

「う・・・」

大分体力が奪われているようだ、生気の無い表情、ぶら下がっている
しかし、僕の魔力ではこの球体から彼女を出す事は不可能

「大丈夫だ！もうすぐナギさんたちがくるから！」
そう言って彼女を励ます

そうすると彼女も少し生気の戻った表情を表す
どうやら相当ナギさんを信じているらしい

儀式の魔力の練り具合を調べ、大体の発動時刻を計算する
残り50分

「皆！残り50分で発動する！早くしてください！」

『早くって言われても、今戦闘中なんだ！』

「わかりました。僕も上に向かいます」

『無茶するなよ！』

「何言ってるんですか？僕一人だって盾にくあらいにはなりますよ？」

『だから、それが無茶って』
無線を切る

姫御子のほうに向き直り

「ゴメンね・・・僕も上に行かないと・・・でも、絶対助ける」

「は・・・やく、はやく行きなさいよ」
驚く事に彼女は喋った

力を振り絞り、それが小さな声でも、僕を励ましてくれた

「あ、ああ。行ってくる！」

僕は全力で走った
皆の下へ、人の明日を守る場所へ

「アルさん！」

「おや、リンではないですか？」

「終わっただんですか？」

「あとはナギだけですな」

「そうですか・・・」

そうして、ナギさんの方向を見る

しかし、違和感に気付く

何か、向こうのほうから感じる・・・

ドす黒い・・・殺気

ナギさんが白髪を待ちあげている

やばい！今は油断している！

「間に合え！アデアット！」

「な、何をしているんですかリン！」

「あああ！」

一気に魔力を解放する

それをすべて、足に溜め

一気に爆発させる

瞬動！

いきなりナギさんと白髪の間に見え、ナギさんがびっくりしている

「り、リン！お前何を！」

「ふっ、いまさら遅い！」

向こうの彼方から黒い光線が飛んでくる

「『私の盾、我を害するものすべてを弾く!』」
今までに最硬の結界を張る

黒い光線が白髪を貫通

結界に着弾、そして、少し反発して勢いがグンと下がる

パリン

しかし、止まることなく僕のわき腹を貫通、そして止まる

「リン!」

「運が良かったね、千の呪文の男・・・でも、絶望はまだ続くよ・・・」

白髪が消え、また向こうの方からさっきと比べにならないほどの光線が飛来してくる

そこで、僕の意識が落ちたいく・・・
まだ、僕はいつてはいけないのに・・・
それでも、僕は守れたのだろう・・・
大きなものでなく、別にナギさんにとつてはただの負傷でも・・・
僕はナギさんの傷一つ守れたんだ・・・
そのことが嬉しく、そのまま意識を手放した・・・・・・・・・・

第8話―終戦の知らせ―（後書き）

もう、次からハッピーとか思っちゃいけません！まだ、不幸は続く
と思っていてください！そして、このごろほかのssのほうも更新
しようかと思ってます！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第9話―Guardian Souler（前書き）

どうも、作者です。今回もふがない文章を今まで読んでくださったかたがたに感謝を！

第9話―Guardian Soul―

「ぐう……」

瞼が重い、目がダルイ、体の芯から寒い

ここはどこ？

手が暖かい……

瞼の向うは光で溢れている

でも、僕の体が動かない……

それから、どれくらい時が経ったのだろうか

いまだ体の感覚が取り戻せない中、僕は必死に瞼を開けようとしていた

そして、開いた

開いた先に見えたのは

「知らない天井だ……」

第9話―Guardian Soul―

「リン！」

聞こえてきたのはテオの声

「て・・・お？」

あまり、上手く喋れない

「すこし待っておれ！」

そして、テオがどこかへ走っていく

「??」

なにがなんだか分らないです。

そして少しの間ドアの向こうでドタバタしていると
いきなりドアが破られた・・・リアルに破られた・・・

「リン！」

そして入ってきたのはナギさんだった

「ナギさん」

僕は腕の力で体を起こし壁に寄りかかり上半身を起こす

「リン、大丈夫か!？」

「ええ、大丈夫ですけど？何かあったんですか？後、ドアを蹴破ったらだめですよ？」

「え．．．リン、覚えてねえの？ほら、最終決戦とかさ？すこはいつもの事だ！」

「最終決戦」

．．．は！？思い出した！

たしか、僕は儀式場まで行って、上に戻って．．．黒い光線防いで．．．防いで．．．防いで．．．？

「あれ？あ後はどうなったんだ？」

「だから、あの後お前が重傷を負って気絶しちゃったんだよ。それで、まあその後色々あって、敵の親玉を俺が、倒したんだ」

「へえ、さすがナギさんです」

そんなことがあったのか．．．

まさか、あのゼクトさんが．．．いい人だったのに．．．

「それでさ．．．リン．．．あの時はありがとな？」

「いえ．．．守れて本望ですから。感謝される事じゃありません。」

僕も今までナギさんにたくさん守ってもらいましたから」

「そっか・・・そうだよ」おう、リン！起きたのか！」な」
いきなり乱入ラカンさん

「おい！ラカン！何割り込んでんだよ！」

「ああ！別にいいだろ、どうせお前が話したってかわんねえよ！」

「まあまあ、二人ともやめてください」

「ちっ、リンがそう言うなら」

「ま、今日はいいか。で、リンおめえ大丈夫か？」

「ええ、もう大丈夫ですよ。まだ、感覚が曖昧で、立ち上がれませんが。後10分くらいしたら歩けると思います」

「そうかそうか！まあ、リンも起きた事だし、これで一件落着だな！」

ゼクトさんが死んでしまいましたか

「そう・・・ですね」

少し、悲しいような・・・寂しいような・・・
これは思い過ぎだったか・・・

「これで旅を終わりで、旅の仲間は解散ですかね・・・」

「は？何言ってんだリン？まだ、戦後で処理が終わってないからな。色々飛び回って後始末だぜ？」

「じゃ、じゃあまだ皆で旅できるんですか？」

「いやあ、どうだろうな？特にお前ってじゃじゃ馬の騎士じゃね？付いてなくていいの？」

「あ・・・そうでしたね・・・んゝ、迷うなあ・・・旅はしたいけど、テオともいたいし・・・テオはヘラスから離れられないし・・・」

「まあ、心配するなよ。お前は、じゃじゃ馬を守ってやんな。その間俺達が頑張るからよ」
僕が結論を出す前にナギさんが結論付ける

「そう、ですね。後始末の仕方はそれぞれですから。僕はテオの補佐とかで頑張ります」

「そうしろ！」

その後も遅れて入ってくる詠春、抱きついてくるテオなどで騒がしくなった

そして、式典のために部屋を出て行くときのテオの顔は『また後で会いに來い』と言う感じだった。

式典に出たのは、僕、ナギさん、ラカン、詠春だった
ほかのメンバーは仕事だったり、雲隠れだったり

周りに何千の大衆が群がり、僕たちはしかれているカーペットの上を歩いていく

アリカ姫の下に

いざ着くと、僕、ラカンさんと詠春さんのときは早々に済ませたのに
ナギさんのときだけなんだが見つめあたり・・・見せ付けないで
ください・・・

そんな愉快的な時間を過ごしている時だった

なぜ聞こえたのか、なぜ分かったのか。詠唱が聞こえてきた・・・

『來れ、千の口り、我が欲望をもつてこの者を我が奴隷にせよ口り
奴隷』

どこかで、聞いたことがあるような呪文

それと同時にダミーとして放たれる魔法の射手

振り返るとそこには数人のローブを深く被っている怪しい男性の集団が

こちらに、杖を向けている。いや、ナギさんに向けている

この大衆の中誰もが気付いていない。この膨大な声のなか誰もがその詠唱を聞き逃した

もとより、誰もが知っていないさそうな呪文だ

もう時間がない、既に魔法は放たれている

どうせこのお祭り騒ぎのようなときに魔法の一つや二つなど気にする事ではない

だから、誰もが見落としていた。当たっても、ナギさんだ。魔法の射手くらいなら素でも大丈夫だろう。

でも、これは呪い。防いでも意味がない・・・避けないと。しかし、今は避けたところでその後ろに居るアリ力姫に当たってしまう。それもまずい。

よって、選択肢は一つ

一番迅速かつ、助かる可能性がある方法

それは、自己犠牲

僕は瞬動を発動

景色から僕が掻き消えた

そして、現れた先はナギさんの背中

「って、リン！？お前！？」

ナギさんは気付いていない今近づいている魔法は普通でない魔法の射手なんかではない

魔法が両方僕に着弾する、挟られる肉、流れる血
明らかな致命傷、これは、もう・・・

そして、僕は魔法を受けながら詠唱する

『魔法の射手！風の1矢！』

狙いを定め無詠唱で。

矢は飛んで行き、呪いを放った男の頭部に直撃
一瞬にして男の命が刈り取られた

「ぐう！」

胸の辺りが熱い

鼓動が早い

気が動転する

息が荒くなり、膝をつく

「おい！リン！」

ナギさんが僕の肩を持ち揺すってくる

「なぎさん・・・あそのローブの集団・・・」

そして、力を振り絞り手を上げ指差す

「分かった！」

ナギさんがアリカさんに言い、アリカさんが警備兵に

そして、その集団はすぐに鎮圧された

「リン！大丈夫か！？」

「リン！」

「けど、リン。魔法の射手くらいだった俺大丈夫だぞ？」

「ナギさん・・・あれは魔法の射手じゃない・・・呪いです」

「なっ！呪いって！じゃあ、お前どうなるんだよ！」

「見てれば、分かります。があ！」

そして、煙を上げながら僕の姿が見えなくなった

けど、ロリの部分はあるけど、術者は死んだから奴隷の部分はない
んだろうな・・・

傷が思ったより深かったのか、意識が朦朧とする

なんかこれデジャヴだな・・・僕復帰してから倒れるの早くな？

いや、デジャヴじゃないな・・・今回は死んだ・・・

「え？リン、どこ行っただ？」

最後に聞いたのはそんな言葉だった・・・

そして、また目覚めた

あの天井、あのベッド、あの温もり

でも、今回はすんなり起きれた・・・

「うつ」

「リン！」

またテオです

これはまさかのループか？

「ナギ！リンが起きたぞ！」

いや、しかし体に違和感がある、小さいだけでなく、何かが違う

「マジか！おい、リン！大丈夫か！」

「大丈夫です。と、いうより何で大丈夫なんですか？明らかに死んでたんですけど・・・」

「そ、それは・・・」

ナギさんが黙ってしまう

「悪魔の血だ」

ラカンさんが答えてくれた

「悪魔の血？」

「そう、悪魔の血。それをお前に入れることで、バカみたいに再生する悪魔の回復力がでるってわけ。」

おお、そんな事が出来たのか

「まあ、思い付きだけどな」

「はあ！僕実験されたんですか？」

「いや、成功の見込みはあったから、実験ではないな。まあ、お前は回復したが、それと同時に長寿になり成長速度も遅くなっちまったわけだ。しかも、見た目餓鬼だし。また餓鬼からやり直しだな！」

「笑わないでくださいラカンさん！」

「なんか、俺って迷惑かけてばっかだな・・・ゴメンナリン」
ナギさんがしよげてます

「いえ、僕のほうこそ迷惑かけてますよ」

「でも、お前。この前も今日も守ってくれたし」

「それが僕の決めた事です。この身が滅びようとも、僕が守ると誓ったものは」

ナギさんとテオを見る

「守ると決めたんです」

そして、皆が黙ってしまう

「じゃ、じゃが。これで、もっと妾といれるじゃろ？」
と、何の話か分からないです

「そうなるな」

ラカンさんが分かつてる

「そうだな」

ナギさんも

「何の話ですか？」

「いや、お前の話し」

だから、僕の何の話？

「お前、子供になったし、成長速度も下がったから・・・じゃじゃ馬と同じくらいだな」

「へえ、そうなんですか」

ああ、だからもっとテオと居られると

「なんだか、そうなると呪いに感謝ですね？」

「いや、それはないだろ（じゃろ）」「」

「ははは」

笑うナギさん

やっぱし、こんな感じじゃないと

「悲しんでるナギさんなんてナギさんじゃないですから」
誰にも聞かれることなく言った

ちなみに、僕の容姿は9歳で2年に1歳くらい年を取る

しかし、悲劇は続いた

オスティアの崩落

その責任を負う事になったアリカさん「厄災の女王」と名づけられ2年後に処刑が決まった

そのころナギさんは戦地を駆け抜け命を救っていた

僕はと言うと、小さくなくてもテオの横でテオの補佐をしている

処刑まであと10日

ナギさんは行動を見せていなかった

「テオ・・・少し出かけてくる」

「リン？ナギのことか？」

「はい・・・」

「うむ、行ってくるのじゃ！」

それから、僕は3日かけてナギさんが居る家へ到着

コンコン

「誰ですか？」

タカミチ少年も居るようだ

「僕です、リン」

ドアを開けた、タカミチ少年が僕を見て

「リンさん！」

「リンだと！」

そう言っ飛んでくる詠春

「久しぶりじゃねえか！」

と、歓迎するラカンさん

でも、ナギさんが来ない

「ナギさんはどこですか？」

「ああ・・・会わないほうが良いかもしれないぞ？」

「いえ、それではここまで来た意味がありません」

「・・・あつちの部屋です」

と、教えてくれるタカミチ少年

「ありがとう」

僕はその部屋へと歩み寄る

ドアを開けるとそこに居たのは、昔の英雄とは思えないナギさん
目に生気が感じられず、希望も夢も感じない
そこに居たのは英雄でなく、一人の脆い人間だった

「ナギさん」

「リンか・・・」
しばし沈黙

「ナギさん、あと7日でアリカさんの処刑です」

「ああ」
生返事だ

「ナギさんは何もしないんですか？」

「できるかよ・・・あいつは俺に言ったんだ・・・『女一人を救っている暇があるんなら、一人でも多くのいわれなき不幸に苦しむ無辜の民を救え』って」

「それで、あなたは良いんですか？」

「ああ・・・いい・・・」

腹が立った

僕の知る彼ではなかった
もう、面影すらない

「ナギさん・・・あなたがそれでいいはずない・・・」

そして、ナギさんを殴る
初めて、彼を殴った

「なん・・・だと」

「あなたはバカだ！あなたは分かっていない！アリカさんがどれほどあなたを求めていたか！」

「言っな・・・」

「いえ、言います！何が英雄ですか！何が千の呪文の男だ！一人の女性も救えず、自分の心に正直にもなれず！」

「だまれ！」

ナギさんが僕の胸ぐらを掴む

「黙りません！あなたは僕の知るナギ・スプリングフィールドじゃない！僕の知ってる彼はもっと頼れて、もっと輝いて、もっと、もっと」

「もっと、強い男だった！」

「そうか・・・けどな、リン。お前の知る俺はもう居ないんだ・・・」

「
そう言つて、ナギさんが僕を放し、また元いた位置へ戻る

「俺は、弱いんだ・・・」

弱くはき捨てる

「あなたには失望しました」

僕は部屋を退室した

「だめだつたら？」

ラカンさんが言う

僕はそれに答えずに一つのカードを渡す

「もし、もし、彼が本当に救う気があるのなら・・・ここに連絡してください。協力します」

僕の連絡先だ

「ああ、もしそうならな」

そして、僕はそこを後にして、今回は2日で戻る

「リン、お帰りなのじゃ。で、どうじゃった？」

「あまり、見込みはなさそうですね・・・でも、僕は最後まで彼を信じます」

処刑まであと5日

SIDEナギ

俺は今猛烈になやんでいる

アリカは救いたい、でも、あいつの言っていた事もやってやりたい・
・

そんなことで悩んでいるとリンが訪ねてきた

あいつに色々尋ねられ

リンが怒った、あのリンが怒った

「もっと、強い男だった!」

心が痛む

救いたいという想いが膨張する
でも、それを抑える

今の俺に力がないから

「俺は、弱いんだ・・・」

そう、俺は弱い

こんなにも弱い人間だったんだ・・・

あいつが去った後も俺は悩み続けた・・・

アリカがどれほど俺を求めていたか・・・

そして、俺もあいつを求めていた

そんなこと言わなかったが、俺は自然と感じていた

あいつといるときの感覚、なにか暖かく鼓動が早くなる

あの感覚を味わいたい

またあいつと出かけたい

思い出が暴走する

目から涙が流れる

そして知ったこの涙の意味を

俺は悲しかった、あいつが死んだら悲しむと

今になって分かった

だから、俺は俺のために

あいつを救おう、あいつに降りかかる火の粉は俺がすべて払おう

リンが今までこんな思いで守っていたのだろう・・・

あいつの凄さがわかる

あいつは2回しか俺を守らなかった

でも、2回守ってくれたのだ・・・

なら、俺も守ろう・・・リンほど上手くないけど
できるかぎり尽くそう

俺はあいつを

救う！

SIDE OUT

処刑当日

そこには幾千の人が集まっていた
警備も万全、なんだかもう戦争おこしそうな勢いで

その中意を決して行動をする者たちが居た

アリカさんが谷へと落ちていく

「よぉーし、こんなモンだろ」

「貴様何者じゃ！？」

そしてラカンさんが力を居れ特注（時間掛かった）を一気に壊す

「千の刃！ジャック・ラカンだと！」

そして、次に詠春、アル、ガトウと出てくる

そして僕も降りる

「誰！？」「」

「はあ・・・」

「まあ、いいじゃねえの『護り人』さんよ」

「ラカンさん、その名前やめてください。恥ずかしいです」

「いいんじゃないか？お前はナギの危機を二度も救ったんだ。誇りに思え」

「わかりました」

詠春さんの言った事を納得する

そして、話に出てきたナギさんと言うと・・・
谷の下で怪物たちと鬼ごっこ中だろう

「じゃ、こっちも始めますか？」

「「「おう！」「」」

「行きます！アデアット！『我守らん。我が大切な者達を。』『我は偏在する、数多の敵を止めるため』」
身体強化を全員に施し、自分の分身を作る

「僕の分身はいざとなったときの盾なりなんでも使ってください！」

「さすが『護り人』。自己犠牲だなww」

「いや、分身だし」

それから、僕たちは暴れた

いや、主にラカンさんが暴れた

僕はほとんど戦力外、時々不意打ち程度で

処刑も無事終わり、ナギさんとアリカさんは無事結婚したようです
それで、これから二人の新婚旅行として詠春の故郷の旧世界の京都
に行くらしいです

まあ、僕は行けませんけど、テオがこっちに居て、忙しいし

「それじゃ、僕戻りますね。皆さん元気で！」

「ああ、お前もな！じゃじゃ馬によろしく言っといてくれ！」

「はは。分かりました！」

そして、テオの元に帰る

僕の最愛の者の元へ

きつと、これからずっと一緒にいる存在

その存在のありがたみ、暖かさ

忘れてはいけない、人は一人で生きていけないのだと・・・

第9話―Guardian Souler（後書き）

よんでくれてありがとうございます。

リンの年齢操作に『ご都合主義！』とか突っ込まないでください！
本策で30代のおじさんを書きたくなかった作者のわがままです！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第10話―僕が麻帆良に至るまで―（前書き）

なんだか最近眠い作者ごろーんです。東鈴ってなんだか読みにくい
ですよ？

第10話―僕が麻帆良に至るまで―

あの処刑からすでに11年の年が経っていた
この11年間で色々な事があった

テオが襲われたり、襲ったり

テオの成長具合にはびっくりですね

今は大体13、14くらいで出るところはちゃんと出てる。スタイルは抜群だ

まあ、そんな彼女を彼女に持つ僕は同じ14、15くらいで身長は173くらいですね

魔力も減ってから増え始め今では元の魔力の3分の2くらいに回復している

ああ、あとラカンさんに無理矢理拳闘士の大会に出されたり・・・

後、ナギさんが死んだという噂もww

そんなあるときのことだった・・・

「おい、リン！ナギから手紙が来ておる！」

「まあ死んでないと思ってましたが・・・」

「ほれ、早く読むんじゃ！」

急かすテオ

「はいはい」

そして、手紙の封を切って読み始める

「ふむふむ・・・」

そして、読み終えてしまう

「ど、どんな内容じゃ？」

「自分の息子『ネギ』を頼む、と書いてありますね。故郷に今居るようです」

「そ、そうか・・・で、行くのか？」

「当然行かないと行けませんね。親友の最後の頼みです・・・だから、少しの間辛抱しててください・・・」

「わ、妾ももう子供ではないのだ！それくらい出来る！」

「それでは、支度をしたらすぐ出るのと、言って彼女を抱き寄せて唇を奪う」

「げ、元気でな」

送り出してくれるテオに手を振り

「手紙とか送るから！」

新たな旅が始まった・・・

第10話―僕が麻帆良に至るまで―

僕が付いたのはウェールズの山奥

たしか5年前に一回訪問した

その時に、親に自分の体のことを説明してあるし

そして、まず目指す先はナギさんの親戚の家

ネカネ・スプリングフィールドの自宅

彼女はいつもは魔法学校に行っていて家に居ないが、今は休み中だから居る

自宅は人に聞きすぐに見つかった。

中からはネカネと思われる女性の声と、ネギと思われる少年の声、
そしてもう一人女の人のものと思われる声が聞こえてくる

まあ、僕は会話なんて構わずノックをします

「はい、どなたでしょうか？」

ネカネさんがドア越しに話しかけながらドアを開ける

「こんにちは、僕はリン。リン・イースト」

「り、リンさん！？なんでこんなところに？」

まあ、僕も知られているようだ・・・

今でも、平凡で覚えてくれない人も居るけど

「ある人物に頼まれてね。君達の世話というか、なんか任されたんだ」

まあ、具体的に言うとなにをやるんだろ？

「どうせナギさんは遺産とか残してないんだろ？ 僕が生活費を持つよ。大変だろ？」

「いえ、でも「まあ、ここは年上に頼りなさい！」年上？」

「あれ？ 聞いてないの？ 僕ナギさんと1歳しか離れてないよ？ だから今・・・32歳？ それくらいか」

「ええ！ でも、あのどう見ても10代ですよ？」

「まあ、色々呪いでね！ まあ、それはそうとあれがネギ君？ 呪いでね！ 説明めんど！」

「ええ」

「また随分と父親に似てるね」

「でも、性格は真逆ですよ」

「へえ、まあ、そうか。ナギさんだったら今頃殴りかかってるね」

「え？」

「まあ、その話は置いて。こんにちはネギ君。僕はリンって言うんだけど、君のお父さんの親友だ。」

「ほんと！ お父さんの知り合いだって。ねえ、お父さん生きてるの？」

「ああ、生きてるよ。ナギさんが死ぬはずないだろ老い以外で」

「じゃあ、いつか会える？」

「会えるんじゃないかな？ネギ君が頑張れば」

「ほら！アーニヤ！父さんにはまだ会えるって！」

「そんなの嘘に決まってるでしょ！こんな、ネギより魔力低そうな男の言うこと嘘に決まってるじゃない！」

「アーニヤちゃん、そんなこと言っちゃだめよ？彼は紛いもなく英雄ナギの最初の従者のリン・イーストよ？」

「で、でも私でも倒せそうないひよる男じゃない！」

「なんか、もう死のうかな・・・確かに、ナギさん譲りのバカ魔力のネギ君より魔力低いけどさ・・・」

「俺これでも、年上だよ・・・」

「あ、ははは。言うじゃないか少女」

「私少女じゃないわ。『アーニヤ』ってちゃんと名前があるんだから！」

「分かったよ、アーニヤちゃん。まあ、あまりネギ君を虐めないでくれよ？」

「虐めてなんかないわよ！」

「あ、あの？リンさんはどこに泊まっていくんですか？」

「ん？僕？僕元々この村に居たからここに家族いるよ？」

「え？ええ！！そんなの初耳ですよ？」

「マジで？あっちの角を曲がった突き当たりにある家だけど」

「で、でもあそこの家の息子さんはもうそろそろ三十路とかって・
・あ、そうか」

「なかなかおつちよこちよい何だねネカネさん」
「なんだか癒された気分だわw w」

ネカネさんは頬を染めて俯いてしまう
そこにアーニヤが

「ちょっと！ネカネさんを虐めないでよね！」

「はは、虐めてないよアーニヤちゃん」

「嘘よ、そんなの嘘！」

「まあまあ、そうやってすぐ人を疑うのは良くないよ？」

「人を疑ってるんじゃないわよ！あんたを疑ってるの！」
「そんなこんなで挨拶を済ませて、自分の家に戻る」

ドアは勝手に開けます

「ただいまあゝ」

そして、家に入るとスカーレット（妹）がソファに寝転がりながら魔道書で顔を覆い寝ようとしていた
しかし、僕に気付くとその魔道書を顔から離し

「あ、兄貴!？」

「やあ、スカーレット久しぶり。でもいきなり『兄貴!？』だなんて。もうちょっと女の子らしく出来ないのかい？」

「そんなもの私に求めないでくれ」

「ああ、僕が悪かった。」

「まあ、とにかく待ってる、父さんと母さん呼んでくるから」
そうして、スカーレットが2階に走り親を呼びに行ってしまう

スカーレットはなかなか美少女だと思う

別にシスコンとかではなく

すらつとした体、整った顔立ち、長い紫のツインテール

我が妹ながら僕と違い、目立つほうだ

近くにスカーレットが読んでいた（と信じていた）魔道書を取る

その内容は『瞬動術の基本―PART?―』だった

この時代はこんなに便利になったのか・・・

俺が覚えたときは・・・はあ、苦労したのに

「おお、リン久しぶりだな！」

降りてきたのが少しやつれた父

「あらあら、リン君お久しぶり」

それと少しおっとりした母

「久しぶり父さん、母さん。二人とも元気そうだね」

「ああ、お前こそ・・・なんか成長してないな？」

「言っただでしょ、そういう体になっただ・・・」

「そうよねえー。なんで私より年上なのに、私より若く見えるのよ！」

と、なんだか意味なく怒ってくるスカーレット

まあ、確かにスカーレットは今26歳だからね。

僕は15だし・・・

「いや、だって僕2年に1歳だし」

「はあ！そんなのいんちきよ！」

「いや、いんちきとか言わないでよ。僕死ぬところだったんだからさ」

「まあ、いつか。でも、自分の兄貴が英雄の一人と考えると・・・
なんか複雑・・・」

「まあ、いいじゃん。勝手に金入るし」

「うわ、それ権力濫用じゃない？」

「いいんだよ、使えるものは使わないと」

「今から夕飯だけど食べていく？」

「と言うより僕今日から泊まってくんだけど？」
と、久しぶりに家族で楽しく食卓をともにする

次の日

僕はアーニヤちゃんとネギ君とで外に遊びに出ている
二人とも活発でいいじゃないか
まあ、こちらとテオと毎日遊んだ戦士なんでね
負けない！

つて、あれタカミチじゃないか？
なんで奴が？

「よお、タカミチ少年」

「り、リンさん！？何でここに？」

「ま、親友の頼みでな」

「そ、そうですか？」

「お前は？」

「ぼ、僕はネギ君に会っておこうと思ひまして」

「そっか、ネギ君なら今川のほうで遊んでるぞ？行ってあげろよ。お前が居れば安心して帰れる。それじゃ！」

そう言つて僕は瞬動で町に戻る

「はあ、なんか暇だな」

そう、タカミチ少年がいる以上ネギ君の近くに居る意味がないしかし、僕に町ですることもない・・・

「あ、スカーレットだ」

と、自分の妹の姿を発見

彼女は今男に囲まれている
なんだろ？かつあげかな？

「おゝい、スカーレットおゝ！なゝにやってんの？」

「あ、兄貴！？お前こそ何やってんだよ！？ネギはどうした？」

「葱？今日の夕飯には使わないからいらないんじゃない？」
何を言ってるんだこの妹は

「ちがうちがう、ネギ少年のほうだよ。面倒見てるんじゃないの
かよ？」

「ああ、タカミチ少年が来たから、僕ようなしなんだ」

「た、タカミチ！？あの、タカミチか！？」
なぜそこまでタカミチに！ま、まさか！お前！

「うん、そうだけど？何か？」

「だって、タカミチだぜ？あの超有名な」
よかった、惚れてるとかじゃないのね・・・

「ああ、あいつもだいぶ有名になったんだっけだ・・・俺に負けて
たあのころが思い出されるぜ・・・」

「つて、負けてたって！兄貴タカミチに勝ったことあるの？」

「まあね」

と、こんな感じで兄弟の親睦を深めているところ

「おい！スカーレット！今日こそ恨み晴らしてやるぜ！ついでにそ
このスカーレットと関係ありそうな餓鬼もな！」

と、周りに居た男代表が言ってくる
まあ、周りにはざっと13人くらいの男が囲んでいる

「お前、なにかやったの？」

「ああ、ちよつと・・・ケンカで負かした・・・友達から金取ろうとしていたから・・・」

「ああ、面倒な事しやがって、どうすんだよ？お前勝てないだろ、この人数じゃ」

「う、逃げるしかないか・・・」

「と、言いたいところだが。まあ、ここは兄貴に頼ってみるよ？」

「え？兄貴に？でも兄貴弱いんじゃない？」

「ひどい！俺それでも戦場立ってるんだよ？」

「おめえら何ごちゃごちゃ言ってるんだ！よし、お前等『魔法の射手！連弾氷の5矢』」
そして、周りの男達も放つ

魔法の射手はなつてくるとか・・・
妹よ、どれだけ恨まれてるんだ？

「きゃあー！」

妹が乙女っぽく悲鳴を上げる

「少し？まってるよ？」

「え？」

実の妹をお姫様だつことかしたくないんだけどな・・・

「よつと！」

足に微力な魔力を集めて上に跳ぶ

そして魔法の射手が互いにぶつかり爆発

そしてゆっくりと着地

「ふう、疲れた・・・」

「早いよ兄貴、まだいるんだよ」

魔法の射手が当たらなかった事から、相手は直接攻撃に切り替えてきた

でも、魔法使いが近接ってどうなの？

「めんどー」『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞』

風が渦巻く、何気に妹のスカートが捲れるが、それを抑えてあげる

「ありがと兄貴」

そんなことで感謝される兄貴・・・悲しす

「……うらあ!!」「……」

何人かの男達が襲い掛かってくる
剣、ナイフ、鈍器

どこから取ってきやがった!?

「ほい」

僕は一人一人の攻撃を避け、相手の武器を破壊する
剣とナイフは折、鈍器は奪い取る

そして、残りの男も掛かってくる

「もうめんどくさい。アデアット『紅い糸』」

そして、手袋が現れる

「今命名!束縛!」

そして、糸を放つ。

相手に向けて、糸が相手の四肢に絡み、相手の身動きを封じる

「があ!」

一人が無理矢理とこうとするが

「やめたほうがいいよ?無理にとこうするとスパッと切れるから」

そして、男達は動きを止めた

「よし、じゃスカーレット帰るぞ!」

「わ、わかった兄貴」

そして、その場から離れる

「なあ、兄貴切れるって危なくね？」

「え？嘘だよ。あれただのちょっと綱線だからすぐちぎれるよ？」

「は？」

「戦闘とは、化かしたほうが勝ちなんだ」

「・・・それでも英雄？」

「勝ち残ったものを英雄と言っただよ？」

「そっか・・・なんか、見損なったかも」

「なっ！それひどくない！僕みたいに才能のない平凡ががんばってここまで生きてきた術を伝授してやろうと思ったのに！」

「いいよいいよ。私兄貴と違って才能は足りてるから」

「うわーん！」

そして、より一層早く走る、いや瞬動である

「って、兄貴瞬動使えたの！？ちよつとそれ教えてよ！」

「いやだね！」

そして、家まで追いかけっこしました。

「ただいまあゝ」

「ぜつはあ、ぜつはあ、なんで兄貴は息切れしてないの？おかしくない？」

「まあ、鍛え方が違うんだよ」

そして、今日も今日とて普通に日が過ぎていった

まあ、それからの日々は、ネギ君が犬にいたずらしたり、真冬の池に飛び込もうとしたりするのを止めたりして忙しかった・・・
それも、日常になってきていたある日の事だった

今日はネギ君が釣りに行くのを着いていった

「いいかい、ネギ君、釣りのコツは忍耐だ。釣り、それはつまり己との戦い。」

「そ、そうなんですか」

「そうなんですよ」

そう言つて、ネギ君は釣りに夢中になる

そして僕は本を読み始める

読んでいる本は『妹の扱い方』だ

別にそういう趣味ではないが、最近スカーレットに舐められているので・・・

あの妹はなぜ瞬動が1週間でできる！？俺は2ヶ月掛かったのに！

そうして、本に集中していると、寝ていた

え？それって集中してないんじゃないか？それはなにかの勘違いだ！

「って、やば！ネギ君は！？」

と、あたりを見回すと、村のほうの空が黒い

「やばい！この気配・・・悪魔か！」

そして、全力で村に走る

そこは燃えていた

家が崩れ、人が固まり、野原が燃え

「くそ！どうなってるんだ！」

相手も人を殺す気は無いようで石化させている

「くそお！」

そして、村を走り回り自分の家へと急ぐ

ドアを破る

「父さん！母さん！スカーレット！」
自分の家族の名前を叫ぶ

「きゃあ！」

2階から悲鳴が聞こえる

2階へ急ぐ

そこには、スカーレットを庇う母、それを庇い石化した父が居た

「退クンダ女」

「い、いやよ。娘だけは！」

「フッフ申シ訳ナイネ命令ナモンデ」
そう言つて石化光線を放つ悪魔
母がスカーレットを庇い直撃

「お母さん！」

「に、げなさい・・・スカーレット・・・兄さんの事をよろしくね、
あの子意外にドジだから」
そう言つて固まってしまう

「お母さん！お母さん！」
泣き叫ぶ妹

それを見てあざ笑う悪魔

許せない・・・そして、許さない！

「アデアット。『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」
刀を作り

「『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』」
相手に突っ込む

「ム！」

こっちに気付いた瞬間もう遅い！

「はぁ！」

悪魔の上半身と下半身を真つ二つに切り裂く

「兄貴！」

「スカーレット、はやくこっちへ来い！」

「でも、でも母さん達が！」

「早く！」

そうして、スカーレットを無理矢理引っ張る

「待ってよ！」

「だめだ！」

そうして駆ける

「ひつく・・・ぐす・・・ん」

俺に抱かれながら泣くスカーレット

「もう、泣くなよ・・・」

しかし、そんな感動できそうなシーンを邪魔する悪魔達

「逃ガサナイ！」

襲い掛かってくる無数の悪魔を避けながら切りつけ
その繰り返し

しかし、僕は油断していた

一匹の悪魔に

自分の気配を絶ち機を待っていた

そして、そのときが来たとき

奴は放った石化魔法

僕は着地した瞬間を狙い

回避不能なはずだった攻撃だった

でも、僕には当たらなかった

なぜなら、そこにスカーレットが居たから

「スカーレット！お前、なんで！」

倒れる妹を抱える

「母さんに言われたからね・・・」

目から涙が零れる

「兄貴を頼むって・・・」

彼女の最後の言葉を聴きながら
心が暴走しそうだった

「やっぱり、重要なところでドジるんだな・・・やっぱり、私がっ
いてない・・・と・・・」
そう言っつて固まる

僕の家族が・・・

僕の想いが・・・

僕の大切なものが・・・

護りたかったものが・・・

崩壊する

壊れる

崩れる

割れる

許せない・・・ゆるせない・・・ユルセナイ

ユルスナ！殺セ！

自分の中の悪魔の血が騒いだ

髪の毛が黒から金に変わった
一気に魔力量が跳ね上がった

「あああ!!」

力の暴走・・・

刀を一太刀・・・

それで終わった

今の僕は負けない・・・

今の僕は怪物だから・・・

すべてが真つ二つになった

まるで一枚の絵を切るように

「エ？」

そして、全てが消える

元にもどっていく

悪魔達が消えた

そして、僕も元に戻る

髪が元の黒に戻る

魔力が元に戻り

でも、家族は戻ってこない・・・

自分の妹を見る

もう固まってしまった妹を

「スカーレット・・・」

涙が溢れる

「俺は、護れなかった……」

「何が英雄だ……なにが『護り人』だ……僕は何も守れなかった……自分の家族すら……3人の命すら！」
そして、僕は吼えた

奴等が憎いと

初めて思った、憎いと

少し時間がたつと

俺は落ち着きスカーレットを安全な場所に戻す

少し離れたところで雷の暴風が発動されている
この魔力は……ナギさん！？

そこから僕は全魔力を使い瞬動をする
景色が飛び、草原に着く

「お、リンじゃないか。はは、どうした泣き顔で
ナギさんが居た。いや、分身だろう」

「家族が……」

「そうか……まあ、大丈夫だろう。俺の息子が頑張ってくれさ・
……」

そう言ってネギのほうを見る

「彼なら、きっと辿り着くんでしょうね……」

「俺の息子だぜ？」

「はは、そうでしたね・・・それなら、僕は彼がそこに至るまで見守るだけです」

涙を拭う

まだ、希望はある

あのナギさんの息子だ・・・常識なんて通用しない
解決するはずだから

「頼むぜ？」

「はい」

それから、村が救助され

生き残りは僕とネギ君とネカネさんだけとなった

ネギ君とネカネさんは魔法学校に通い

僕はと言うと・・・

魔法学校の校長に久しぶりに会いに行ったらなんか知り合いの学園
長が人手がほしいそうで・・・

麻帆良学園に来ました

ここが関東魔法協会の本部で、たくさんの魔法関係者が居るらしい

僕はここに・・・なにとして入るんだろう？

僕2年に2歳だけだから・・・まあ、飛び級とかにすれば大丈夫だね・・・

今15だから・・・高校1年かな？ちょうど春だし、高校生からやれるね

僕は寮でなく一人暮らしをする

このアパートは魔法関係者で固まっているらしい

下には明石教授という先生とそのお子さんが住んでいるらしい
いろんな先生が住んでいるところに特別に住ませてもらっている
学園長いい人だな

まあ、明日くらいに会いに行こうと思う
今日は引越しかで疲れたし・・・

次の日いゝ

「学園長、失礼します」

「うむ、入れ」

「お邪魔しま・・・す？タカミチ少年じゃないか」
こんな所で会うとは・・・
なにかの因縁か？

「リンさん、何してるんですか？」

「いや、僕呼ばれたんだけど」

「そうじゃぞ、ワシが人員不足じゃから向ここの校長に頼んでの」
そこに居た学園長は・・・なんて言うか
頭の長い人でした・・・

「あ、こんにちわ、申し送れました僕はリン・イーストです」

「知っておる。そうじゃ、リン君。今日からはリン・イーストでなく『東鈴』あすきんとなのれ」

「はい、別にいいですけど・・・なぜ？」

「外人さんと騒がれたくないんじゃない？」

「はい。ご考慮ありがとうございます！」
この人は良い人だ！確信した

「うむ、で、これが仕事内容じゃ」

そして、書類をもらう

内容は

？学校の警備

？護衛の依頼などをこなす

？学業に励む

なんて簡単なんだ

「分かりました。僕が必要になったらいつでも呼んでくださいね」

「うむ、それでは今からついてきてくれんかの？」

「え？今から？」

「うむ、今から鈴君の紹介で、魔法使いたちで集まるのじゃ」

「わかりました」

そうして、連れて行かれたのが世界樹広場

「でかい木だねタカミチ少年」

「そうですね。まあ、世界樹ですから。」
タカミチ少年は準備運動を始めている

「ねえ、タカミチ少年なぜ戦闘用意しているんだい？」

「さあ、なぜでしょうね？」

それから、少し経つとたくさんの魔法使いが集まってきた上の階の明石教授もほかの先生もいる金髪幼女もいますね？彼女何者？

「本日ここに集まってもらったのは彼、鈴君の紹介じゃ」

「よろしくお願いします。東 鈴です。色々と未熟ですが精一杯頑張ります」

「何を謙遜しとるのだ。お主はあの『護り人』なのじゃろ？実績も伴なつとる」

護り人

護れなかったのに

「いえいえ、僕に守れなかった人も……たくさん……いますから」

「そうか……まあ、少し悪いんじゃないが。今から模擬戦をしてみら

「つていいかの？タカミチ君と」

「ええ、構いませんよ？実は僕ももう準備万端なんです」

「そう僕はあの日からいつでも襲われていいように武装している」

「うむ。ではタカミチ君も用意はいいかの？」

「いつでもどうぞ」

「では、はじめ！」

「アデアット」

「二つのアーティファクトを出す」

「『我薙ぎ払う、我の敵全てを』 我ここに願わん、武人としての
極みを・・・武神の舞！』」

「光が収束して武装を作る」

「出来たものは傘」

「なんの辺鄙のなさそうな青い傘」

「そんなものでいいのかい？」

「逆に言っけど、僕に出させてよかったのか？」

「本気でやりたかったからね！」

そうして、いきなり咸卦法使ってくるタカミチ少年

「なんか怒ってるでしょ？」

「いえいえ、ぜんぜんなんで僕より年上なのに・・・なんて考えてませんよ？」

と、いいながら無音拳をとばす、いや、タカミチ少年のは居合い拳だったな

「わっ！」

そして、それを転がりながら避ける

「やっぱし、あのころの僕は弱かった・・・あなたに負けるほどに・・・でも、僕は強くなりました！あなたにも勝てるほどに！」

「ふふふ・・・ほんとにそう思ってるのか？僕に勝てると・・・」

「何を！もう実力差は歴然です！傘で何が出来るんですか！？」

「でも、残念だったね。僕も本気でいかせてもらっよう！」

「なっ！」

「左腕に魔力！そして！」

「まさか、あなたも咸卦法を！」

「やっぱり、右腕にも魔力！」

「へ？」

タカミチ少年が固まる

まわりが滑る

でも、僕は動く

「油断禁物だ！」

タカミチ少年を傘で殴り飛ばす

無防備になっていたわき腹にもろに入り骨は一本くらい折れただろう

「ひ、卑怯ですよリンさん」

「は？戦いに、卑怯もくそもないよ？勝ったものが勝ちだ！」
言ってる意味が分からない？自分で考えろ！

「くっ！」

そして、居合い拳をたくさん打ってくるタカミチ少年

「よつと！」

瞬動で次々に避けていく

「そんなんじゃ当たらないよ！」

「何を！」

少し怒らせてしまったのか

「豪殺居合い拳！乱れ打ち！」

なんか凄いコブシが飛んできたー！！

「うわぁー!!」

そして、その真所が煙で覆われる
すこし時間が経ち煙が晴れる

「はぁはぁ・・・なかなかやるじゃん・・・」

「これで、僕の勝ちですね」

「いや、まだだね!」

そうして、ポケットに手をつ込みマグネシウムの帯を取り出す

「喰らえ!」

そして、それを燃やす(ライターで)

「くっ!」

あたりが光で包まれる

そして、晴れたとき僕は傘を開いて自分を隠していた

「なっ!」

驚いているようだ、そうこれに意味はない・・・
ただ、びっくりするだけ。
しかし、それだけでも

僕は傘を開き中に仕込んであった刀を引き抜き瞬動で移動する
一瞬の動揺と傘のおかげでタカミチ少年には気付かれずに近づき

「第一節、木枯らし」
切り刻み

「第二節、陽炎」
後ろに回りながら切り

「第三節、蛇絡み」
自分の足を相手の足に巻き一気に引き抜き転ばせる

この間時間は1秒に満たない

「終節！降雷斬！」
思いつ切り下に突く

「どうだげぶう！」
効かなかった・・・まあ、分かってたけど・・・

「なんですか今のは？やる気あるんですか？」
最後の突きは首の横に外れていた・・・当たってたら痛いしね！

「ああ、僕は大真面目さ！」

「なら、あなたは万に一つ僕に勝つ可能性はない！」

「はっ、抜かせ！まだ、切り札はあるんだぜ！？」

「なっ！」

手袋をしているほうの手を引つ張る
そうすると、タカミチ少年が動かなくなる

「こう言うことですか・・・今さっきの動きも・・・」
そう、僕の今さっきの意味のない乱舞は鋼線を絡めるための行動

「でも、こんな系！はあ！」

「切れないよ？僕の全魔力注いでるんだから」

「ぐう！」

もつと力を込めて暴れる

「無理矢理はやめたほうがいいよ！切れるからさ、そりゃも輪切りになるよ？スパツと、スパツとね」

「くっ」

どうやら、やめてくれるようだ・・・

「これで、僕の勝ちかな？」

「また、僕の負けですか・・・弱ったあなたにまで負けるんですね僕は・・・」

「まあまあ、僕だって弱くないし・・・」

「まあ、仮にも皇女の補佐で英雄の一廓ですからね」

「嫌味か？」

いやな奴だなタカミチ少年・・・そんな奴には友達できないぜ？

「じゃ、僕帰りますね？」

ふああ、眠い

「うむ、よいぞ」

よし、全速力で帰って風呂入って寝よ！

「じゃ、さようなら皆さん！あ、そうだタカミチ少年！今さっきの糸！切れないから！」

「なっ！だましましたね！それだったらあの後千切れたのか！」

「っははあ！戦いは力だけじゃないって言っただろ！騙してなんぼさ
」！」

そして、僕の麻帆良ライフは始まった・・・
もうすでに疲れた・・・

第10話―僕が麻帆良に至るまで―（後書き）

やっぱし、戦闘描写むずすぎますねww次は第3者からやろっかな？

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第11話―それぞれの思想、そして始動―（前書き）

ものすごい久しぶりの投稿ですwwなんだか最近忙しすぎて気付いたら5ヶ月とかwwこれからは不定期で亀だけでも更新していきたいと思います。小さい子を書くのは苦手だけどチャレンジしてみます。

第11話―それぞれの思想、そして始動―

僕は世間的には『立派な魔法使い』に近い存在だった
でも、僕は断った。僕にはテオのサポート多々があるから
それでも、僕の評価は変わらなかった

周りは僕を『正義』と思い勝手に『立派な魔法使い』見習い的なものにした

僕はそれからかけ離れているのに

第11話―それぞれの思想、そして始動―

SIDEガンングログラサン教師ことガンドルフィーニ先生

今日私達が集会があると言われ世界樹広場に集まった

今日紹介されたのは東鈴ことリン・イースト

千の呪文の男とともに大戦を戦い抜いた英雄の一人だ

私は尊敬していた、彼は人並みの才能で彼等に着いていき生き抜いたのだ

そして、噂では2度もナギ・スプリングフィールドの命を救ったとか
そんな彼に会えるのは光栄だった

しかし、来たのは誰だろう

未だ15歳くらいの少年ではないか？

確か、リン・イーストは今三十路くらいのはず・・・

まあ、そんな事はどうでもいい

用は彼がそれほどの人材であるという事だろう

彼は短く自己紹介するとタカミチと模擬戦を始めた

その内容に驚嘆した、そして同時に失望した

相手を騙し、動揺を誘いその隙を突く

しまいには、意味のない行動をする

そして、決め付けに嘘を吐き相手を負かしていた

これが英雄なのだろうか？

この戦い方はまるで立派ではない

立派であるものは正々堂々と敵を正面から倒すものだ

なら、彼はなんなのだろう？

正義？立派？いや、違う・・・

彼は悪に近い・・・

僕は今日失望した

自分の尊敬していた彼が

こんな人物だったとは・・・

SIDE OUT

SIDEタカミチ

今日は久しぶりにリン君と模擬戦をした
内容的にはもうすでに模擬線でないが・・・

彼は以前からまじめに試合をしていなかった
まるですべてを受け流すように力なく相手を切り伏せた
しかし、今日はどうだろう？

僕を欺き、騙し、驚かし
動揺を誘い、そこを突く
それはまるで盗賊のような戦い方

今回は彼に勝つ自信があった
でも、また彼に敗れてしまった

彼は言った
『戦いは力だけじゃない』
その通りだった

僕は彼に騙された
最後の最後まで

まだまだ、修行が足りないようだ
そんな嘘まで吹き飛ばせるくらい強く・・・

僕は強くなる！

S I D E O U T

S I D E 金髪幼女ことエヴァンジェリン

今日はジジーに呼ばれ意味のない集会に行かされた

今日は春から麻帆良付けになる予定の魔法関係者の紹介だと
まったく、そんなものいちいち紹介しなくてもいいではないか

そして、来たのはリン・イースト

ナギの初めての従者にして、大戦を戦い抜いた平凡の魔法使い

しかし、奴は年老いても居なく未だ若い

あんな奴がナギの従者だったのだろうか？

それにしても、奴の気配から少し魔を感じるぞ・・・

ククク・・・こいつはなかなか面白い

「どうしたのですかマスター？」

こいつは茶々丸だ

私の従者の一人でガイノイド

「なんでもない・・・茶々丸あやつの戦闘とっておけ」

「はい」

奴の戦いは魔法使いとは思えないものだった

常識はずれの戦法、まるで正義ではない
どちらかと言うと悪の方だ

しかし、あれに引つかかるタカミチもタカミチだろう

奴の勝利はまるで紛い物

すべてが嘘ででっ上げられ最後に相手を追い詰めて
負けを宣言させたところではらし、敗北感を増す

面白い・・・面白いぞリン・イースト！

SIDE OUT

僕の生活が始まった

と、言っても今は春休み中だ

だから、このアパートに住んでいる人たちに挨拶を済まそうと思いました！

では、レッツゴー！

ぴーんぽーん！

「少し待て」

「はい」

そしてドアを開けて見えたのは gangslogラサン教師ガンドルフィー二さんです！

「こんにちわ。昨日も会いましたね。昨日からこのアパートに住むことになりました鈴です」
と、言って手を差し伸べる

「ああ、私のほうこそよろしくたのむよ。最近人手が足りなくてね。忙しいんだ」
と、少しそこで話をしていると

「先生何してたんですか？僕が来る前」

「ああ、ちよつと銃の手入れをね」

「へえ、銃ですか！僕も銃使っんですよ？」
ちよつと、話をあわせてみよう

「何を使っんだい？」

やっぱし、自分の好きなものには食いつく人だった

「少し改造したデザートイーグルを一丁護身用に」

「へえ、どういった改造を？」

「まあ、弾速が通常の3、4倍で。魔力が込められる弾を使用しますね」

「弾速が3、4倍ってどんな改造したんだい？」

「いやあ、なんか友達に貸したらそうだったんですよ」
アルの奴何したんだろう？

「そ、その友達はすごいね・・・」
と、言ってるなんか気まずくなったのでさよならをした

たしか、あるって重力魔法主体だよな・・・
銃で何したんだろ・・・いつか聞いてみよ

お次は
瀬流彦先生へごー！

「こんにちわー」

「いらっしやい、リン君」

「いやあ、瀬流彦先生はイケメンですね」

「な、なにをいきなり言ってるんだい？」

「いやあ、なんでこんなに優しくイケメンな瀬流彦先生がなんで彼女一人が出来ないかと思ってですね・・・ま、まさかあつちのけが！」

「いやいや、何を言ってるんだい？」

「では、おいとまします！」

「ええ！」

はい、瀬流彦先生とはばいばいです！

そして、最後に明石教授のご自宅です

「こんにちはわー」

「やあ、よく来たね」

出てきたのは少し痩せていた男だった

「来ちゃいました。お仕事大変そうですね？」
「気を使うのは当然！とここに来る前に『外人が日本に行くときに必須！』で読んだよ！」

「あはは？そうかな？」

笑ってごまかそうとする教授

その笑い顔はとても柔らかく優しそうだった

「はい、顔色が悪いですよ？」

「そう……だよね。はあ、娘にも心配されてね……」

「娘さんいるんですか？」
初耳です！

「ああ、いるよ？会ってみるかい？裕奈も喜ぶだろう」

「じゃ、お邪魔します！」

明石教授の自宅内

「お父さんその人誰？」
と、登場したのが明石裕奈、教授の娘さんだ

「ん？この人は……」
そこで戸惑ってしまう

そう、僕の位置は微妙だ

見た目高校生で『同僚』と言うわけにはいかないのだ

「この人は？」

もう一度問いただしてくる少女

「この人は……お隣さんみたいなものかな？」

「お隣さん？」

「そうだよ？今日からこの上の部屋に住むんだ。あずま りんって名前だよ」

「あずま りん？じゃあ、お兄ちゃんだね！」

その発想はどこから持ってきた！？

「え？」

教授のほうを見ると

「お願い」と言うような目をしてくる

「そうそう、お兄ちゃんですよー」

「わーい！」

そう言って喜ぶ裕奈はとても無垢な瞳をしていた

その後、裕奈と遊ばせてもらった
いつもは友達と遊んでいるようで、父親とはあまり遊ばないようだ
そのせいか、肩車などが好評だった
子供は高いところが好きなようです
そういえば、テオも好きだったな

「ぜんそくぜんしーん！」
掛け声をかけながら指差す方向へ僕は進んでいく

あつと言つ間に昼をすぎ夕暮れが見え始める

「ああ、楽しかったー」
そう言つて今も肩に乗っている裕奈が頭に寄りかかってくる

「それはよかったよ。僕も久々に羽を伸ばせたよ」
実際にそうだ

テオは今はそれなりに仕事もある
僕も護衛の仕事が増える
こうやってのびのびできる時間は貴重なのだ

「そお？えへへー、お兄ちゃんが嬉しいなら裕奈もつと嬉しい」
そう言つて、自分の喜びを分かち合ってくれる
この子はとても優しい

「じゃ、家に帰ろつか？お父さんがきつと夕飯作ってくれてるよ？」
そう言っつて、裕奈を家に届けた

しかし、明石教授と一緒に食べようと誘ってきて
それを断る理由も無いので一緒に食べる事にした

食べ終わり「では、お暇します」と家を出ようとする
足に何かが引っ付いてくる…………裕奈である

「帰っちゃうの？」

え……………なんかすごいまだいてよ的なノリなんだけど……………

そして、教授のほうに目を向けると

「お願い」と言っつような目をまたしている……………

「じゃあ、今日は泊まっつていこうかな？」

「ああ、そうするといい。まだ部屋も片付いていないだろう」

「わーい！じゃあ、お兄ちゃん裕奈と一緒に寝よ？」

「え・・・・・・・・」

「そうするといいよ。それなら早くお風呂に入ってください」
「って、何勝手に話を進めてるんですか！」

「はい」

そう言っただけの奥のほうに進んでしまった裕奈

「あの・・・・・・・・明石さん？」

「ああ、鈴くんも自分の家でシャワーを浴びてきてくれ」
え、ちよつと話が進みすぎです

「分かりました、すぐ戻ってきますね」
あの目で見られたら断れない

そういつて、急いで自分の部屋に戻りシャワーをささつと浴び
ジャージに着替え再び明石家にもどる

「早かったね。寝る場所は、あっちの部屋だから。」
そう言っただけの奥のほうを指差す

「あ、はい」

「すまないね……まさか裕奈があんなに懷いてしまつとは思つてなかつたんだ」

ちよつと教授それ言うのおそいです
もつと最初に言いましょう

「きつと、裕奈はもうちよつと掛かるからー」

部屋には敷布団が敷かれていた（一枚）

僕はその上であぐらを書き、ボーっつとしていると

「お兄ちゃんおまたせー」

裕奈が部屋に入ってきてドアを閉めた

そして、僕の足の上に載り頭を擦りつけてくる
連想させるは猫である

優しく髪を撫でてあげる

そんなのどかな時間がつつき

裕奈はいつか眠りに落ちてしまった

その裕奈を横に倒し寝かせる

そして、自分も横になる

これからの生活を考える

これからは、きっとこんなんびりした生活ができるんだろう
そんな考えをしていると自然に頭がぼんやりしていき
いつの間にか・・・・・・・・眠りに落ちていた

第11話―それぞれの思想、そして始動―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第12話―平和な日々が壊れる余興―

（前書き）

いやー、なんか書き出したら止まらなかったww

ああ、エッセイあるのに……4000字のエッセイがあるのに――！！！！

作者の悲鳴は無視な方向で

第12話―平和な日々が壊れる余興―

春休みも過ぎ僕は高校へ通い始めた
そこでは、目立たないように過ごした
なぜかって？だって、外見があまり変わらないことでつつこまれた
くないだろう

僕ののんびりした日々は続いていた
ある一時を境にまた僕は戦いへと一歩一歩塚近づいたのであった

第12話―平和な日々が壊れる余興―

高校は男子校である
別に、共学でもよかったのだが、男子校のほうが多かったのだった
ちにした

この学校は麻帆良に珍しく……
荒れていた

教室は使われず

授業に出るものは小数

というより3割くらい

のこり7割はサボリ

いや、もともと学校に来ているかどうかすら怪しい

そんなとこの制服を着ている僕は……

やっぱし、それでも目立たないくらい平凡だった

「ふああ……」

外を眺めながらあくびをする

今日の天気は快晴、雲ひとつない

季節は春、とてもどこかでゆったりとした時間がながれる

「東、ここの答えは分かるか？」

今は数学の授業中

出席者数28人4人中

「その答えは……」

適当に答えておく

授業とはつまらないものだ

教師の質問に答えるだけ

しかし、なぜ出席しているのだろうか？

僕はここにいない奴等と同じにはなりなかった
たぶん、それが答えだろう

別に彼等の生き方は否定しない

不良のなにがだめなのか？

人の生き方にけちはつけるものじゃない

また外を眺め、空に浮かぶ一つの雲を発見する

今日も一日が終わる帰り道の途中だった

P i r i r i

P i r i r i

携帯に連絡が入った

ちなみに携帯は2つもっている

一つが仕事用

もう一つは私生活用

と、いつでもこっちには滅多に掛かってこない

今回も仕事用である

「また、仕事か？」

そういつて、電話に出ると

「りん君？」

相手は明石教授であつた

「なんですか？なにか仕事ですか？」

「いや……………あの、なんていうか言いにくいんだが……………」

「はい」

「裕奈の迎えに行つてくれないだろうか？今日はどうしても外せない用事が出来てしまったんだ」

「はい？」

きつと素つ頓狂な声だつただろう
それくらい予想外な内容であつた
仕事用の携帯だったので

「・・・・・・・・」

「あの、明石教授・・・・・・・・一ついいでしょうか？」

「ああ」

「これ、仕事用の電話ですよ？」

「ああ、すまない・・・・・・・・君しかないんだ」

「まあ、分かりました。でも、次からはもう一個の携帯にかけてくださいね、後で教えますから」

「ああ、助かるよ」

そういつて、裕奈がいるであろう小学校に向かう

小学校

そこは、小さな子供が学ぶために行く場所である
裕奈は現在4年生だ

その門はいつも自分がみているものよりも幾分か小さく
なんだかおもちゃでも見ているような気分になってくる

僕は小学校というものに行っていない
魔法学校とは小も中もないのである

門を抜けるとそこには校庭が広がっている
高校とそこまで変わらないであろう広さである
それだけ、子供とは活発なのだろう

その隅のほうにある木のところに裕奈はいた
しかし、様子が少し変だ
ずっと上を見上げている

彼女の視線を追うとそこには一つの体操着袋が2つの枝の間に引っ
かかっていた

裕奈はそれをずっと見ていた
なぜなら、その持ち主は裕奈本人であるからだ

僕は今いる場所から小走りをはじめ
木の1mくらい前で跳ぶ

いつもは肉体強化を切っているからだに少し魔力を通わせる

そうするといとも簡単に枝まで届く

見事に袋を取った僕は
それを裕奈に差し出す
彼女の瞳をしっかりと見ながら
すこし赤くなっている

「はい」

「あ、ありがとお兄ちゃん！」
そう言って抱きついてくる

「どうして、あんなところに？」
疑問に思っていたことを聞いてみる

「あのね……ひろし君とまさ君とひで君が裕奈のって投げまわすの」
ま、まさか！これはいじめなのでは！

「でねー、いつもは返してくれるんだけど……きょうは枝に引っかかったの」

「で、3人は？」

「棒をとつてくるって言つて学校に……あつ、戻ってきた」
ふむふむ、

これはあれだな！
気になる子にちょっとかい出したくなる症候群だな

「あかいしー棒もって……ってその人誰？つてもう袋とれてるし
！？」

一人の子が棒を持ってきて僕に気付いたようだ

「このひと、裕奈のお兄ちゃんだよー」

「こんにちわ」
優しくあいさつしました

「え……でも、あかいしには兄妹いないんじゃない？」

「きんじょのお兄ちゃんだよー」
近所ですね。上の階だから

まあ、その後も少し注意しその場を裕奈を連れて去る
そのときに一人がこつちを始終睨んでいたことは気にしない

「ねー、お父さんは？」

「今日はお仕事が入ったから迎えに来れなかったんだ。だから僕が来る事になった」

「そっかー」

そう言つて、前を歩く裕奈はくるりと回転する

その後普通に帰宅し、明石教授が帰ってくるまで裕奈と遊んであげた
そんなのんびりした日々が続いた

4年間くらい続いた

その間に裕奈はすくすく育ち今は中学2年生

僕は4年間で2才としをとり大学1年生だと、言ってもずっと学校で勉強しているわけではない

一応これでも、仕事がある魔法使いとしてのだが

それで、最近は半年くらい席を空けていたそれで、大丈夫なのか？

愚問である、僕は魔法使いであり、就職とは無縁な感じなのである

そして、ようやくまた麻帆良の地を踏んだ半年間ここにいなかったただでこの風景は変わるものである
学生の要求によって店はバンバン変わっていくし流行というものはすぐ去っていくものも多い

そんな麻帆良をあるき結構時間が経ったところ僕は女子中等部エリアに着いた

別に、そういう趣味の持ち主ではないただ、ここに学園長室があるからわざわざここまで来るわけである
いまだに謎だ………

「はあ………」
ため息をつき

来ているパーカーの帽子をふかく被る
あまり、この現場は見られたくない
ここは女子校エリアであって男子がくる所ではないからだ

すこし、歩いていくと麻帆良女子中学校に着く
ここに・・・・・・・・ここに学園長室があるのだ・・・・・・・・
もう、やめてほしい
ここに来るまでも視線が痛かったのに・・・・・・・・
そんな事を思い忌々しげに校舎を睨んでいると

「お兄ちゃん？」
近くに声が聞こえた

「ん？」
そっちの方向をみるといたのは裕奈であつた
中学2年生とは思えない体の持ち主である

「やつぱし、お兄ちゃん！帰ってきてたの？と、いうかなんでここに？ま、まさか！？」
色々一気に言ってくるのが裕奈である

「いやいや、別に僕は学園長室に行かないといけないんだ。そして、今日帰ってきたばかりだからね」

「そっかそっかー。それにしても何で学園長が？お兄ちゃんそんな人だったっけ？」

「さあ？僕も呼ばれたただだからさ。分かんない」

「なあ？その人誰なん？」

会話に入ってきたのは青髪の少女

「ああ、この人はお父さんの家の近所の東鈴って言う人で。私のお兄ちゃんだよ」

いや、まちがっているだろ

お兄ちゃんだよって何だよ！

「へ、へえ。こ、こんにちわ」

そう言っぺこりのお辞儀をしてくる

「こんにちわ。東鈴です」

「あ、はい。う、うちは和泉亜子です」

「私の友達だよー！」

「そうかそうか。裕奈の友達か。いやー、裕奈がいつもお世話になってます」

「いやいや！いきなりそれ！別に私そこまでお世話になってないよ！」

「はっはーそうか。それは悪かったな。いやー、前はあんなにべったりだったのにな」
これぞ、過去を掘り返すアタック！

「昔のことはいいでしょ！もう！亜子行こー！」

「え！わ、わかった」
そう言って去って行ってしまふ二人

「じゃあなー、裕奈ー！また週末にでも会おうなー！」
裕奈の背中に向けて言い急いで学園長室に向かう

学園長室

そこは、少しほかの部屋とは空気が違った

「で、学園長？なんの用でしょうか？」

今対面しているのはk麻帆良の学園長
通称ぬらりひょんである

「うむ、仕事ご苦労だった」

「いや、それだけじゃないでしょ？まあ、ありがとうございます」

「察しがよくて助かるわい。そうなんじゃよ、来月、ナギの息子の
ネギが麻帆良に修行に来るんじゃない」

「へえー、ネギ君がかー………楽しみだなー」

ネギと会っていない期間は大体5年くらいになる
ときどきネカネと手紙などをしているが基本的に会わない

「じゃろ？それでじゃ、お主にはネギ君の護衛を頼みたいんじゃない」

「え？僕これでも大学生なんですけど？」
見た目は高校生でも大学生ですよ？

「うむ、ネギ君も教職なのでな、ネギ君が学校外にいるときだけ頼む」

ネギが教師・・・だと！

まあ、予想はしていたけど

「まあ、それぐらいならオーケーです」

「ナギさんの約束もありますし。別に一日中でもいいですよ？どうせ単位とかもらえるんだし（学園長に）」

「いや、半年も空けていたんじゃない。少しいつもの生活に戻ったほうがいいじゃろ」

「お心遣いありがとうございます。では、これで帰りますね」

「うむ、では、なにかあったら連絡するんでな」

「はい」

そう言つて、僕は学園長室を出る

この1ヶ月後来る

見習い魔法使いによつて僕の日常が破壊されることを知らずに
その迫り来る音にさえ気付かず、生活するのであった

一ヵ月後――――

第12話―平和な日々が壊れる余興―

（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

やっぱり小学生書くの大変！

第13話―少年現る、それはラッキースケベの塊―（前書き）

題名と内容は一致しませんwwなぜなら、ラッキースケベの瞬間を止めるからですww最近は一話一話が短くなってきました

第13話―少年現る、それはラッキースケベの塊―

今日はネギ君が来る日である

彼に会う事は楽しみだった

5年前のあの事件から彼には会っていない

彼の成長を見てみたい

どこまで、ナギさんに近づいたのか

自分で実感したいのだ

第13話―少年現る、それはラッキースケベの塊―

僕は学園長に自らネギ君の迎えに立候補した
それは、きっと日本に慣れていないであろうから
知っている僕が適役だと思ったから

そうして、僕は中学エリアの駅で待つのであった
そして、これに乗り遅れば遅刻する最終電車が駅に着いた

そこからのすごい人数の生徒達が暴徒のように走り始める
その中一人小柄な赤い髪の少年がいるのが分かる

「ネギ君！こっち、こっちー！」
彼に気付いてもらうために大きく手を振る

「あーリンさん！」
予想道理気付いてくれた彼は賢いのだろう

「やあ、元気だった？まだ、日本に慣れないんだろう。」

「はい、こんなに人が集まっているのを見たのは初めてです！」

「まあ、麻帆良は学園都市だからなー」

それから、ネギ君と走って学園長室まで行くつもりだったんだが・
・
・

ネギ君……
肉体強化は切ろうね！

もう、ものすごいスピードで先のほうに行っちゃったよ！！！！

ああ、もう！

そして、やっと追いついたと思ったら

ネギ君は神楽坂明日奈となにやらケンカをしている

「はっ、はっ！」

くしゃみをしようとするネギ君

「ま、まずいつ！」

魔力の暴走

それは、ネギ君の用に小さいながら巨大な魔力を持っているものに
良く起こる現象だ

気が緩んだりいきなりの衝撃のときに魔力が溢れてしまうのだ

ネギ君の場合くしゃみが魔力の暴走のトリガーである

急いで自分の足に魔力をある程度集め

人ごみの中を縫うように走る

最後に直線になったところで魔力を爆発させる

ネギ君の口を手で抑え神楽坂から離れさせる

「ん~~~~」

手の中でもがいてるネギを放す

「いやあ、危なかったなネギ君。ちゃんと魔力を切つとくといいいよ？（ボソツ）」

「あ、はい！ありがとうございます」

そういつて、自分の周りの障壁と身体強化を解いてくれる

「あ、あんた誰よ！」

自分の思い通りに行かなかった事に不満を憶えたのか僕にやつあたりしてくる神楽坂明日奈

昔、はあんなにおとなしかったのに………ちょっと複雑な気分だ

「ちょっと聞いているの！？あんた男でしょ！なんで、ここにいますよ！」

まあ、普通の反応はそれだよな

「いや、いいんだよ、アスナ君！」

校舎の上のほうからタカミチ少年が答えてくれた

「よ！タカミチ！」

「あんたも知り合い！？」

そんなにびっくりする事なのだろうか？

「じゃ、ネギ君僕はここまでだから、後はタカミチにでも世話になってくれ。まあ、何かあったら連絡はこれに」

と、言って一枚のカードを渡す

念話カードだ

「ありがとうございます」

素直にお礼をしてくれるところはとてもいい少年であった

「そんじゃ、タカミチもまたなー！」

そう言っ僕はそこから颯爽と逃げるのであった

駅での事

「久しいな、リン・イースト」
エヴァが現れた

「え？誰？僕にはサボリ吸血鬼の知り合いなんていません」

「ふん、あつちには人形^{ドール}を置いてある」

「だからって、ネギ君の最初の授業くらい出てあげなよ。後、こつちでは東鈴だ」

「ふん！あんな餓鬼興味ない」わけないよな」・・・・・・・・」

台詞の途中で割り込む

「ナギさんの息子・・・・・・・・となれば、お前の呪いを解くことだ
って可能のはずだ」

「ふん！そんなこと分かっている！」

「じゃ、お前は彼の敵になるのか？彼の血を求めて」

「自分のためならなんでもする！それが私だ！」

彼女は僕たちには想像もできない生き方をしてきたのだろう
600年間生きる吸血鬼

その昔は魔女狩りで火炙りにされたという噂も聞いた

「それなら、僕は僕の生き方をする」

僕が昔から決めた僕の行き方

ホームに電車が到着する

「それはなんだ？」

電車のドアが開く

「護ってみせる」

そう言って僕は自分の大学エリアに向かう電車に乗り込んだ

一日が終わり自分の部屋で僕は考えにふけていた

自分は『護る』と言ってしまった

元々僕はナギさんに『頼む』と頼まれたのだ

なら、それに全力を入れるべきではないのだろうか

僕は弱い

そんな僕がなぜナギさんをあそこまで護れたのか

それは、きつとずっと傍に居たかったからだろう

ナギさんなら僕が近くにいないとも大丈夫だっただろう

でも、ネギ君は違う

まだ数えて10歳という年齢で信念もすぐに変わってしまうだろう
誰が、彼をどんな方法で利用するかわからない

なら、彼の近くに居るべきではないだろうか？

彼が自分で自分に降りかかる火の粉が払えるようになるまで
僕が変わりに護ってあげよう

なら、善は急げ

僕は電話を取った

「もしもし、鈴です」

電話の相手は学園長だ

『なんじゃね？』

「えーと、ネギ君のことなんですけど」

『うむ』

「できるだけ、彼の近くに居たいのです」

『しかし、君には学業が』

「そんな事よりネギ君のほうに僕には大切なんです。これは、強制されたことではありません。僕の意志です」

『うゝむ』

「身勝手なのは承知の上です。でも、お願いします」

『分かった。では、鈴君には校務員として、ここで働いてもらおうかの』

「あ、ありがとうございます」

『うむ、しかしちゃんと働いてもらうぞ?』

「はい!」

そして、電話を切る

明日からまた新しい生活が始まる
大学？いや、僕魔法使いだし、大丈夫だよ

そして、次の日はすぐやってきた

第13話―少年現る、それはラッキースケベの塊―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第14話―正体をばらす時って大事だよな?―(前書き)

またしても、タイトルと内容は一致しません。いや、ちょっと関係するくらいです。エッセイがー!と言うのは無視して読んでください。

第14話―正体をばらす時って大事だよな?―

ネギが麻帆良に来て数週間が経った

その間に起きた事はたくさんあったが、僕はそれに介入することはない

なぜなら、それはネギ君に危害を加えることでない限り僕はなにもしない

そう決めたからである

たとえば、一般人に魔法がばれようと

僕は彼になにかすることはできないのだ

というより彼には僕がああ校舎で働いていることすら言っていない

第14話―正体をばらす時って大事だよな?―

今日は快晴、学生達も外で遊びたくなる天候だ
仮にも彼女等はいま中学生

体力が有り余っている時期である

そんな彼女等が昼休みに外で遊ばないはずないじゃないか？

しかし、なぜこんな問題になっている？

「僕のクラスをいじめるのは誰ですか！？」

ネギ君が怒っても別に怖くないですよ？

「い、いじめはよくないことですよ！僕担任だし怒りますよ！」
だから、怒っても怖くないって
逆に彼女等にはいいえさである

今、僕の前で問題になっているのは
中学生と高校生のケンカ……

なんで、ここに高校生がいるのかと疑問を抱く前に……

「大人気ないだろう……」

仮にも年上なのだ

こんなたかが遊ぶ場所で争うなんて

最近の高校生はなっていないな……

「ま、タカミチ少年にでも言っておくか」

そうして、携帯でタカミチ少年に現状を知らせると
すぐ来た

通り過ぎざまに「ありがとう」と言いながら
肩を持つ

「ああ、がんばれよ」

その後のことは知らん

そして、僕は自分の仕事『清掃・設備』に戻るのであった

屋上を清掃していたところ

昼見た高校生達が屋上に来た

だから、ここは中学だろーが

何しているんだこの高校生どもは

「お前等、ここで何をしているんだ？ここは中学だぞ？高校生の
前等が来るところじゃない」
交渉を持ちかけてみた

「は？あなたには、関係ないでしょう？どこへでも行って掃除でもなんでもしなさい！」
が、断られたようだ

「ま、どうなっても知らないけど（ボソッ）」
そうして、僕は屋上の掃除を続けるのであった

その後、ネギ君のクラスが屋上にレクリエーションでやってきたようだ

どうやら、もう一度ケンカを始めたようだ
こいつらは暇なのだろうか？
はあ、またタカミチ少年に電話するか？

と考えたが

「まっ、ここはネギ君の解決策を見てみるか」
そう言っつて、その後も見守るのであった

そんな彼女等はどうかやらスポーツ対決で決めることにしたようだ

しかし、数人が参加せず横で見ているだけだ
僕もその数人のいるほうに行く

「鈴？なぜお前がここにいる？」

エヴァが初めに気づいてくれました

今の俺の服装は校務員の制服に帽子を深く被っている
気付かれない自信があったのだが

「あれ？わかる？」

「お前の魔力の質と量は憶えた。そして、お前どうした？学園長に
でも利用されたか？」

まあ、高位の魔法使いになれば魔力だけで人を判別できるだろうな

「いや、僕は自分でやっている。ネギ君が心配でね」

「ほー、過保護だな？」

「いや、だってね。彼は大切な親友の息子だし。権力争いにも巻き
込まれる可能性もある。そんなときにもない。そんなんじゃ寂し
いだろう」

「ふん。まあ、せいぜい頑張るんだな」
そう、言つてそっぽを向いてしまう

これは彼女なりの警告だったのだろう
『関わったら敵になるだろう』と

「鈴さん？なにをしている？」
次に気付いたのは龍宮真名だ

「ん？真名か……………」

「どうしたんだ？」

「お前つて……中学生だったの「死にたいのか？」
……………」

彼女とは時々敬語の仕事で援護をしてもらう

彼女の腕は確かだ、もう凄い

歩く自然災害と呼べるくらいの弾丸が飛び交う

「なんで、ここにいるんだい？」

「しごとー」

やる気のない答えを返す

「明石嬢目当てじゃないのか？」

「は？なんで？」

「いや、かわいい妹見に来たのかと
いや、妹って違うだろ」

「裕奈かー」

そして、試合を見ていると色々と反則である

ボールを蹴ったり

ボールを紐でとったり

「いやいや、あれはないだろ」

「まあ、これが麻帆良クオリティーなのだろう」
分かってるじゃないか龍宮さん

そして、試合は終わった

しかし、ネギ君のクラスが全員油断していたところで高校生がボールを投げた

それは、不意打ちと言うもので、卑怯とされるが
僕は別に否定はしない

しかし、それは戦闘においてなわけで
こんな子供のケンカでするようなものじゃない

それに狙われたのは神楽坂明日奈
きっと、リーダー格だからだろう
それとも、ネギ君と仲がいいからか？

しかし、そのボールは彼女に届くことはなかった
なぜなら、僕が止めたからだ

いや、殴って弾いたと言う方がいいだろう
そして、殴り飛ばされたボールは壁に当たり戻ってくる

「はあ、仮にも年上なのだろう？見苦しいよ？」
ボールをキャッチして彼女に手渡す

「じゃ、ネギ君。がんばってねー」
そう言って僕はその場を去ろうとする

「こ………の！」
彼女にボールを返したのが悪かったのだろう
次は僕を標的に投げてくる
しかも、頭を狙ってきた

「うを！」
それを頭を急速に動かし避ける
そして、頭より後ろでボールをキャッチする
しかし、その反動で帽子がずれる
つばで、見えていなかった顔が見えるようになってしまっ

「……え………」
まわりが沈黙する
それはそうだろう

神楽坂明日奈にしたら、昨日の朝邪魔された人物だろう

明石裕奈にしたら、自分の兄のような人物だろう

それ以外にとつても、僕はどうみても高校生にしか見えないはずである

汗がだらだら流れるのが分かる
ああ・・・・・・・・やっちゃった・・・・・・・・

「じゃ、ネギ。またな！」

そう言つて急いで帽子を直し

次はちゃんとネギ君にボールを渡す

「え！なんで、りんさんが？」

次は走つてその場を去る

SIDE 明石裕奈

私には兄（つぽい人）がいる
実際の兄ではなく、昔から良く遊んでくれた近所のお兄さんだ
名前は東鈴

鈴という名前はどこか女っぽい
そして、性格もどこか女っぽい

彼は優しい

昔から私の世話をしてくれた

お父さんがいないときは私の傍にいてくれたし
私の迎えにだって良く来てくれた

本当に兄ができたような気がした

でも、私は中学に上がりお兄ちゃんと会うことも少なくなった

時々お父さんの家に行くとき
それと、休みの時には会える

しかし、お兄ちゃんはどういうことなのか半年間くらい姿を消した
大学にもいないと言っていた

お父さんに聞いてもなにも答えてくれない

そんな彼と会ったのは少し前の事だった
しかも、ありえない場所で

彼は女子校エリア、しかも私のいる中学の前にいた

久しぶりに会ったお兄ちゃんはずっと変わらず元気だった

私を少しからかって、私が恥ずかしくなり別れた

これからは、きっと家にいてくれるだろうと思い
心が躍った、またお兄ちゃんと遊べる、笑える

この感情は何だろう？

そんな彼と会ったのはまたありえない場所であつた
私の通う中学の屋上だ、しかもお兄ちゃんは校務員の格好をしていた
少ししか、見えなかったが私が見間違うはずがない

そんなお兄ちゃんは走って去っていつてしまった

そんな彼を追いかける私がいた

「お兄ちゃん！」

「え？お兄ちゃん？」

みんなが疑問に思っているところだがそんなの気にしない
なんで、ここにいいのか問い正さないといけない

SIDE OUT

ああ、危なかった……
そう思っていたのは束の間

「お兄ちゃん！」

「っ！」

裕奈が追ってきている！？
なぜだ！気付かれた！

やばいやばい……
ここで、働いてるとか知られたら……
知られたら？あれ？別にいいんじゃない？

いや……でも恥ずかしい！！！！

まあ、余裕で撒きましたわww

僕がただの女子中学生に負ける分けないでしょう

一日が終わり

家に帰る

そして、ドアの前に誰かがいる

ピンポンを押してこない

なんで？そして誰？

僕エヴァみたいに気配で人は判断できないよ？

ドアまで行ってドアを空ける

「え？」

「裕奈？」

そこにいたのは明石裕奈であつた……

あ、あゝ、めんどくさいことになりそーだー

第14話―正体をばらす時って大事だよな?―(後書き)

感想、指摘、誤字、脱字!なんでも受け付けます!

知り合いに作品を読ませたらすごい直された・・・
直さないけどww

第15話―気付かれたらしゃーない、兄?として?―(前書き)

いやあ、ちょっとエッセイと宿泊学習で忙しく一週間も更新できませんでした。これから普通に更新していきたいと思います。

第15話―気付かれたらしゃーない、兄？として？―

人生って避けられないイベントってあるよな？

受験とか、誕生日とか、成人とかさ……

そして僕今まさに回避不能なイベントっていうものに遭遇したらしい
まさかねー……………

裕奈が来るなんてな……………

第15話―気付かれたらしゃーない、兄？として？―

「ゆ、裕奈？」

僕の前には昔と変わらず元気で外を遊びまわっていた裕奈が座っている

やばいつて……………
どうしょ……………

当然、裕奈は今ハッピーでなくその全く逆のアンハッピーな状態である

「ああ、そういえば裕奈バスケ部やってるだつて？いいな、僕スポーツはいいと思うよ」

がんばって話しさらそうとします
でも、それません……………これって運命？

「最近、お父さんどう？ってそこまで会ってないのか？」
それでも、頑張ります
僕運命に抗ってみます

「それがさー、この前友達がさ「お兄ちゃん」それがバカでさー」
お兄ちゃん！」はい……………」
もう、無理なようだ……………」

「言いたいこと分かってるよね？」

はい、分かってます……………

痛いほど分かってます……………でも、聞かないで！

「い、いやあ……………分からないなあ」

目が泳いでいる……………自分でも分かる

「本当に分からない？」

一層声を強める裕奈

「……………」
「お兄ちゃん？」
はい、分かってます……………
女性って怒ると怖いよね……………

「なんで？『男子大学生』のお兄ちゃんが私の中学の屋上でしかも、
校務員の格好でいたのかな？」

いやあ、もつともです

一般人から見たらそりゃ問題だよな

まだ大学生の僕が働いてるのはおかしいだろう

「ええ……………見間違え？」

自信なさ気に言った僕は負けだろう

「私が、お兄ちゃんの顔を見間違えるわけないでしょ！」
はあ、でもそんな事自慢げに言われても……………」

「で、教えてくれる？」

「だめって言ったら？」

「泣く、そして殴る」
いや、やめてください
殴らないでください
そして、泣かれるとめんどくさいのでやめてください

「でも、聞いたって事はあれは、お兄ちゃんだったんだね」

「……………」
やっちまった……………」

「で？」

もう、これは諦めるしかないのか……俺何か悪い事したかな？

「た、確かに、あそこにいたのは僕だが」
何か良い言い訳おりてこーい！！！！
神様お願いします！

「あ、あれだ！そう、ボランティア！」
きたー！降ってきた気がする！

「ボランティア？って、あのボランティア？」

「うん。いやあー、大学の単位の一つで社会への貢献が必要で。どうせやるんなら近くに学校があるんだし。やってみようかな？」
「思ったんだよ」

「へえ……お兄ちゃんがボランティアか……」
え？そこまで意外かな。

別に僕がボランティアしてもいいんじゃないかな？

「でも、なんで私の学校に来るなら言ってくれてもいいのに……」
「」

「どうやって、伝えろと言っのかな？番号とか知らないよ？裕奈教えてくれないから」

そうなのである

僕は出張が多いし、土日は勉強（課題やら）が多いので
基本的に家がない
勉強は図書館でやることにしている

その理由はいくらインターネットがあっても
さすがに、あそこになる本の情報量には勝らない
と、言っているほどの本が内蔵されているのだ

「え！？そうだったけ？あ……本当だ、登録されてないや」

「だろ？それで、連絡しろってほうが無茶だぞ？」

「で、でも。この前学校の前で会ったときに教えてくれても良かったじゃん」

ああ、あつたなあ、そんなこと（作者の心の声）

「あの時に学園長の許可がおりたんだ」

「そ、そっか………」
しょんぼりする裕奈

そこまで、僕に負けることが悔しいのか？
僕ってそこまでのものなの？

「ま、まあ。気にするなよ。次からなにかあつたら連絡するからさ？番号教えておくよ」

「絶対だからね？約束だよ？」

「ああ、分かってる。絶対だ、その代わり……裕奈も何かあったら連絡しろよ？僕は裕奈ならなんでも協力するよ？」

「うん。ありがと、お兄ちゃん！」

そう言って、あぐらをかいている僕の腰あたりに抱きついてくる

「おいおい……裕奈？もう子供じゃないんだから、そういう事は控えるよ？」

流石に中学2年生でそれは……いや、普通ならいいのかもしれない

しかし、お前は肉体的に発育がいいので……困る！

「いいじゃんべつにー」

ぶー、と言わんばかりに口を尖らせて言う
しかし、その後すぐに笑う

「久しぶりだなー」

未だ、抱きつきながら言う

「んー？何が？」

もう、僕は気にしない……………
気にしない！

「こつやってさ……………お兄ちゃんと2人で過ごすの……………」
「……………」

少し寂しそうに顔を下に向ける

「ごめんな？僕も色々あるからさ？」
そう言って頭を撫でてあげる
そうすると、裕奈が顔を上げ

「うん、それは分かってるよ」

「でも、今からは僕も暇が出来るからさ。連絡くれれば遊べるよ」

「ほんとーじゃ、今からあそぼー！」

いや、それって連絡してくない？

「わかった、わかった。で、なにするんだ？」

自慢じゃないが………僕の家はなにもないぞ？

「んー、お兄ちゃんと色々話したい。ずっと話してないじゃん！」

「それだけでいいのか？ 言ってなんだが、別に買い物くらい連れて行けるぞ？」

金は、報酬とかでたくさんもらってるし

「ううん、いいの。」

そう言って、横に座りなおす

それから、裕奈と喋った
それは、もう喋った

内容は・・・・・・・・とばす！

窓の外を見るともう暗くなり始めていた
時計を見るともう夕飯時だと、気付く

「裕奈、夕飯どうするんだ？」
時計を指しながら

「ああ・・・・・・・・どうしよっか・・・・・・・・」

「食ってくか？俺今から作るけど」
ま、一人分作るのも二人分作るのも変わらない・・・・・・・・ってよ
く言うしな

「うん、食べてく。ちょっと亜子に電話するね」
そうって、一携帯を取り出し電話をし始める

夕飯を作り始める

今日の献立は、チャーハン

一人だったら確実に単品なのだが

裕奈がいることだし、スープでもつけるか

「ちよつと、おいしいかも」

それって、結構失礼なんじゃないか？

特に最後の『かも』は失礼じゃないかな？

「ま、僕も一人暮らしはじめてそれなりだからね。美味しいもの食べたいし」

「そっかー、私もこれくらい出来たらなー」

「できたら？」

「お兄ちゃんにもご馳走できたのにな」

「ははは、まあ、いつかでいいよ。それまでは、僕がご馳走するか
らさ」

そう言い返すと口を尖らせる

夕飯を食べる間も他愛もない世間話のようなことを話し食べ終わる
時計を見るともう、9時半を回っている

「裕奈、もう帰らないと。送っていくよ」
そう言っ、キーを取る

「それ、なんのキー？自転車？」
自転車なんかじゃありませんよ？

「これは、バイクの鍵」

「え？え？え？バイク？お兄ちゃん免許持ってるの？」

持っていますとも

魔法使い、頼めば何でもくれます

「ああ、持ってる、ちょっと前に取ったんだ。裕奈が最初にのるんだぜ？」

その一言に少しうれしかったのだろう

裕奈は「はやくー」と急かしてくる

そして、アパートから出てすぐのところに停めてあるバイクに跨ぐ

「裕奈、後ろ乗れ。そして、これ」

と、言ってヘルメットを渡す

「ちゃんとつけるよ？見つかったら捕まるから」

そう、魔法使いでも法律には勝てないようです

ネギ君はあきらかに労働基準法に逆らってるけど

「これ、どうやってつけるの？」

まあ、そうだよな？僕も最初知らなかったし

「はあ、ほら」

そういつて、後ろを向き裕奈のあごの下のところにある紐を締める

「こう・・・な」

前に向き直りグリップを握る

「ちゃんと掴まれよ？」

ちゃんと裕奈が腰に掴まっていることを確認する

夜の道を走る事5分くらいだった

その間、話すことはなかった

でも、裕奈はずっと強く、腰の周りに腕を回していた・・・

そして、裕奈の住む女子寮に着く

一応そこまでうるさくないバイクだが

夜に走ったからか寮生に気付かれたらしい

玄関から出てきたのは数人の女子生徒

まあ、そりゃそうか。これ女子寮だもんな

そこまで近くに行かなくてもいいだろう
少し離れた場所で止まる

「ついたぞ、裕奈」

そう言つて、裕奈を降りるように促すが一向に動く気配がない

「裕奈？」

少し頭を後ろに向けると
規則正しい寝息が聞こえる

裕奈は寝てしまったようだ

「ったく」

起こさないように裕奈の手を緩め支えながらおりる

そして、また起こさないように膝の裏と背中に腕を持っていき
持ち上げる

予想より裕奈の体重が軽かった
なんて、言ったら殴られるだろう
でも、裕奈も女性なのだと分かるくらい軽い

裕奈を女性として意識したことはない………とは言いきれな
いが

今までは兄妹感覚で接してきたし、今からもそうであると思う

そう思うと、妹の成長を知った兄のような感覚だろうか
兄離れしていく妹を持つ兄のような感覚だろうか
そんな感じがした

彼女の体は温かった

昔から彼女を触れ合っていたが
夜となり気温が下がった今彼女の体温はいつも以上に温かく、懐かしく、愛おしくすら感じれた
体温なんて、誰も変わらないだろう？と言いかもしれないが
裕奈は特別だと思う。いや、特別だ

俗に言う、お姫様抱っこをして、裕奈の知り合いであろう女子生徒たちのほうに向かう

「こんばんわー」

と、気楽に挨拶してみるが

まあ、相手は僕のこと初対面なわけで

「こ、こんばんわ」

僕を裕奈の彼氏とでも思っているのだろうか？

「あ、和泉さん。やほー」
知り合いがいてよかった

「あ、こ、こんばんわ」

前と同じようにお辞儀をしてくれる
なんて、偉い子なんだ

「裕奈、頼める？」

「あ、はい」

そう言って、和泉さんに頼んで裕奈をおぶってもらう

この間も裕奈は相当ぐっすり寝ているのか
起きずに移動させられていたのであった

「あ、あのー？　一ついいですか？」

背の高いポニーテールの女子生徒が聞いてくる

「んー？　いいけど？」

「あなたは、何者ですか？」

「んああ？　僕？　僕は東鈴って言うんだけど。まあ、裕奈の兄？　みた
いな者」

「兄？ですか。」

「はい。兄？です」

そんな事を言っていたときだった

「ん〜…………お兄ちゃん……………」
裕奈が僕を呼んだ

「どうした？」

裕奈に近づき聞いてみる

「ちゃんと……………連絡してね？」

眠そうな声で言っていたから僕と和泉さん以外には聞こえていなかっただろう

「ああ、分かった。別にそっちからでもいいから」

「うん」

そう言って、裕奈から一步下がり

「じゃ、僕帰るよ。お休み裕奈」

「お休み〜お兄ちゃん」

そう言ってすぐ帰るのであった

え？周りにいた生徒？

早く帰って寝たいんだ気にしない

そして、来た道を帰り

帰宅し僕は早々と寝るのであった

その夜・
・
・
・
・
・
僕は夢を見た・
・
・
・
・
・

第15話―気付かれたらしゃーない、兄？として？―（後書き）

作者は別に大学生じゃありません。まだ高校生ですから大学の単位なんて知りませんが、僕の高校ではこういう単位インターがあるので書いてみました。バイクとか詳しくないんで運転の描写はなしでした。すみません。

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第16話 The Sign of Indignation I (前書き)

大変投稿が遅れてしまいすいませんでした。別に、これは作者の都合とはじやなく、ただ単に創作意欲がなかったからです。まあ、そんな感じでボチボチ書いていこうと思います。まあ、学校も大変なんですけどね。

第16話 | The Sign of Indignation |

夢を見た

闇を感じた

寒い空間の中僕は彷徨った

なにか温かいものを探し求めた

人の温もりを手探りで探した

冷たい空間が果てしなく続き

僕は果てしない時間歩き

果てしない距離を進み

.....目が覚めた

それでも終わらない旅路

第16話 | The Sign of Indignation |

最近じゃ、桜も咲いて

『いやあ、春だなー』と思ってしまっ季節になっちゃったが

突然だが、僕は寝坊した

春眠曉を覚えず とも言っわけだし

え？寝てていいのかって

別に僕朝の授業は元々ないわけだし

最近は学校の校務員なんてやってるから大学には行っないわけで

話によるとネギ君は無事

先生として正式に雇用されたようだ
めでたしめでたし

そんな今日この頃

ある 噂 が流れていた

満月の夜、桜通りに現れる

吸血鬼が

まあ、そんな事よりも気をつけないといけないことがある

廊下の曲がり角では……人に当たらないように気をつけよう
これが巷に聞く『廊下の角で美少女とぶつかった』みたいなイベン
トなのか

しかし、これは受け止めればもっと好感度があがるのでは？

まあ、僕が寝坊してボランティア（と言うことにした）に遅れるところだったから少し走っていたのも理由なんだが

だから、心の中で次に美少女にぶつかったらちゃんと受け止めてあげようと密かに誓った瞬間であった

そんなことを言うのは僕がたったいまそんな状況に陥っているからである

下に見えるのは青い髪

背の小さい青い髪の知り合い〃和泉さんである

「キャッ」

僕にぶつかり和泉さんが転ぶ

「だ、大丈夫ですか？」

そう言うて即座に反応するのは男の性だろう

「は、はい。大丈夫ですって？鈴さん？なんでここにいるん？」

まあ、そりゃびつくりするよなー

友達の兄？な人が女子校にいたら

「んー？説明めんどくさいんで省きます」

「ええ！？それじゃ、何もわからないやん！」
ま、そこは気にするな少女よ

「あ、その紙、今日の身体測定のだろ？運ぶの手伝うよ？」

「え？でもー」「ぶつかつたお詫び」　じゃあ、お願いするわ
そう言つて、紙を持ち彼女の速度にあわせて歩く事に
でも、なにか忘れてないか？

「ね、和泉さん？なんで走つてたの？」

「え………そうやった！ネギ先生！まき絵がー！」
そう言つて、走っていつてしまう

「やれやれ」
めんどくさいが、紙を持っている以上ついていくしかないようだ

そう言って走って追い、並ぶ
そして、教室に着くや否や、嫌な予感が！

「「「「何！まき絵がどうしたの！？」「」「」
一斉に扉と窓が開いた！

しかし、僕はすかさず首を扉と窓とは反対の方向に曲げる
それはもう尋常でないスピードで

「見てません」
そう、僕は主張した

これが、僕の平和な朝の一描写でした

そして今は夜
桜通りの吸血鬼と言うのは
まあ、十中八九エヴァだろう
というか、エヴァ以外だったら怖い

「と、まあ。なんでネギ君はこんなにあからさまに飛ぶのかな？」

って、言ってもこの時代『UFO』ってごまかせると思っけどね

そして、飛んでいるネギ君に少しついて行くこと数分
どうやら屋根に落ちたようだ（エヴァが）

そして、エヴァの従者である茶々丸がネギ君の詠唱の邪魔をしている
そして、ネギ君の血を吸おうとしたその瞬間
まるで、正義のヒーローのように神楽坂明日菜がエヴァの顔面にと
び蹴りをお見舞いした

流石にあれは痛いだろうと吹き出すところだった

「くっ！なんだこれは！か、神楽坂明日菜！」
やっぱり、痛かったらしいエヴァが自分の頬をさすりながら睨む

「え！？エヴァンジェリンさんと茶々丸さん！あんたらが、今回の
犯人だって言うの！」

明日菜としてはものすごい意外であつたのだろう
クラスで目立たないエヴァンジェリン（キヤラ的に）と、茶々丸が
今回の犯人だったのだと言うことが
それ以前に明日菜はネギ君以外の魔法使いをあまり知らないのだ

「ぐつ、一人くらい増えただけで私が引き下がると思っなよ」

それでも、引き下がる気配がないエヴァ

しかし、ここで騒がれると困る

なにが困るかって？

屋根の下の寮の人達が困ると思うんだよね？

僕間違ってないはずだ

その思いを心に

僕はエヴァの目の前に瞬動で移動した

瞬動術も最近は使い慣れてきた

瞬動に使う魔力は

移動開始時（一歩目）とブレーキのときだけだ

そして、今回は屋根の上

非常に狭い床の上に見事ブレーキをかける事に成功した

まあ、普通は出来るんだけどね

「エヴァ、今日は引いてくれないか？」

「鈴……なぜだ？お前までなぜ私の邪魔をする？」

エヴァとしては気に食わないのだろう

自分の呪いは本当はもう解けているはずなのだ

でも、とくことも叶わずに今までずっと待ってきたのだ

「こんにちわ東鈴さん」

茶々丸はちゃんと挨拶をする良い子です

「え？あんたこの前学校にいた……」

と、神楽坂明日菜は自分の記憶を掘り起こしているようだ（そんな前じゃないけど）

「騒ぎすぎだ。もしかしたら一般人に見られるかもしれないだろう？」

「ふん！そんなもの関係ない！私の呪いを解くのだ！」
まあ、そりゃ15年間待たされてるもんな

「ええ、じゃ、明日からエヴァは『下着で外を歩く幼女』みたいな風と呼ばれるかもなー？今のまんまじゃ」
そう、エヴァは今媒体であったマントをネギ君により吹き飛ばされ下着姿なのだ

「いいのかなあ？」

笑いながら言ってみる

「う……………」

相当嫌らしい

渋々だが引いてくれるようだ

「ありがとう、エヴァ」

そう言って手を振って見送る

始終ネギ君は放心状態だったけど

「じゃ、僕も帰るから。ネギ君のことよろしくね神楽坂さん」
そう言って僕は再び瞬動術で夜の闇に消えるのであった

数日経ったある日

僕は休日と言うことで買い物に出ていた

買うものと言うと、服、食品など日常生活用の物なのだが
なにせ休日、しかも学園都市麻帆良学園だ
人が多い

「はあ、憂鬱だ」

そう、僕は人ごみが嫌いだ
色々トラウマもある
例えばこの呪いとか
人ごみ………

服を買いに行き着きの洋服店に向かう
その途中であつた

この時代にすごい珍しいものを見た

そう、ナンパである

それなんかおもしろいほどの決まり文句の

「よお、ネエちゃん達なかなかかわいいじゃねえの」

「どー？俺等と一緒に楽しい事しようぜ？」

などである

「はあ」

深く溜め息をする

まあ、どうせこの世の中こんなものに引っかかる人はいない

しかし、その相手を見たとき

僕はさらに溜め息をすることになった

そこにいたのは、少し前ぶつかった和泉亜子、長身でポニーテールの女性

そして、僕の妹のような者、明石裕奈であった

渋々、しょうがなく！

僕はナンパをしている人の後ろに行き肩を叩き

「あのー、迷惑だと思っんですけど？やめてもらっていいでしょうか？」

と、下手に出てみたのだが

まあ、それはいつも通りと言うか

「はあ？お前何？お前もこの子達狙ってたわけ？で、ごめんねー！俺達先だからー！」

ナンパAと名づけよう

「つか、餓鬼がいきがってんじゃねーよ！」

ナンパBと名づけよう

「たしかにー！ぎゃははー！」

なんか、すごいうざいなー……………

「はあ、折角人が下手に物を頼んでるって言うのに……」

「は？何言ってるんですかー？餓鬼は帰って寝てろ！」

そう言つて、強引に押し退けようとするがその瞬間僕が一步下が
りナンパAの体制が前に崩れる

そこにすかさず腹を殴る

これ、常識！

「うぐ……」

ナンパAが倒れる

「は、はっちゃん！お前！よくも！お前等！やっちなえ！」

そう言つて人ごみの中から数人のナンバーズが出てくる

「……おらー」

3人が同時に殴りこんでくるがしゃがみ込むだけで自滅していった

そしてまた数人を足に引つ掛け転ばせたり

壁にぶつかけたりで倒していき

最初にいたナンパBが残る

「ぐう」

少し腰を落とし臨戦態勢らしい

「らあ！」

そうして突進しながら拳を出してくる

それを軽々と左手で弾き

「まずさ、餓鬼、餓鬼とか言ってるけどさ！」

僕19歳なんだよね！」

がら空きの顎を下から
アッパーをかました

たぶん、最後のは痛かったと思う

「大丈夫か裕奈？」

「ありだとーお兄ちゃん！」

まあ、裕奈だから助けたんだけどねー
他の人だったら見て見ぬ振りだ

「まあ、かわいい妹のためだと思えば安いよ」

そう言つて、撫でてやる

「ちよつとやめてよ！みんないるのに！」

そこは普通『子供じゃないんだから！』とかじゃないのか？

「裕奈……その言い方だと、『みんながいなければ良い』
と言っている様なものだぞ？」

指摘してあげよう

さあ！恥ずかしがれ裕奈よ！

「べ、別にお兄ちゃんなら……いいよ？」

そんな顔を赤らめながら上目遣いで見ないでくれ

「あのな、裕奈」

そう言つて裕奈の両肩を両手握る

「今のは冗談だ。真面目に答えなくてよかったぞ」

と、いうか聞いた僕が恥ずかしくなってるんだが

「い、今は冗談に決まってるでしょ！もう、お兄ちゃんったら！」
少しご機嫌斜めにしながら僕に背を向け

「みんな行こ！」

他の女子生徒を連れて離れていく

なんだか、裕奈との別れかたはいつもこんな感じだ
次からはもっと別の別れかたを試してみよう

そして、その事を心に誓おうとして空を見上げたときだった
青い空を横切る一つの影を見かけたのは

その影は長い棒に乗り
まるで、魔法使いのように空を横切っていた

（ああ・・・・・・・・またネギ君か・・・・・・・・）

次は何をやったのだろうと
若干ヤレヤレ気分の後を追うのであった

そこは、森の中

麻帆良から程遠い山の中

熊やら才力ミやらが生息すると言われている森なのだが
ネギ君はその森に迷い込んだらしい

らしいというと

途中まで僕も追えたのだが

途中森に入るところで木に思いっきり当たってしまい

自分の魔力探索に頼るしかなかったのだ

別に僕的能力が低かったのではなく

空中に漂っている魔力（杖が飛んでいるときに出している）を追う
のは大変なのだ

濃度がまず、薄いそしてすぐに風邪でとばされてしまう

だから、「らしい」

「ああ、どこに行つたのかなあ」

そうして、探す事30分

お、いたいた

と、ネギ君を見つけたと思ったら

なんか、忍者といるんだけど

どうしよう、あれってあきらかに隠そうとしてるけど隠し切れてないよな

どこぞの忍んでない忍びなのか

ああ、つつこみたい！でも、つつこめない！この気持ちは何だろう！

「どうしたでござるか？」

へ？

少女の声がする

でも、あの忍んでない忍びはあっちにいたわけ
と、隣を見てみると

「をああ！」

その忍んでない忍びが隣に立っていた

「どうしたでござるか？」

いやいや、普通驚くだろう？な？

「いやあ、流石は忍者って感じだね」

「……………拙者は忍者ではないでござる」

「え？」

嘘だろ！

「拙者は忍者ではないでござる」

「そ、そうだったのか。悪かった」

なんか凄い威圧感と言うものを感じました

「分かればいいでござる。それで、お主はここで何をしているのでござるか？ネギ坊主を追ってきたのでござるっ？」

「いやあ、もういいや。ネギ君も良い生徒に恵まれてるみたいだし。」
「
そう言って、忍者を見る

「いやあ、それは照れるでござるな」

「ま、そういうことです。では、僕は退散します。ネギ君の事はよろしく願いますね」

「うむ、頼まれたでござる」
「
そう言って立ち去ろうとするが

「お主、名はなんでござるか？」

「僕の名前は東鈴。よくではないけど、女っばいって言われてる
そう、この名前、一般的に女の子の名前であるが
まあ、学園長がなんの意図でつけたのかは知らないけど
時々、女っばい名前だって言われる
そしてそれが理由でなにかあるかと言うと………ない！

「確かに、鈴とは女子の名前のほうが多いでござるな。だが、そんな事はどうでもいいのでござるよ。」

「そう言って、もらえると嬉しいよ。じゃ、今回こそ退散する」

「うむ、いつか手合わせ願う
それはごめんだ！

「ま、考えておくよ」

心の中では違うと言っているても表では、ちよつといいキャラを作る僕は偉いと思う

そして、忍者である彼女以外誰にも見られていないだろうと確信したので

瞬動で帰っていった

ネギ君もいい生徒を持った

ま、少し見た目とかが怪しいが

きつと、僕なしでも立派な魔法使いになってくれるだろう
これで、一安心

そして、次の日がやってきた

『これより、学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください』

そんな、放送が流され僕たち魔法使いは前から伝えられていた位置につく

そう、今日は停電の日

停電と言う事は学園結界も効力が弱まってしまふのだ

そうになると、いつもより大人数、というより、人員全員で警備をしなければいけない

僕は、一人である

なぜだろうね？僕弱いのに

ま、僕は一番敵がこなさそうなエリアを選んだんだが
本当に予想が当たったらしく誰も来ない

そんな感じで、ホケーっとしながら空を眺めていると

なにか点が見えた

その点は徐々に大きくなり

そして、僕の顔の寸前まで来たところ、僕もようやく気付きとっさに後ずさる

それは、人間だった

それも、良く知る人間だった

そこにいたのは、メイド姿で、犬齒をこちらにちらつかせる
旧世界で、最愛の妹

裕奈が立っていた……………

第16話 The Sign of Indignation! (後書き)

感想、指摘、誤字、脱字!なんでも受け付けます!

第17話―譲れないモノ―

（前書き）

最近気になったんですけど。ネギって飛び級して10歳で卒業したんですよね？なら普通は何歳くらいで卒業するんでしょうか？明日歯を抜くからその間全身麻酔で眠る間に考えてみよう。

第17話―譲れないモノ―

チクタクチクタク

頭の中に鳴り響く

カチコチカチコチ

着々と進んでいく時間

しかし、僕はその時間の中一人だけ取り残されていた。
分からなかった。信じたくなかった。認めたくなかった。

なぜ、裕奈がここにいる！？

第17話―譲れないモノ―

夜道で会う裕奈は二回目だ。

一度目は送ってやった。

そして、二度目は今。

目の前に半吸血鬼かした裕奈が立っている。

「ゆ、裕奈？こんな時間に何してるのかな？」

認めない……………

「流石に、この時間だと明石教授にちゃんと報告するよ？」
信じられない……………

「ま、まあ、今からすぐ帰るって言うのなら「マスターが呼んでい
る」許すけど。」

ますたー？ヨンデイル？

知りたくもない。分かりたくもない。

でも、分かっちゃいませう。これはエヴァの犯行だ。

実のところ、僕は裕奈には一生魔法なんて言葉聞かせたくなかった。まず、一に危険、二に危険、三に危険だからだ。既に長寿となつて20年余り生きてきて分かった。こんな世界生きていて良いことなんてない。それなら断然普通に生きてもらったほうが幸せだし。きっと、明石教授もそう思っているだろう。

そんな、心配を壊してくれたのは、他でもないネギ君だった。もう、彼が来たときから僕には変えられない、巨大な力で定まった事だとわかった。

裕奈に魔法はばれるだろう。それも、時間の問題だ　と。明石教授が何も言っていないあたり、彼はこれを了承したと見る。でも、それでも、僕は反対だった。誰にも言わなかったが、心のそこでは裕奈にはこんな世界見せたくなかったし、僕のことをずっと普通の兄としてみていてほしかった。

そして、今現実として目の前にあるのは、『ばれる』なんてものよりひどい。

巻き込まれている。裕奈がエヴァの駒として動かされている。裕奈のことだ、ネギ君が頑張っていると知ったら自分も助けようと考えるだろう。

きっと、彼女は自分から魔法に進んでいくだろう。それでも、許せなかった。彼女を巻き込むというのが、僕には許せなかった。

怒りがふつつと湧いてきた。心のそこからいやな感情乱れてくる。

それでも、それを抑えた。

握りこぶしからは血が流れ、唇の皮は破けた。

何時かの事を思い出す。村が焼かれたあの日。僕が守れなかった人々。自分の家族。

僕は小さく唱えた

「大気よ水よ白霧となれ、彼の者に一時の安息を 眠りの霧・

・・・」

目の前に白い霧が雲散した。

裕奈はそこで小さく寝起きを立て眠りについていた。

そんな裕奈を見て僕は安堵した。

ほとんどの可能性、彼女はこのことを覚えていないだろう。

エヴァも一流の魔法使いだ、記憶が戻るなんてミスはしないだろう。そして、眠ったということでの確立はほぼ100%だ。

裕奈を抱き上げ走り出す。

目的は元凶 エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとネギ・スプリングフィールド

おおよその場所は最初から分かっていた。

元々、警備の配置で橋だけが除外されている時点で、数名は察していたようだ。橋で戦闘が行われている。しかも、それは学園結界が機能していない夜。と言う事は、エヴァの力はおそらく幾分か戻っている。学園長が仕組んだとか、そんなことどうでもいい。僕はナギさんとの約束でネギ君の世話を頼まれている身だ。乱入しても大丈夫だし、きっとエヴァも乱入させる気だ。でなきゃ、裕奈を送ってくる意味がない。そして、僕がこれを快く思わないことも分かっているはず。

何時になく速度が速かった。何時になく力が溢れた。

自分が許せなかった。また　守れなかった。エヴァでもない、ネギ君でもない。
自分が許せなかった。

「おおおおおおお！！」

幾度となくあの日が頭の中で再生される。

燃え盛る大地。崩れていく人々。切り刻まれる悪魔。

僕はその中、死なせてしまった。大事な人々を。

一気に魔力を解放し、天高く跳ぶ。

橋の上で戦闘が行われているのはわかる。

そうとなれば、そこに行きたいという願望が強くなった。

虚空瞬動で橋の手前まで飛ぶ。そこにそっと裕奈を置いていく。

彼女の寝顔を見たのは久しぶりだったが昔と変わらずそれは幼さがまだ残るものだった。

彼女の寝顔に微笑み、そして反転して橋の上を目指す。
自分でも分かる、心がじわじわと侵食されている。僕は今怒りを感じていた。

ネギ君の決闘？知った事が。

学園長の計画？どうでもいい。

僕は僕の大切なものを傷つけたものを絶対に許さない。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェル！！！」

その名前を叫んだ。自分の大切なものを傷つけた者を。

「リンさん！？」

「誰！？」

ネギ君とその従者の神楽坂だろう。

「くっくく。やっと来たか東鈴。いや、リン・イースト。」

「やはり、お前が仕組んだんだな。裕奈を使って……………」
怒りが自分の中で増幅される。

「なんでだ・・・なんで、巻き込んだ!？」

「なぜ?そんなことを聞くのか?いや、まず巻き込まれないはずがないだろう?このぼーやのクラスにいる時点で巻き込まれるのは確定だ。」

そんなこと分かってる。自分でもそう思っていた。

「それでも!なぜ、行き成り巻き込むんだ!別に巻き込まなくてもいいだろ!別に、裕奈を使わなくてもいいだろ!」

「なら、他のやつ等は使っていないと?お前は自分の大切なものが安全なら他はどうでもいいのか?」

その質問は僕に問うていた。『立派な魔法使い』なのかどうか。

他者を大切にするのなら『立派な魔法使い』。

利己的なものは『悪』に近い。そう、思われるだろう。

でも、僕は間髪要れずに答えた。

「ああ、どうなってもいい。僕は、僕が守ると決めたものしか護らないんだ。」

僕の存在意義。護る。それは、僕がそう誓ったものにしか適応されない。

「ほう？立派な魔法使いの見本が聞いて呆れる。」

「こっちからも質問だエヴァンジェリン。なぜ裕奈を巻き込んだ？」

直感で分かっていた。彼女の理由。そして、戦闘の開始。

「決まっているだろう？そっちのほうがおもしろいからだ。」

戦闘の合図の用にその言葉が終わった瞬間僕は動いていた。原動力は怒り。振るうものは力。目的はなかった。

瞬動からの気で強化した拳を叩き込むも、エヴァに通用する事もなく受け止められる。

一体、どこからそんな力が出ているのかは自分の中では七不思議に入る。

「ふん、これが英雄の力か？身の程を

彼女が拳を作り力を溜める

知れ！！」

それを殴らなかつたほうで受け止めたと思ったが、威力を殺しきれず体が吹き飛ぶ。

吹き飛ばされながらも体制を整え吹っ飛んだ方向の木の幹に着地（？）する。

「なかなかの身のこなしじゃないか？しかし、英雄には程遠いぞ！それを追ってきたエヴァが突き一つで気を一刀両断する。」

「つく」

そして、間一髪で木の幹から離脱した僕は地面に転がりながら唱える。

「我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！」
すべての動きがスローに成っていく。

エヴァの行動が見える。視える！

「ふっ！」

一気に瞬動で彼女の懐に入る。

ブレーキを一気につけ、慣性の法則でたまった力を拳で彼女の横腹に当てる。

彼女も僕をふっ飛ばしたように吹っ飛ぶ。

その隙にアーティファクトを出す。

「アデアット。我薙ぎ払う、我の敵全てを」

今回作るのは、刀ではない。

もっと攻撃的なモノ。

作るモノは最凶の姿。

作るものは狂った斧。それは、柄がないものだった。全てが無粋な鉄で作られた斧。

「ふん、その武器はなんだ？『護り人』が使う武器ではないな？」
まるで、何事も起こらなかったように悠々と立っていた。

「護るの本質は壊すこと。壊す事なくして護れるものはない！」
そう、言っ斧を担ぎ移動する。

この夜はあの夜にどことなく似ていた。
敵との対峙。護る決意。自分の中の怒り。
あの夜に戻ったような感覚。自分の何が変わったか分からない。
いや、きっと何も変わっていない。だから、自分に怒りを感じている。

「あゝ ああああ！！！」
一気に振り下ろすと、下にあったコンクリはやすやすと壊れる。
そんなものをまるで木の棒でも振られたかのように避けていくエヴァ。
ア。

「おお、怖い怖い。」
冗談を言うほど余裕があるらしい。

しかし、「冗談を言っている間も彼女の攻撃は止まらなかった。
僕の足首を掴み、一気に上空に投げられた。行き成りの事で体制を立て直す事もできない。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！氷の精霊25頭集い来り
で敵を切り裂け！魔法の射手・連弾氷の25矢！」
飛来してくる、一本一本に致死の威力がこもった氷矢。
それをすべて斧でガードするも、すでに限界だと訴えてくるひびが
走る。

それでも、彼女の詠唱は止まらない

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷精大気に満ちよ！
白夜の国の凍土と氷河を！こおる大地！！」

まるで、本当に大気が凍ったかのように思わせる温度。

僕は覚悟を決め呪文を唱える。

「私の盾、我を害するものすべてを弾く！」
僕の周りに結界が張られる。

「そんなものお！！」

二つの呪文が重なったとき火花が散った。

削れる氷河、響く轟音。しかし、その進行を止めることはできなかった。

僕の盾はこんなに脆かったのだろうか？

なぜ、僕は守れないのだろうか？護れたのだろうか？

僕の力は僕の心。

僕の心が弱かったのだろうか……

だから、僕は負けるのだろうか……

迫る死の予感の中僕は考えていた。

天才になんて言えいいのか？ナギさんになんて誤ろう。詠春にだ
って会いたい。

今なら、あのアルだって恋しく感じる。

僕の中で一つの気持ちが浮かんだ。

死にたくない！

チクタクチ・・クタ・・・ク

時間が遅くなる

目の前の光景が薄れていく

カチ・・・コチ・・・カ・・チコ・・・チ

ああ、僕は死ぬのだろうか？

死にたくない。死にたくない。

まだ、やる事はたくさんある。

神じゃなくていい。悪魔だっていい。何だっていい。

僕を生きさせてくれ。死なせないでくれ。やり残したことをやらせてくれ！

カチン・・・・・・・・

そして、死の恐怖が僕を飲む前に。
時間が、世界が、僕が、彼女が、

すべてが止まった。

第17話―譲れないモノ―

（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

なんだか前回の投稿から時間がたってしまいました。やっぱり、学校忙しいですwwエッセイとかレポートとか。休み前になると課題とか色々固まるから無理くさいわww

第18話―静かな場所―（前書き）

いやあ、なんか歯を抜いた後、思った以上につらかったです、初日は隣の家のベル、呼び鈴がずっと鳴っていたので寝れなかったし（夜中中）。その後も、口の中縫ってたせいで食べにくい、喋るににくい。あ、そうだ！全身麻酔！眠ってるって感じじゃありませんね！気絶って感じでした。

第18話―静かな場所―

死んだ……

分かる。血の気が引いていく感覚、全身が冷たくなる。意識が朦朧となる。記憶が流れ出す。

小さいときの事。

よくみんなと違って虐められたっけな

ナギさんとの事

僕の唯一の友達だった

旅のこと

みんなで騒いだ事

テオの事

まだ言いたい事はたくさんあるのに

裕奈の事

護ってあげなきゃ

自分の事

あいつの事

誰の事？

思考が止まる。

意識が鮮明になってくる。

そして、やがて・・・・・・・・

目を覚ます

第18話―静かな場所―

「ああ、僕死んだのか・・・」

目を覚ました時に最初にはいた台詞はなんと典型的なものだったん

だろうか。

いや、目を覚ましたという表現は望ましくもないかもしれない。自分が本当は死んで死後の世界に向かっている途中のはずだから。

しかし、予想に反して体は動いた、すんなりと。

「死んだ……のか？」

目を開け、自分の手を見る、そして足を見る。
足が……ある！死んでない！

そんな感じで喜んでいると、今時分がどんな状況にあるのかが不安になってきた。覚えていた範囲だと、エヴァと戦って、魔法が当た……った？

そう、その後何かがあった。自分の現在の状態を考える事に必死だったのか、今自分が居る場所を確認する事を忘れていた。

自分の居る場所を確認するために立ち上がる。

素足の裏に感じるのは砂。耳に届く穏やかな音は波。

そこは、砂浜だった。

上にはちゃんと空があり。今さっきまでと同じように暗い空、星が輝いていた。

その空間は静かだった。

その空間に佇む一人の影。

自分の物ではない。いや、自分に影がない。

「やっと……来てくれたか。待ちわびたよ」

その影から声が発せられたのか、それとも直接頭に話しかけてきているのか。

その声は、あまりにも穏やかで人間の物とは思えなかった。そして、反響した。

「待っていた？僕を？ここで？」

自分の疑問をそのまま影に投げつける。

「ああ、待っていたよ。ここで、お前を。もうどれくらい経つか分からないよ。でも、お前は来てくれるって信じてた。」

穏やかな声。まるで、母親、父親、祖母、祖父の優しい声のようなものに聞こえた。

「そうか……それは、よかったよ。で、質問いいかな？」

「ああ、いいとも」

「ここはどこだ？」

そう、ここがどこなのか未だに分らないはまだ。

「ここは……オレの世界と言っべきかな。」

「キミの世界？それはまたスケールがでかいな。」

世界を語るのは、ナギさんと神様だけだと思っていたが、ここにも大物がいたようだ。

「でも、ここは小さい世界だ。オレはここから出られない。お前の協力がないとな。」

僕の協力？なにをすれば？それより、僕がこの世界に大きな影響を与える？自分はそんな大物ではないはずだ。

「僕の協力が……良いよ、協力しよう。何をすればいい？」

「そんな、簡単に引き受けて良いのか？どこかも分からない誰かも分からない相手だぞ？」

「ま、外の世界じゃ僕は『立派な魔法使い』なんて呼ばれてるけど。僕お人よしだからさ。」

頭をかきながら、悪い癖だよ　と付け足す。

そして、影に近づいていく。一歩一歩。

そして、もう一歩で触れるであろう時に影が動いた。

いや、影だけじゃない。世界そのものが動いた　と言っべきか。
一瞬で影は僕から離れていた。

「触んじゃねえ！うつるだろ！！」

うつる？感染みたいな感じか？

「うつるって何がさ？僕別段健康だよ。」

健康管理には自信がある。早寝遅起き！

「ああ？うつるんだよ、人間がだよ！」

そう言って、僕に今さっきまで穏やかだった波たちが襲い掛かってくる。

「うわっ！つぷは」

一気に流され、砂浜に仰向けに倒れる結果をつむ事になった。しかし、それでも影とはそこまで離れていない。

「まあいい……ここで一つ、オレからも質問だ」
意外なことに影も僕に質問があるようだ。

「お前は、なぜここに来たでしょうか？」
僕がなぜ此处に着たか？なんで……知らないわ。

「知らない、分からない」
そう、理由なんて自分には分からない。

「キミは知ってるのか？」
逆に聞き返してみる。

「知ってるとも、オレ此処は俺の世界だぜ？教えてあげようか？」
あ？あ？とケンカでも売ってかのような仕草はうざかったが教えてもらう事にした。

「まあ、要するにだ！お前は、自分が弱いと思ってる。正解？」

「まあ、強いとは思ってないな……まあ、弱いって思ってるよ」

「お前は、此処に前強敵と戦っていた。正解？」

「ああ、吸血鬼の真祖と戦ってた。」

「で、お前は勝てない、負ける、死ぬ、死にたくない、などの感情を抱いた。正解？」

「なんで、お前がそんなこと知ってる？まあ、正解だ。正直死ぬかと思ったよ。」

いや、僕がまず生きているのか？それすら危ういんじゃないか？

「まあ、答えはこれだ。『お前はそこに自分の限界を感じた。だから、此处に来た。いや、来なきゃならなかった』」

「なんだそれ？限界？来なきゃならなかった？なにそれ、予測されていた？」

意味が分からない。何を言ってる？僕が此处に来る事は決定された事項。そして、僕が限界を感じるのも決定事項。

「まあ、落ち着けよ。お前は、結果を出す前に『諦めた』」
諦め……………

「そして、オレが現れた。」

そこで、説明が終わった。

いや！何も分かってないからな！

「それで？それからどうなったんだよ？なんで此处に来た？」

少しの沈黙の後、影は答えてくれた。

「なあ、真理って何だ？正解って？当たりって？」

行き成り、哲学的なことを聞いてきた影に何の意図があったのかは僕には計り知れない。

「そんなの．．．．．知らない．．．あえて、言うなら。『誰も知らない』」

自分の考えを述べた。それは、まるで、小学校の国語の時間で答えるかのような細切れの答えだった。

「そう！誰も知らないんだ！なら、なんでお前は諦めた？なぜ、自分が負けと思った？」

「それは．．．．．」

それは　自分の限界が見えたから．．．．．
この影の言っている事は合っていた。

僕は自分の限界を定めてしまった。だから、諦めることができた。

「限界、だろ？」

「ああ」

影にはすべてがお見通しのようなのだ。

「まあ、ここで問題だ。」

問題？質問ではなく問題。それは解くものだろう。

「オレとお前との距離はどのくらいだ？」

は？そんなの少し見て、憶測すれば分かる事だ。

「まあ、せいぜい6、7メートルつてところだろ」

そう、普通に答えると影はにやりと笑った。

「はたして、本当にそうかな？」

「何を言ってる？明らかに、それくらいだろ？」

「くつくつく。言っただろう。『此処はオレの世界だ』と。お前が
感じている距離が本物だとなぜ分かる？」

「なっ！」

確かに、此処は影の世界。自分の感覚を頼りにするのは言われてみれば分かる事。

「もしかしたら、オレとお前との距離はあの星とあの星くらいある
かもしれないし、もしかしたらすぐ隣にいるのかもな？」

天に手をかざし横に平行移動させて二つの星を指した。

きつと、実際の距離は本当に遠いだろう。いや、それもまた僕の感覚。

「でもな？真理とか正解とか当たりてモノは蓋を開けてみればわかる。」

蓋を空ける？

「そう、理科の実験みたいにな。ある事象が本当だと言うことを実験によって証明する。蓋を開けるとその事象は真実だった。」

「じゃあ、この場合は……」
頭によぎった言葉は『うつるだろ！』
そう、影はオレに近寄りたがらない。

「誕生日プレゼント同じだよ。」
一歩影に近づく。

後5メートル

「開けるまで中が何か分からない。」
もう一歩。

後4メートル

「もしかした、欲しいものかもしれない、でも、もしかしたら知らないものかもしれない。」

もう一步。

後3メートル

「プレゼントの入った箱の蓋を開けるまでは何も分からない。
真実とは何か。」

後2メートル

「つまり、可能性は無限だな。そして
後1メートルのところでまた世界が動く。」

影が離れたと言う事は

「お前も真実を分かったわけだ。」

僕と影の距離は自分で感じていた距離と同じ。

蓋を開けるまで分からない。
それは、可能性を信じる事。

「でもな、リン」

初めて名前で呼ばれた。

「真実って言うのは、知らないほうがいいものもある。」
それは、分かるような。

「今までの行いは正義だったのか？それとも偽善だったのか？」

「今までお前等がやってきた事は、本当に正しかったか？」
まるで、説教をされているようだった。

「ああ、僕はそう思う。」

「まあ、そうだろうな……でもな、オレはそう思わないとしたら？それはどうやって証明する。」

「なっ……そんなものの証明できない！」

「そっだよな？なら、それが真実だと誰がわかる？本当に人は助かったのか？」

「助かった！この目で僕は見てきた！感謝する人たちを！」
行き成り熱くなってきた。僕の何が分かる！お前に！

「お前はその手は幾つもの命を殺してきた。それらはどうなる？感謝するのか？ばかばかしい！お前は恨まれているんだ！感謝される以上に！」

「ぐ………」

それは、覚悟していた事だった。で、いざ言われると痛い……

そして、最後の発言が来た。

377

「本当に ナギ・スプリングフィールド をお前は護ったのか？」

それを最後に世界が消えた。
影も消えた。すべてがくろに染まった。
でも、意識がはつきりしていた。

最後の質問のせいで。

僕は、本当にナギさんを護っていたのか・・・
護っていた、ナギさんがそう言ってくれた。でも、そう『言ってくれた』。

それが真実かどうかなんて分からない。意味が分からなくなってくる。

自分の存在意義が一気に崩れる音がした。

本当は、護ってなんか居なかったのかもしれない。

本当は、護ってほしくもなかったのかもしれない。

本当は、護ってもらって居たのかもしれない。

精神が段々悪い方向に流れていく。

分からない、分からない、分かんない。

真実、正解、答え、正義？

すべてが、分からなくなる。

自分が一体なんだったのか・・・
忘れてしまいそうだよ・・・ナギさん

そうして、やっと意識が落ちていった。

3人称SIDE

リンがあの世界に行っていたのは、現実で言う数秒の出来事であった。
今、リンはエヴァの魔法によって落ちている最中である。
本来ならもっと深手を負っているはずではあったが。

「リンさん！」

リンを心配するネギ。

「だから誰なのよ！」

未だに状況について来れない神楽坂。

しかし、エヴァは満足していなかった。
あの威力からして体の損傷が少なく見えたからだ。

ようやく、リンの体は地に落ちた。

リンにとっては数十分ぶりかもしれない。

誰もが、予想していなかった。まさか、彼がまた立ち上がることを。

そう、彼は立ち上がった。

平然と、まるで何もなかったかのように、服についた埃を払っていた。

「なっ！なぜ、平然としているリン・イースト！お前は私の一撃を食らったはずだ！」

エヴァが訴えかけた疑問は普通の物だ。しかし、彼にとっては愚問だった。

「真実とはなんだ？真祖」

それは、まるで彼ではないような口調だった。

「真実？そんなもの知るか！答えろ！リン・イースト！」
更に強く言う。

「オレとお前、どっちがこの勝負勝つと思う？」
この質問は答えるまでもない、といったふうにエヴァは答えた。

このとき誰か気付いているだろうか、彼の微かな変わりに。

「はん！そんなの私に決まっているじゃないか！私は真祖の吸血鬼だぞ！」

「そうか……くつくつく。」

そう、彼は笑った。笑っていた。

「何を笑っている！お前はどんな状況か分かっているのか？！」
彼女は、戸惑っているのか、それとも怒っているのか。

いや、きっと両方だろう。当然の事だ。絶対勝利と思った場面。相手が立ち上がり、次第に笑ったらどうだろう？強く感じてしまうだろう。バカにされている気分になるだろう。

「残念だったなあ、真祖！！この勝負『蓋を開けるまでは』結果なんて分からねんだよお！！！」

まるで、狂気に犯されたかのように、彼は吠えた。

まるで、それは彼でないようにさえ感じるほどに。

第18話―静かな場所―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第19話―長い夜の終焉―（前書き）

いやあ、今長い休みに入ってるんですけど・・・暇で暇でwでも、なんだかすべてのことにやる気がなくなっていましたね。でも、なんだか最近他の二次創作の更新も遅くなっている感じがして、速く次が読みたいと思っています。もしこの作品にそう思っている方がいたのなら、すみませんでした。

第19話―長い夜の終焉―

精神が乗っ取られる。

自分の体が自分の言うことを聞かない。

まるで、意識の奥で鎖に繋がれているようだ。

身体が思い、口すら動かない。

口を開け、喉を動かす。しかし、それは音として出てこない。
暗闇の中僕はじっと待つしかなかった。

このすべてが悪い夢だと。

実は、全部嘘でした、と誰かが言ってくれるのを。

第19話―長い夜の終焉―

3人称SIDE

リンが地面を蹴りエヴァに近づいたのは一瞬の出来事だった。以前よりも、より速く、より正確になっていたその瞬動に驚きを隠せないエヴァだったが、さすがは600年生きた吸血鬼。完全な死角からの攻撃を咄嗟の判断で受け止める事に成功した。しかし、それでも勢いを殺しきれずダメージは通っていた。

「お前は何者だ！リン・イーストではないな！」

そう、今さっきまで戦っていた人物ではない。

瞬動の速さ、死角からの攻撃。どちらをとってもその人物とは似付かなかった。

「オレが誰か？それは愚かな質問だな！オレはオレだ！」
さも、当然とでも言うようにその人物は答えた。

そして、手を前に突き出した。

その動きに警戒してエヴァは構えを取る。

「我薙ぎ払う、我の敵全てを」

それは、紛れもなくリンのアーティファクトの能力であった。そして、作られるのもいつもの刀だった、しかし。ある一点においてそれは違っていた。

リンは不敵な笑みを作りそして刀の柄を握った。
その時異変が起きたのだ。その刀全体にひびが入った。
しかし、リンはそれを気にせずさらに握る力を強くしていく。
そして……最後に碎け散った。
その破片は壊れたという事実に反し、きれいだった。
光のかげら達が雪の用に散っている。
しかし、その量は小さなものであった。刀を割ったのならばもっとあるはずだ。

案の定、リンの手の中には一本の刀があった。
全てが赤く染まっている。
柄から鞘の先まで全てが赤。

「なんだ、その不気味な刀は？それに、それはリン・イーストの能力じゃない。」

「ああ？これか。まあ、あいつにこんな事できるはずねえよな。」
そして、その刀をズボンのベルトにかける。

「オレに気付かないんだからな。」
そして、刀を鞘から出す。
鋭い音が周囲に流れる。
それと同時に、ボオツつと何かが燃え上がる音がする。

紅い炎とともに寸前まで黒い髪が、金色に変色しはじめる。

そして、刀を半分抜いたとき変化が終わった。
金色の髪に金色に眼。それは、異様だった。

見ているもの全員を戸惑わせた。
なにをもってして変化が起きたのか。
見た目以外に何が変わったのか。

「これが、オレだ！」

そして、刀をすべて抜く。

また一際大きな炎が刀身から紅く燃え上がる。
やはりと言っべきか、その刀身は真っ赤だった。

そのとき、空気が変わった。

空気が揺れ、塵が待った。

圧力といっても過言ではない変化。

リン・イーストの魔力量が一気に跳ね上がったためである。

「なっ！」

これにはエヴァも驚くしかなかった。

「らぁ！」

驚いているエヴァを気にすることなくリンは切りかかる。

間一髪でエヴァはそれを横に飛び避け、滑らかな動きで受身を取る。

「ちい！」

今までのリンなら詠唱する暇があつたが、今のリンでは詠唱をする隙がない。

「その程度が真祖！」

しかし、リンの攻撃は続いた。
猛攻。

「なめるなあ！『断罪の剣』！」

その剣はこの世界でなら触れたものすべてを切る剣だ。
しかし、リンはそれを刀で易々を受け止めた。

エヴァにとっては驚愕の連続である。

人が変わっていること。

魔力の増加、断罪の剣が受け止められる。

「残念だつたなあ！オレの刀はこの世の理じゃねえんだよ！」
そしてまた切りかかる。

驚きながら後ろに飛び攻撃を避けたエヴァ。

これを可能にするのは彼女の経験の豊富さだろう。

「なんだその刀は・・・」

口から出たのは、激しい怒りではなかった。

ふつつつと自身のそこから湧いてくる静かな怒り。

「この刀か？^{ひかげ}緋陰っていうんだけどよ。こいつはな―

刀を振るうとはとても言えない雑な振り方で襲い掛かる。

血に飢えてるんだよお！」

そして、戦いはエヴァにとって防戦一方になり始めた。いくら百戦錬磨のエヴァでも、今は力が大半封印されている状態だ。それに加え、相手は攻撃し続けている。この状態で魔法を行使することはできない。

必然的に、すこしずつだがエヴァは体力を消費していくのであった。

「どうした！どうしたあ！さっきまで威勢はどこにいったんだあ！ああ！？」

容赦などない。少しずつ弱っていくのが分かっているながらも攻撃の手を緩めない。

刀を振れば木々が倒れ、地面に亀裂が走る。

エヴァがその斬撃に当たれば腕の一本や二本がすまないだろう。最悪、身体が真っ二つ。

「くっ」

すでに言い返す暇すらないエヴァ。

そして、それを少し離れたところで見ているネギたち。

「だ、誰よあれ？え、エヴァちゃんって強い魔法使いじゃないの！？」
なんの事情も知らない、ましてや魔法に触れて間もない神楽坂だ。驚いて当たり前だろう。エヴァのことは「強い悪の魔法使い」くらいしか知らないだろう。

「あ、あれは僕の知り合いのリンさんで、魔法使いです」
自分の知っている限りの情報を与えるが、元々自分もそこまで知っているわけではないのだ。
自分の家の世話をしてくれた人。それくらいしか知らないのだった。

「で、でもエヴァちゃんを押してるって……………」
「そうなんですよ……………リンさんがあそこまで強かったなんて……………」

そう、それだけが不可解な点であったのだ。
ネギには、彼が『あの』リン・イーストだとは言っていない。

そんな疑問だらけの二人とは違い、エヴァは苦戦していた。
しかし、負けると思っていなかった、いや、そう感じていた。
長い経験の中で彼女は自分の勝敗までもが直感で分かっていた。
だからこそ、自分の感覚に頼り耐えていたのだ。

一発逆転の好機を。

そしてその時が来たのだ。

「ぐうううう！」

行き成り、リンが自分の胸を掴み苦しみ始めたのだ。刀はすでに地面に落ち、彼の膝も地面についていた。

そこにすかさず切り込むエヴァ。

断罪の剣を思いっきり上から下へ振りぬいた。

苦しみながらもリンはそれを後ろに大きく跳び回避するが、そこで身体が硬直してしまう。

SIDEリン

鎖がゆるくなっていく。

手足が動き始める。

視界もクリアになっていく。

まるで今自分がやっていることを第3者の目から見ているようだ。

自分が動いているのは分かっているのだが、まるで他人が動いているように見える。

そして、鎖が完全に解けた。その時、僕の動きが止まった。

エヴァが攻撃してくるのが分かる。

自分の視点からそう見える。戻ってきた。自分の世界に。

咄嗟のことだったが、後ろに跳ぶことで回避する。そこから横に回避しようと思いつたのだが、あることに気付いた。

自分の背後にいる存在に気付いたのだ。そう、そこにいたのは眠っている裕奈だったのだ。

ここで、もし僕が避けてしまえば、斬撃の衝撃波が裕奈を襲うだろう。だから、僕は避けるわけにはいかないのだ。

そこで気付く、武器を何も持っていないと。

さっきまで持っていた刀は地面に落ちている。

しかし、そこが謎なのであった。自分のアーティファクトで作られた装備は少しは意識していないと保たれないものだ。

しかし、地面に落ちている刀はまったく意識していない。

そこから導かれる答えは一つ。それが本物だということだ。

しかし、自分の能力に無から有を作るほどの力はないはずなのだ。

しかし、今はそんなことを考えている暇はないのだ。

今この斬撃を防がなければいけない。

「我の盾、我を害するものすべてを弾く」

次こそは、と思いつく結界を作る。

しかし、また……失敗に終わったのだ。

攻撃の途中で結界は壊れてしまい斬撃を逸らす事しかできなかった。逸れた斬撃は肩に当たり肉を裂いた。

しかし、裕奈にあたる事はなかった。

地面を抉り、方を裂き、後方の木をなぎ倒した斬撃はどこで止まった。

思っていたより肩の傷は痛むことなく、血が流れているだけの用に感じた。

しかし、自分の感覚が鈍り始めているのだと分かった。

ああ、またあの世界に戻るのか？

そう思いながら最後に言葉を紡いだ。

「ちょっと迷惑かけたみたいだなエヴァ……………ごめん」

そして僕は意識を手放し、地面に……………かつこ悪く顔から倒れたのだ。

第19話―長い夜の終焉―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第20話―優しい―（前書き）

なんというか、全然投稿していなかった。

最近、東方とかのssにはまってしまっていたらネギまのssをまた色々読んでいた。なぜかは知らないwwそれで、自分のssを読み返してみたら糞みたいに笑える文章で、最初のほうから少し修正していたら、なんか新しい話を書きたくなったのでちょっと書いてみました。

第20話―優しい―

あの夜が明けてから数日間経っている。

結局あの後、ネギ君とエヴァが戦いネギ君が勝ったらしい。

そして、僕のことだが 何も報告がない。

どうやら裏でなにか取引やらなにやらがあつたようだ。たぶんエヴァがやってくれたんだろう。

やっぱり、エヴァは優しい人、基、吸血鬼だ。

第20話―優しい―

今日はなぜか、本当になぜか…エヴァに呼び出された。

まさか、朝っぱらから仕事用の携帯に着信があつたかと思うと、そこに表示されていたのは『学園長』の名であつて、決して『エヴァンジェリン』などではない。

しかし、その主はエヴァンジェリンであり、何かかすかに学園長のうめき声などが聞こえたのは聞かなかつた事にしよう。
用件はこうだ

『今日、私の家に来い。話がある。ブチッ……』

行き成り且つ印象深く、そして相手が肯定も拒否する暇さえ与えない。

まあ、それでも彼女の元へ行くのだが。

エヴァンジェリンの家は学園の女子寮 では、なく。彼女自身のログハウスを持っている。

そこにはエヴァと絡繰茶々丸という同級生、どう見てもロボットではあるが、が住んでいる。

歩く事数十分。

未だあのエヴァとの戦闘の疲れが抜けていない身体には少し辛い距離であったかもしれない。

少しか肩を上下させながら呼び鈴を鳴らすと『明らかにロボットだろう』と思わせる耳を持った少女がドアを開けた。

「いらっしやいませ東様」

礼儀正しく、お辞儀をしてきたのでこちらも会釈してしまった。

「ようやく、来たか阿呆が」

それとは対極的に登場早々罵倒してくるエヴァだが、まあそれは彼女の持ち味なのだろう。

個性は大切にするものだ。そう思っておこう。

「やあ、エヴァ」

こちらは普通に挨拶する。

その答えが気に入らなかつたのか、フン、と踵を返して室内に戻ってしまふ。

きつと、これは『付いて来い、阿呆』みたいな感じの意味だろう。

そして付いていきリビングに着き、エヴァがソファに座つたのでその隣に座る。

「なぜ隣に座る」

疑問に思つたのだろうか。それとも、本当にいやなのだろうか？

「普通、こういうときは対面に座るだろう阿呆が」

そして、対面にある椅子を指差す。

これが格差社会か？と想像させるように、ソファのほうがすわり心地がよさそうだ。

「いや、その椅子すごい座りにくそうじゃないか？」
率直な意見を述べるとまた、フン、と鼻で笑われた。

「当然だろう？そういう風に作つたんだ」

いや、何が当然か知らないけど、なんなんだろうこの扱いは？

「座るなら僕はすわり心地のよさそうなほうがいいね」
そういつて、一層くつろぐ様に座り込む。

「それとも、エヴァ。僕が隣に座るのが嫌なのかい？」
一応聞いてみる。

「ああ、嫌だね」
即答された。間髪いれずに言われたよ。

「そ」
短く返事をする。しかし、決して動かない。
沈黙が流れる。どちらも話さない。

「って、動かんか！この阿呆が！」
しかし、エヴァが我慢の限界に達したのか怒鳴ってきた。

「いいじゃないか、別に」

「嫌だと言っただろう！」

「嫌と言われたから座ってるんだが？」
少しからかってみる事にしよう。

「じゃあ、ものすごく座ってほしい！ほら、あっちの椅子に座れ！早く！」

「なんだエヴァ。そんなに僕に隣に座ってほしかったのか。そうならそうと言えばいいのに」
そう言ってまた動かない。

「がぁぁー！！！」
そしてもう怒りの頂点に達したのか言葉すら出てこない。

そんなときに救世主^{メシア}は現れた。

「お茶を持ってきました。どうぞ」
とてつもなく礼儀正しく、ロボットだと言われないと分からないくらい人間らしい動きをする茶々丸が紅茶を持ってきてくれたのだ。

「あ、ありがとうございます絡繰さん」

「どういたしまして」
そうして、またどこか別の部屋に出て行ってしまう。

その後、エヴァにも紅茶を進め、少しティーブレイクを洒落込んだ

後に彼女は話し始めた。
どうやら座る位置は諦めてくれたようだ。
世の中諦めが大切な事もある！

「で、話というのだがな」
それと同時に一枚の写真を見せてくる。
それは数日前の戦闘のときの写真だ。きつと茶々丸さんが撮ったものだろう。

「自分で、どう思う？」
そこに写っていたのは僕。
それは紛れもなく僕。直前の僕と同じ服装。
同じ顔、同じ目の色。でも決定的に違う。
髪の色が金に燃えている。

「自分でも、分かりません」
わからない事だらけ、しかしわかる事

「でも、僕が意識を失う直前。エヴァの視点だと僕が吹っ飛んでいくときだ。そのとき、おかしいことがあった」

そこで出会った人物。名乗らなかった人物は『彼』と呼んだ。彼の世界。彼の問い。

世界の風景。そのときの感情。

「そして、意識を取り戻したときには裕奈を守って、すぐに意識を失いましたね」

神妙な顔つきで僕の話を聞くエヴァ。

その口がゆっくりと開く。

「そうか」

そして、手を顎にあて考える。

「付いて来い」

手を振り歩いていく彼女についていくとそこは地下だった。

ああ、どこにあったか？などと言いながらそこに積み重なってあった荷物をどかし始める。

そして、探し物はすぐ見つかったのか、こっちらに持ってきたのは通称『別荘』、外と中の時間を変えてしまうというすごいマジックアイテムだ。

そして強制的にその中に連れて行かれる僕。

「ほれ」

と言われて、何かをこちらに投げってくるエヴァ。

手元に綺麗な放物線を作り飛んできたのは一本の刀であった。
真っ赤な真っ赤な刀。

「ひかげ 緋陰というらしい」

「というらしい、とは？」

意味が分からない。

エヴァほどの人物なら自分の持ち物の名前以上は知っているはずだろう。

「まったく…その刀はどんな魔法で検査しようとまったく分からないのだ。緋陰という名前もお前が口にしただけだ」

僕、というのは意識を失っている間に戦っていた僕だろう。

「しかも、私ではそれを抜く事ができん。まったく、意味が分からん…ほれ、お前が抜いてみる」

刀を抜くように促してくるので、素直に刀を抜こうとする。
そしてあっさり抜けた。

鞘と同じ真っ赤な刃があらわになる。

「やはり、貴様しか抜けんようだな」

「ああ、そうみた」

台詞が途中で阻まれる。

身体の中に走る稲妻のような痛み。

身体がグラつき片膝を付いてします。

ボオッ

何かが燃える音がした。

自分お前髪が少し見える、でもいつもと違う。

その髪は 金色であった。

「ぐあ……」

痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイ!!

全身が悲鳴を上げる。

そんな時、脳裏によみがえる記憶。

焼かれた村、殺された家族、石にされた妹……

殺せ……

許すな……

ころせ…

ゆるすな…

自分に語ってくる影が見える。

でも見えない…どここの誰で、性別も年齢も分からない。
夢に取り込まれる…もうだめだ。

そう思ったとき僕を呼び戻したのは

「落ち着け、ゆつくり刀を鞘に戻せ」
落ち着いた、エヴァの声であつた。

我に返ると、痛む身体を無理に動かして刀を鞘に戻した。
鞘に完全に収まると、髪の色が次第に戻っていき、身体の痛みも引いていった。

「大丈夫だ」

そっと背中を撫でてくれるのもエヴァだ。

エヴァが優しくて、なんか涙が出てきた…

それから少し時間が経ち、本当に落ち着いたのでエヴァが話し始める。

「分かっただろうが。あれはお前だ。あの姿になる条件はおそらくその刀を抜く事だろう」

あの姿。金髪の自分。跳ね上がった魔力量。

「私の推測だが」

一度区切り僕の間を見て言う

「お前は魔族に侵されている」

その事実は、なんとなく分かっていた事であった。

人間の僕は、あるとき大きな負傷を受け、魔族の血で生きながらえた…らしい。

「いつものお前からは魔の匂いは微かにしかないが、解放時のお前は魔族のそれだ」

エヴァが言うのだからそうなのだろう。なんたって、吸血鬼の真祖

だ。

「…そうか」

「お前は別段魔を拒否している様子もない。あの、痛みは拒否反応だ。だとすると、魔がお前を拒否している」
その後、何か心当たりはないか？ と付け足した。

心当たりはある。

あの世界に赴いたとき。

『彼』は言った 『うつるだろ！』 『人間がだよ！』
これは拒否されているのだろうか？
その事をエヴァに話すと。

「その魔族、どうやら本当に人間の事を毛嫌いしている奴らしいな」
お前のせいじゃない、と慰めてくれた。

「しかし、お前がその能力が使いたいのなら、どうにかしてその魔族を取り入れなければいけない。」

「そんなこと可能なのか？」
少し考えた後エヴァは答えた。

「魔族は基本、強者の言う事は聞く。もし、もう一度『奴』の世界にいったのなら。次は、殺しあう事になるだろう。その勝者がお前の体の持ち主となる」

今度がいつかは分からない。でも、そのときまでにできることはできるだけやりたい。

「ならエヴァ」

そう言つて、エヴァに向き直る。

「俺に稽古をつけてくれ」
そして頭を下げる。

「フン、別に言われなくともつけてやる、お前の血は微妙に美味いからな」

そう言つてそっぽを向いてしまう彼女は本当に優しいと思う。

でもな、エヴァ。微妙においしいって言うのは褒め言葉なのか？

かくして、僕とエヴァの稽古が始まる事になった。

第20話―優しい―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

エヴァってこんなに優しかったっけ？

まあ、別にいいけど。

第21話ーデートじゃない！断じて違うー！（前書き）

引き続き、修学旅行前の話です！。

なにか調子にのって連続投稿してしまいました。本当になんでこんなにエヴァが優しく見えるのだろうか。

久しぶりの更新なのにたくさんお人が読んでくれて作者は幸福値上昇中。

ただいまの状況

PVアクセス200000突破

ユニーク20000突破

です

すごくないと思うけど一応。

今後もよろしく願います。

第21話ーデートじゃない！断じて違うー

あの日からまた数日経つ。

その間僕はエヴァの別荘の中でずっと鍛錬に励んでいた。

もちろん講師はエヴァだ。

エヴァの下で、魔法、体術とその他もろもろの知識や判断の仕方を学び。

エヴァや従者の茶々丸やチャチャゼロと模擬戦などをしていた。

第21話ーデートじゃない！断じて違うー

「今日もお疲れエヴァ」

別荘から出ると本当に不思議。

中で一日過ごしたのに外では一時間しか経っていない。

タカミチ少年はこれを使いすぎて老けたらしい。

「礼などいらん。それより早くチャチャゼロにくらい勝ってみろ」と、無理な注文をのたまったのだ。

チャチャゼロ。普通の小さな人形に見えて、凶悪にして凶暴。刃物を振り回し、その力は化け物じみている。

ここ数日ずっとこの調子だが、一つ気になる事がある。

「なあ、エヴァ。なんでお前は僕にここまで協力してくれるんだ？」
エヴァは吸血鬼。しかも真祖だ。
人間はあまり好きではないはずだし。ましてや、こんな弱い僕に協力するのは分らない。

「言っただろう。お前の血は微妙に美味しいのだ」
いつ聞いてもこの一点張り。

エヴァの家からの帰路、タカミチ少年に電話してみた。
もちろん生活用の携帯でだが。

「よう、タカミチ少年」

『こんにちわリンさん』
何か元氣のない返事が返ってきた。

「どうしたんですか？元氣がありませんね？」

『ちょっと…仕事が。で、どうしたんですか？』
相当大変らしい。

タカミチ少年が老けたのは別荘のせいだけではないようだ。

「ああ、最近エヴァが妙に優しいんだ。話したろ、僕の体がどう
こうの話」

一応学園長と昔の仲間であるタカミチ少年には体の話はしてある。

『ええ、それはたぶん』

それからタカミチは語った。

エヴァは人間から迫害されていたらしいと。

だから、魔族に対しては割りと優しいほうだと。

そして付け加えた。

本当に血はおいしいらしいと。

それと彼女は最近暇らしい。

最後の二つで台無しだった。

「そかそかー」

そう言って電話を切った。

その後すぐの事一通のメールがやってきた。

次の日の朝

ベンチに座りながら本を読んでいたところ。

「やつぽ」

と、和やかな挨拶をして登場したのは我が妹分の裕奈だ。

どうやらこの様子を見るとあの夜の記憶はないらしい。
安心である。

「おはよう」

本を閉じ立ち上がり、裕奈の来た方向を向く。
今日は休日、故に裕奈は私服。当然僕も私服だ。

「じゃあ、今日はよろしくね！」

「「ちら」そ」

今日の予定、それは裕奈との買い物。

来週から修学旅行らしく、そのときのための買い物らしい。

男の僕からしたらそんなこと必要に思えないが、乙女心…男には分らないものだ。

それから裕奈に連れられ、洋服店に行き。

これがいい？それとも、こっち？

などと、たくさん質問をされながら買うものを買うものを持たされる。小物店なども散々回り、その後昼ごはんを食べるためにカフェに入る。

裕奈はどこからこの資金を調達したのか…それは謎であつた。そこで事件が起こったのだが。

「これはまた偶然だな」

と、自分たちの数テールほど先の客を見る。

どうやら、あちらはこっちに気づいてない模様だ。

「どうしたの？」

どうやら話しかけてこない僕を見て不思議に思つたらしいので、客を指差す。（行儀が悪いから真似はしてはいけない）

「え……」

そこに座っていた人物。
それは

「このかと…ネギ君！」

近衛このかとネギ君であった。

その後、裕奈が『これは禁断の恋の予感！？』などと言い始め、結局ネギ君たちの後を追うことになった。

「『いいフンイキー！』」

となぜか隣に立っていた人物と台詞が被った。

「裕奈！？」「桜子！？」

と、どうやら知り合いのようであった。

なんか嫌な予感しかないんだが。

と、いうか。何が『禁断の恋の予感！？』だ。

それが本当だったら、僕が学園長とかに報告しに行かないといけないじゃないか。

「裕奈は何をしてるのかな？」

「え！？」

その問いに赤面する裕奈。

おい、それは誤解されるだろう。

「ちょっと買い物に付き合っただけですから、なにかよからぬ誤解はしないでくださいね？」

ということで代わりにに僕が答えておきました。

「あ、この前からちよくちよく学校で見るようになった人じゃん」
勘がよろしいではないですか黒髪の人。

「はい、私は東鈴という者です。麻帆良女子中で公務員のボランテニアをさせてもらっています」

「へえ、そんなボランテニアだったんだ。あ、私は釘宮円、裕奈のクラスメートだよ」

なにやら落着きのある黒髪の女性は釘宮さん。

「あ、私は椎名桜子。気軽に桜子って呼んでねー」

元気いっぱいでのろしいけど少し騒がしい女性、椎名さん。決して下の名前では呼ばない。僕の些細な抵抗だ。

「私は柿崎美砂。ちなみに3人ともチアリーディング部所属だよ」
そんな部活あるのかこの学校、いや、普通あるのか。

「自己紹介もいいですけど。ネギ君たち行っちゃいますよ？」
指を指しながら指摘してあげると、その後すぐに後をつけはじめた。

近衛さんとネギ君の恋を応援しようとしていたのが、いつの間にか、委員長の私利私欲を応援することになっていた。

かわいそうなことに毎回邪魔されるネギ君と近衛さん。しかし、そのたびに何かを買う羽目になってるのだが、お金とか大丈夫なのだろうか？

いや、もしやばくなったら僕が払うけど。

そして、最後にたどり着いたのは静かな場所。

今現在はネギ君が近衛さんに膝枕をされている。

羨ましくない…と思っていたがやはり少しだけ羨ましい。

「私がしてあげよっか？」

と、僕の眼差しを読み取ったのか、誘いを受けるが。

「丁重にお断りさせてもらいます」

と、辞退する。何が恥ずかしくて膝枕をしてもらわないといけないのでしょうか？

「ええ、いいじゃんいいじゃん。私がしたいのー」

と、すこしじやれていると。

「もうそのカップルは黙っててよ！」
と、椎名さんに指摘を受けたので。

「いや、カップルではなく、裕奈は僕の妹のようなもので
「かかか、カップル!? (え、そうみえるのかな?)」

という感じでこっちをちらちらみてる裕奈。
ちゃんと釘は刺しておく。

「冗談ですから信じちゃだめですよ？」
そういうと、すねてしまった。

その後、何か近衛さんがネギ君にキスしそうに迫る!?
などがあり、結局は皆の早とちりということで、今回の買い物はな
んと明日菜さんへの誕生日プレゼントだったのだ。
ついでに、妨害するに当たって色々買っていたチアリーダー3人組
もその品々を渡している。

「それでは、僕からも」
と、指輪を一つ渡す。

ただの銀色の指輪。実は内側にはバツ印が書いてある。
その意味は、また別に機会に。

「あ、ありがとう」

ちゃんとお礼できる子は偉い子ですね。

そんなことをしていると隅のほうで拗ねている裕奈が居たので近寄る。

「なによ」

口を尖らせてそっぽを向く裕奈に一つ箱を渡す。

「プレゼントです」

「え？」

と、一瞬驚いた裕奈だが、渡した箱をまじまじと見て問う。

「でも、私今日誕生日でもないし…」

「去年の誕生日を祝ってあげていませんから」

去年は色々な都合により麻帆良から離れていた。

その時の裕奈の怒り様と言ったら。明日菜さん並みに暴れました。

「で、でも。あの後、ちゃんとプレゼントも貰ったし」

「まあ、いいじゃないですか」

そう言って箱を開けるように促す。

箱に入っていたのはネックレスであつた。
ぶら下がっているのは銀の十字架。
中心には青い石がはまっている。

「お守りだ」

箱から出してかけてあげる。

少し頬を朱に染める裕奈。

しかし、こちらに気づかないネギ君とその他。まるで、別の世界に
いる感覚。

「あ、ありがとう」

それ以降彼女は僕に話しかけてこなかった。

しかし、その口元は微笑んでいた。

その日の夜、またしても僕はエヴァの家を訪ねていた。

そして別荘の中に移る。

そこで少しエヴァと軽い戦闘をこなす。

今日の課題、それはつまり『オーバードライブ暴走』を扱うことだ。

暴走を扱うというのは少し矛盾しているは、用は暴走状態に慣れる
ことが重要だ。

僕の変化、魔族化と呼んでいるが、は一気に膨れ上がった魔力に体がついてこれないのである。

そのためにも大量の魔力を体を与えることでその大量の魔力に体を慣らすという訓練が開始された。

かなりの荒療治である。魔力の限界値を突き破り、無理矢理限界値を押し上げるのだ。

本来であれば、もっとゆつくりとやるものを僕は力技でやる。

魔力の供給はエヴァがしてくれる。

「じゃあ、よろしく」

椅子に座りながら、は誤りで、椅子に縛り付けられている。

「本当にやるのか？言っちゃあ何だが、死ぬほど痛いぞ？」

そう前回も体の痛みを体験したが、あの時ですら無様に片膝つくほどの痛みだったのだ。

それを持続的に受けるとなると、字の如く、死ぬほど痛い。

暴れだす可能性を考えて椅子には縛り付けてある。

「ああ、やるよ」

さあ、やってくれ と付け足す。

エヴァが僕の腕を掴む。

そこから魔力の奔流が暴れる。

最初はゆっくりと指の方に痛みが走る。
じわじわと腕をつたってくる　痛い？
疑問に思ってしまうほどのものだった。

一瞬気を緩めてしまった、その時だ。

「耐えろよ」

エヴァが静かに言ってくる。

その直後、心臓が掴まれた　魔力に。
全神経が痛みを感じる。頭が痛みに支配される。
何も考えられない、イタイイタイ
骨を粉々にされるような激痛を絶え間なく味わう。

「ぐっ… ああああ！！！」

身体が痙攣を起こす。

それでも、耐えなければいけない。
力が必要だ。力がなければ守れない。

友人に頼まれた最後の頼みだ。

きつと、ナギさんみたいに敵が多いはずだ。それと同時に味方もたくさんつくる。

その中にきつと裕奈もいるだろう。用意に想像できる。
なら守ろう。僕が守ろうと思ったものすべてを守ろう。
叶わない夢だってことは分かっている。しかし、だからこそ。

最善を尽くすなんて甘い。それは最初からできないと思っているのと同じだ。

だから、僕は誓う。心に、魂に。

「ぐううううう！！！！」

椅子の肘掛を力一杯掴む。

割れるかと思うほどの力が入る。

その状態が続くこと数時間。

エヴァの魔力が切れたらしい。

「大丈夫か、阿呆が」

心配してくれてるのは分かるが『阿呆』はどうなんだろう。

「フン、こんな無茶するのは阿呆以外いないだろう」
そう言って椅子を見る。

真っ赤だ。

自分の血で真っ赤に染まっている椅子がそこにある。

肉が裂け始めたのは始まって一時間くらいの時だった。

それでも自分の魔力を死ぬ気で扱いなんとか自己治癒能力で塞いでいく。

また裂ける、治す、裂ける、治すの繰り返し。

「まったく。少し横になっている」

って、最初から横になってますけど。
ベッド、というより大きなソファに寝かされている状態だが、全身
包帯だらけだ。

戻ってきたエヴァはなにやら指輪をはめてきた。

「これは、七転八起の指輪と昔私がふざけて作った代物だ」
その能力はただ痛みを緩和するだけらしい。
吸血鬼である自分にはまったく必要ない、と言う事で痛みは和らぐ
だろうとくれるらしい。

「ありがとう、エヴァ」

そう、色々ありがとう。

こんなに世話をしてくれて。
弱い僕を強くしてくれて。

そして、意識は暗転していった。
目を覚ましたとき自分の部屋に居た。
本当に不思議だ……

第21話―デートじゃない！断じて違う！―（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第22話―線上 on the border I (前書き)

今日から1週間弱、キャンプに行くので更新できません。すいませ
ん。

第22話―線上 on the border―

自分の部屋で瞑想すること数時間、その静寂を妨げたのは一つの電話であつた。

仕事用の携帯の表示は『学園長』と点滅している。

「はい」

瞑想して張り詰めていた精神を落ち着かせるために深呼吸をしてから答える。

『おー、鈴君。どうしたんじゃ？少し元気がないようだが？』

学園長にはあの訓練のことは教えていない。

学園長は仮にも組織の長。心配事は少ないほうがいいだろう。

「いえ、今起きたばかりだから寝ぼけているだけだと」と、誤魔化すが誤魔化しきれたかどうかは微妙である。

『そーか、そか』

「で、電話の用件はなんなのでしょう？」

『うむ、実は頼みたいことがあつての』

学園長がじかじかに頼むこと…

ネギ君のことだろうか？

『ネギ君の修学旅行についてでの?』

予想は的中。そういえば、裕奈も修学旅行に行くと言っていたか。

「はあ……あ、でも修学旅行には流石に行けませんよ?僕、尾行と
かできませんし。見つかったら面倒ですし」

流石に京都に行って『ああ、これもボランティアボランティア』な
どの言い訳は通じない。

神が許しても、裕奈が許さないだろう。

『はあ…そうじゃよな』

「あ、でも一応対策はしているので大丈夫です。本当に危険なとき
になれば駆け付けれます」

もう策は投じてあるし、大丈夫のはず。このために大金をはたいた
のだ。

『そうかの。なら、大丈夫じゃ。電話してすまんの』

「いえいえ、別に大丈夫です。では」

そう言って電話を切る。

ネギ君たちは京都に出発したその日、今日もまた僕はエヴァの別荘で訓練中であつた。

「はぁ…はぁ」

膝に手を置き、前に屈む。

吐き気がする。呼吸が間々ならない。足が動きそうにない。

「休んでる暇はないぞ！」

そして飛び掛ってくるエヴァ。

魔力で強化された彼女の身体能力は凄まじい。
ただの拳が岩を砕く。一步で数メートルの距離をつめる。

「まだ…まだあ！」

体を横に逸らし、相手の腕を脇に閉める。

腕を固定したところで思いっきり蹴りつけようとするが

「甘い!!」

腕を振り上げそれと共に跳んでいく僕。

エヴァの小さい体のどこにそんな力が…魔力ですね…

地面に受身を取れずにのた打ち回る。

それを許すエヴァでもなくまた殴りかかってくる。

その光景がゆっくりと迫る。

一度エヴァに聞いたことがある。

弱い僕はどうか戦えばいいのか？

強大な敵にどう立ち向かえばいいのか？

その問いに彼女は答えた。

フン、弱者の気持ちなど知ったことが
突き放し、そしてその後には付け足す。

見下しながらも、その目はちゃんと僕に向けられていた。

しかし、リン

勝たなくたっていい。
殺さなくてもいい。

足掻け

諦めるな。
足を止めるな。
前に足を出せ。

泥を嚼つても足掻け

『弱者なりにな』

ああ…なら、足掻いてやるうじゃないか。
勝てないほどの相手に勝つ可能性は低い。

ならば、その可能性を高くするだけ。

どんな手段をとってでも勝て。そして生きろ。

腕を振るう。

自分の手に付いた血がエヴァの顔面に迫る。

しかし、エヴァの手によってそれは阻まれた。

口の中が切れている。

口の中の血と唾液を集める。

少し息をして吐き出す。

霧状となってエヴァを阻む。

それでも、止まらない。

横に転がる。無様に、滑稽に。

それでも、僕は生きている。

体に力が入らない。それでも、生きているんだ。

拳が床を砕く。

そしてすぐにこっちを向く。

「光よ……」

初級者魔法。

自分の指輪から強烈な光が放たれる。

エヴァが光を直接目に受ける。

自分も目を瞑り、詠唱をする。

「我は偏在する、数多の敵を止めるため」

この分身は通常の自分、服が汚れていない状態の自分を映し出す。
どれが本物かは一目瞭然。

それでも、使わない手はない。

全員が上着を脱ぐ。

それをエヴァに投擲。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！来れ、虚空の光、射殺せ
！光の槍！」

光の槍をその服に向かって投擲。

しかし、それを片手で服もろともなぎ払われる。

そこに迫る分身の一人。

そしてそのすぐ後ろにもう一人。

「こんなもの！」

前の一人が分身だと気づかれすぐに殺され消える。
その瞬間を狙う！

「らあ！！」

今の自分が放てる最善の拳。

吸い込まれるようにエヴァの顔に向かっていく。
音速を超えた拳が放たれ、かわされる。

そして、腹に衝撃が走る。

気づいたときには床に転がっていた。

しかし、エヴァは攻撃してこない。

「できるじゃないか？」

頭を少し動かすのも億劫な気持ちを抑え、見上げる。

エヴァが居た。どの頬にはかすり傷が一つ。少し血が出てる。

「まあ、これでも一撃は一撃だな」

そう言つて、得意でもない治癒魔法を使ってくれる。

その中僕の意識はだんだん薄れていく。

「お、おい。寝るんじゃないぞ」

ああ、もう目も開けていられない…

このまま寝てしまおう。そう思ってしまった

その魔法は、とても暖かったから……

連絡があつたのは、ネギ君たちが修学旅行に出て3日目のこと。

『どうやらネギ君のほうでトラブルがあつたようじゃ』
と、学園長からの連絡だった。

なにやら、色々な妨害を受け、近衛さんが一度の誘拐に会い、一度殺されかけ、ネギ君は親書を届ける妨害を受けた。
そして立った今、西の本山に敵襲があつたらしい。
と、いうことで増員として僕が雇われた。

その連絡にすぐ、はい、と答え移動の準備をする。
今回の移動方法は『転移』の魔法。
僕はそんなすごい魔法が使えるわけもなく、これは僕が特注で作ってもらった転移符だ。

『バツからバツへ』

そう呪文を唱えると、僕は忽然と麻帆良から姿を消した。

あらわれた場所は湖の中心。
そこには光り輝く巨大な鬼がたたずんでいた。

あの転移符、バツの印を付けてあるものの半径50メートル以内に転移するものだ。

神楽坂さんがバツの印を持っていたので、彼女の半径50メートル以内に転移しているはず。

と、周りを見渡し彼女とネギ君を探す。

彼女たちが立っていたのは湖の中心に続く木でできた廊下の上。

どうやら彼女は転移させられたばかりのようで、自分の運がよかったことに感謝する。

ネギ君の対峙している敵を見る。
白髪の少年。忘れるはずがない。

アーウェルックス

20年前の大戦のときの敵。
あの大戦の残党。

「アデアット」
指輪が指にはまる。

「我薙ぎ払う、我の敵全てを」
魔法の矢がアーウェルックスに飛来していく。

しかし、予想通りというべきか、それは当たる前に障壁に阻まれる。

虚空瞬動で廊下まで移動する。

「下がっててください」
後ろにいる2人に忠告する。

「ここからは、君たちの立つべき場所じゃない」
そう言つて、刀を一本作り出し、正眼に構える。

「まさか、こんな所で会うとはね リン・イースト」
一歩ずつ歩いてくる敵を見据える。

「僕もまさか、会うとは思っていなかったよ フェイト・アー
ウエルンクス」
自分では太刀打ちできないような相手。
見なくとも分かるくらい強固な魔法障壁。

戦闘の切欠なんてなかった。
僕の本能が、なけなしの経験が警告を促す。

来る!!

「私の盾、我を害するものすべてを弾く」
突然、響く激突音。

フェイトの拳が結界に当たった音だが、拳が出せるような音では到底ない。

「そうだったね、君の結界は固いんだったね」
そう言っただけでも殴ってくる。
どうせ、分かっている。

僕の結界は中途半端に固い。弾くことはできる、でもいづれは壊されてしまう。

その結果は変わらない。むしろ、フェイトの攻撃を防いだことは褒めて欲しいものだ。

ピシッ…

結界にひびが入る。

僕の後ろにはネギ君と神楽坂さんがいる。
戦闘慣れしていない女子生徒。
魔法で石化が進んでいるネギ君。

絶対にここを通すわけにはいかない。

しないで後悔よりして後悔。
泥水を啜ってでも生きる。
少ない可能性にでも賭ける。

腰につるしていた緋陰の柄を握る。

パリン

結界が割れる音がする。

それと合わせて緋陰を抜き放つ。

体の激痛も訓練のおかげかあまり気にならなくなった。

体が燃える感覚がする、痛くはない。

魔力が暴れる中での魔力操作になれたからか、難なく瞬動が行えた。

抜き放たれた刀と同時に瞬動で全身して突進する。

振り上げのモーションで敵の障壁に阻まれ止る。

「なんだい？その姿は？」

アーウェルンクスは余裕の表情で聞いてくる。

「教えるか」

全身に力を入れる。

魔力を制御しようとする。

その瞬間体に今までにない激痛が走る。

しかし、それは力を緩ませるところか強ませていた。

訳が分からない、しかし、その思考に反して体は勝手に動いていた。

「らぁぁ！！！！」

障壁に阻まれていたはずの緋陰が障壁に食い込み始める。

「なっ」

それに驚愕するフェイト。

しかし、とき既に遅し。

「はぁ！！！」

その一閃は凄まじい速度で振りぬかれた。

第22話―線上 on the border I（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323n/>

平凡と理不尽が刻む物語

2011年9月29日22時43分発行